WA和

23rd WORLD SCOUT JAMBOREE SCOUT MONDIAL JAPAN 2015

和

報告書

0406 隊（茨城 1 隊）
0407 隊（茨城 2 隊）
0408 隊（茨城 3 隊）

JAPAN 2015
23rd WORLD SCOUT JAMBOREE SCOUT MONDIAL YAMAGUCHI KIRARA BEACH
第23回 世界スカウトジャンボリー
2015年7月28日～8月8日 山口県山口市阿知須きらら浜
JAPAN 2015
23rd WORLD SCOUT JAMBOREE SCOUT MONDIAL
第23回 世界スカウトジャンボリー

23rd World Scout Jamboree in 2015
IBARAKI・TOCHIGI
UNIT No.6,7,8 4th DIVISION
JAPAN CONTINGENT

❖ 7月28日　出発

23WSJ の 13 日間

23WSJ の 13 日間を振り返ってみます。0407 隊ホークス班の班長 根岸 由弦 くん（つくば第1団）がまとめてくれていました。

期間：　平成 27 年 7 月 28 日　～　平成 27 年 8 月 9 日
場所：　山口県山口市阿知須きらら浜
テーマ：　和　WA　a sprit of unity

7 月 28 日（火）

6：00　起床
TX の車両点検のため電車が遅刻。また、人身事故のため常磐線が遅刻。
集合時間には間に合った。
15：05　新山口に到着。
イギリス隊やスウェーデン隊がいた。
16：30　きらら浜に到着。
到着次第設営
*設営時に動いていないスカウトに指示をだし動かした。
23：20　就寝
※一日目は動きが悪かった。
でも、自分の班はスムーズに活動が出来た。

7 月 29 日（水）

5：15　起床
6：00　朝食
8：00　点検　制服
8：15　朝礼　当番班たけのこ
A.M　設営　ゲート　テント　柵
P.M　FTA（Free Time Activity）
ドームの方まで歩いていった。
夜：　開会式
英語だったので聞き取るのが大変だったけど理解できた。
23：30　就寝
※ 2 日目は楽しめた。
協力して、ゲートを建てて、早く仕事が終わった。

7 月 30 日（木）
広島ピースプログラム

3：30　起床　（当番班のため）
4：00　配給
5：00　サイト出発
5：30　バス出発
広島：平和記念公園・資料館・朗読会
初めての広島だったので教科書よりも更に身近に体験できた。
13：50　バス集合
15：30　きらら浜到着
16：30　配給
※今日は、一日集中して活動に取り組めた。当番班で大変だった。

7 月 31 日（金）
【GDV ／サッカー WCP】

A.M　GDV
・イギリスのカロリーについて
・日本のソーラーについて
・薬物乱用はだめ絶対について
＆ヤクルトについて
※英語でカロリーについて学ぶには少し化学の授業を受けてるみたいだった。
P.M　サッカー WCP
00407 隊 VS ノルウェー
0：3 惜しいところで点を決められなかった。悔しいけど終わった後の握手が出来てよかった。
20：10 ～ 21：00
ベルギーと交流
アブラハム　よさこい　交歓
※今日は、一日充実していた。
楽しく怪我なく過ごすことが出来てよかった。

8 月 1 日（土）【コミュニティー】

美祢市　歓迎セレモニー
・和太鼓　吹奏楽演奏　空手
メダル鋳造体験
・長登銅山文化交流センター
秋芳洞見学
地域の小学生と交流が出来た。
楽しかった。
秋芳洞は涼しくて過ごしやすかった。
17：00　きらら浜到着
18：00　夕ご飯
※山口県の文化を体験することが出来てよかった。特に鋳造体験は、一生に一度の体験だと思うので出来て良かった。
※秋芳洞は教科書で見て知っていたが、直接見ることが出来てよかった。

8 月 2 日（日）
【WFF ／アリーナショー】

8：00　朝礼
10：00　までテント乾燥
11：00 ～ 12：00　宗教儀礼　仏教章の集い
12：00 ～ 15：00　ワールドフードフェスティバル
ーイギリス　インドネシア　日本　イツ　オーストリアー
15：45 ～ 19：30　アリーナショー
総理大臣　皇太子　ブルーインパルス　室屋さんの飛行機ショーなど
20：00 ～ 22：00　夕食
※内容の詰まった一日だった。
単純に楽しかった。
各国の食文化を体験することが出来て良かった。

8 月 3 日（月）
【サイエンス／ FTA】

8：00　点検　終わり次第朝礼
A.M　サイエンスモジュール
理化学研究所の分光学：
英語で理解するのが大変だったでもやさしい英語で話してくれたので分かりやすかった
千葉県の測量：
伊能忠敬の測量について学んだ。自ら長さを測った。
P.M　FTA　スカウトショップ
WSC
ワールドスカウトセンターでは各国のブースに行って様々な体験をした。
ースペイン　ドイツ　スイス　アイルランド　イタリア　インドネシアー
夜　班会議　今までの振り返りとこれからの目標
※今日は、楽しかった。特に WSC ではその国特有の体験を出来た。

8 月 4 日（火）
【ネイチャー　秋芳洞　秋吉台】

8：00　点検　終わり次第朝礼
9：25　サイト出発
二回目だったけど一回目よりも発見が多く楽しかった。
14：45　きらら浜到着
～ 17：00　FTA　野球をした（海外スカウトも）
19：00 ～ 20：30　茨城 3 隊とスコットランドと交流
よさこい　ハンカチ落し　交歓
20：50 ～　ハブ本部でスコットランド民謡披露に参加
※交流が出来てよかった。サインをもらって少し話した。

8 月 5 日（水）
【ウォーター／ WSC】

8：00　点検　終わり次第朝礼
9：00 ～ 13：45　ウォーター
レボ班と一緒に行動した
ウォーターガン　ビーチフラッグ
ビーチバレー　海水浴
14：00 ～ 15：20　WSC
ドイツ　スイス　ハンガリー
シンガポール　コロンビア
15：30 ～ 16：20　荷物チェック
落し物探し
16：30 ～　FTA　野球
※今日、一日はかぜをひいたため次長に指示を出させた。班長と次長の 2 人で指示を出すと、早く行動が出来るとわかった。
※貴重品の管理は徹底して（盗難がありました）

8 月 6 日（木）
【FTA ／カルチャー】

8：00 ～ 8：15　静かに行動
8：15 ～ 8：16　黙禱
（原爆投下 70 年）
A.M　ハンドブックの友達サイン（10 人）
よさこいの練習　（夜　披露）
シャワー
14：00 ～ 16：20　カルチャー
庭園　石川県の金箔　コロンビアダンス
※各ブースで文化について学んだ。
コロンビアダンスは、疲れた。
～ 17：00　FT　よさこい練習
19：40 ～　ハブ本部でよさこい披露、練習の成果が出た。
※内容の詰まった一日で楽しく過ごすことが出来た。
※特によさこいは練習した結果がでた。そしてたくさんの人に見てもらえて達成感が出た。

8 月 7 日（金）
【FTA ／閉会式】

8：00　点検　終わり次第朝礼
9：00 ～ 10：30　ハンドブックの終わってないのを終わらせる　（サイン 10 人）
11：00 ～ 12：10　ワイドゲーム
「○そなえよつねに和」の 9 文字と指導者1名の 10 人そろったらその 10 人で昼ごはんを食べる
自分はすぐに集まった。
ー　アメリカ　フランス　ドイツ　デンマーク　栃木　イギリス　など　ー
17：30 ～ 22：00　閉会式
とうとう終わってしまうのかと感じた。遺り残したことがなくてよかった。
23：30　就寝
※閉会式が終わって少し悲しい。
でもまだあるから気持ちを落さずにがんばる。

8 月 8 日（土）【撤営】

8：00　点検　終わり次第朝礼
着替えてテントから撤営開始（19 張）
ペグの刺し残りを探すのが大変だった。
少し動きが鈍く注意されるスカウトもいた。
12：10 ～ 16：30　FT
広くなったサイトを使って野球をした。
広かったのでやりがいがあった。
～ 18：00　夕ご飯
ターフ撤営
協力してスムーズに終わらえせた。
～ 21：45　暇
スカウトショップへ移動
24：30　スカウトショップを借りて就寝
※一日疲れた。
撤営は大変だったけど協力して終わらせた。

8 月 9 日（日）

5：30　起床
7：05　バス乗車
7：10　きらら浜出発
9：20　広島駅到着
～ 10：30　フリータイム
11：00　のぞみ 160 号乗車
15：03　東京駅到着
～ 16：00　到着式、解散
※東京駅に着いたときは達成感と感謝で一杯だった。

日本派遣団 0406 隊

所属　ENA サブキャンプ

隊長
　本橋　成規　（筑西第1団）
副長
　熊田メリアン（北茨城第1団）
　永島　治一　（筑西第1団）
　森田　俊二　（水戸第4団）
　藤田　秀一　（水戸第4団）

キグナス班

白井　栄全　（水戸第8団）
笠井野乃果　（日立第6団）
山戸鼓都菜　（城里第1団）
飯村　周平　（水戸第4団）
森田　壽一　（水戸第2団）
福島　　駿　（日立第5団）
篠崎　雄飛　（水戸第2団）
加葉田　駿　（日立第7団）
川井　　陸　（日立第8団）

ビートル班

小池　惇晧　（小美玉第1団）
齋藤　由衣　（水戸第4団）
池田　啓悟　（水戸第8団）
渡辺　愛哉　（水戸第2団）
薄井　太陽　（日立第6団）
千葉孝太郎　（水戸第1団）
大場　友樹　（水戸第8団）
友田　有信　（水戸第5団）
松田樹生也　（日立第6団）

フェニックス班

矢島　右喬　（水戸第1団）
小杉のどか　（水戸第8団）
遠藤　　晶　（日立第5団）
境　　要明　（水戸第2団）
増子　　司　（日立第8団）
伊藤　勝敬　（水戸第4団）
鈴木　翔大　（水戸第8団）
山本　　樹　（日立第8団）
鈴木　寅矢　（ひたちなか第2団）

ザクロ班

浅野　　哲　（ひたちなか第2団）
熊谷　沙羅　（日立第8団）
友田　成保　（水戸第5団）
白石　和輝　（水戸第8団）
横須賀颯太　（水戸第1団）
鈴木　　空　（水戸第4団）
鈴木　伊織　（城里第1団）
長谷川二朗　（水戸第2団）

406隊　（茨城第1隊）
隊長　　本橋　成規

「和　Spirit of unity」をテーマに山口県山口市阿知須きらら浜にて 23WSJ に参加しました。

事前訓練を 3 回行い大会参加に向けてスカウト及び指導者を訓練しましたが、事前の情報がなかなか集積できず、大変苦労しました。中でもスカウトが参加するプログラムについて事前に説明出来ず参加する内容について説明するのに大変苦労しましたが、事前訓練については、参加するスカウト及び指導者の協力体制及び絆が深められ大変良かったと思います。

大会に入ってからは、大会テーマの「和」を理解し、外国スカウト達との交流、参加プログラムの活動、場内での交流等活動が活発でした。中でもスカウト通信員・宇宙ステーションとの交信に参加して隊員同士で大変盛り上がり活動出来たことは良かったです。

特に、広島ピースプログラムに参加してスカウト達が真剣に平和を考えることができ、改めて平和についてスカウト達が意見交換をしたことが大変有意義だったと感じました。

ただし、幾つかのプログラムについては、スカウト達が参加出来ず残念な思いもしました。例えば、ウォーターのプログラムでは、炎天下の中2時間以上待ったあげくプログラムを断念するなど残念なこともありました。カルチャーモジュールについては、地域の方々との交流を十分楽しめた感じがしました。サイエンスモジュールについては、外国隊のプログラムがかなり理解するのが難しかったみたいだが、スカウト達は互いに協力して楽しんだようでした。

次に期間中の生活についてですが、残念ながら期間中トイレが故障したり、シャワーの利用が乱雑になりスカウト達は、困惑したようです。外国隊の使用が特に乱雑なような気がしました。また、配給のやり方が少し変な感じがしました。特に最初の頃は、ガス缶が無くなったり、配給時間が午前4時から並んで配給を待つことになったりして、スカウト達は苦労していたみたいでした。前日にリクエストを取って時間通りに配給してもらえるように考えてもらえればありがたいと思いました。又、ゴミの問題もありました。配給品のゴミの多さに苦労しました。再利用が出来るよう工夫が必要だと考えることも必要だと思いあます。

サイトについては、かなり狭い印象でしたが、それなりに快適に生活できたと思います。配給された備品については、事前に解っていたので十分に活用できました、ただし、炊具類については、もう少し改善してほしいと思いました。

外国隊との交流については、スカウト達は、かなり活発に活動していました。但し、残念ながら場所が狭く、ファイヤーが出来なくて、少し残念に思いました。

大会全体を通して、スカウト達はかなり成長した感じがしました。特に13日間のキャンプ生活、外国隊の中での生活、会話が外国語の生活等、初めての経験が大変有意義に感じました。特に世界の広さ，たくさんの友、世界平和について、など今後のスカウト活動に生かしてもらいたいと感じました。

最後に、今回大会に参加するにあたり、茨城県連盟の方々、地区役員の方々、関係指導者の方々のご協力に心から感謝致します。

ジャンボリーを通して

キグナス班　飯村 周平

私はジャンボリーに行き学校などではできない体験をしました。外国人との交流を通じてわかったことや感じたことがたんさくありました。

外人が持っているものを日本人は持っていなく日本人が持っているものを外人は持っていないということが真っ先に感じました。したプログラムをひなしていきつらかったけれど返ってきてからふりかえってみるとやっぱりたりしかったしまた行きたいと思いました。

私が一番覚えているプログラムはやはり広島ピースプログラムだと思います。

自分の国のことでもうっすらわかっているというていどのものだったのがじっさいに行って自ら学ぶことでさらに理解をふかめていくこれこそ学校ではできないことだと思っています。

そして、私たち日本人が外国人に見習うべきなところはあの自由なところだと思います。日本人はNO と言わないとよく言われますが外人ははっきりと NO と言います。このちがいこそがいちばん見習うべきである点だと考えます。

またプログラムで行ったとき話をされたことがよく覚えています。「国どうしで仲良くすることはむずかしいけれどコミュニティーでなかよくすることはできる。」と言われました。確かに国どうしでは難しいけれどボーイスカウトというコミュニティの中では仲良くできる。このとき言われたことをぜったいに忘れないと思いました。そして、この考え方が、今、世界のさいせんたんなのだと言われました。本当がどうかわからないですけど少なくともぼくはそう思いました。

今回ジャンボリーでまなんでことや感じたこと、みてきたものや、きいてきたもの、ジャンボリーの全てをわすれないでいようと思いました。

誇りと熱意

ビートル班　小池 淳皓

私は今回、第 23 回世界スカウトジャンボリーに参加し、普段は接することの出来ない多くの体験をしてきました。その中で私は自分なりに成長できたのではないかと思っています。

第一に私は日本代表派遣団の一員として誇りを持ち、熱意をもってこの大会に参加しようと志して参加しました。今までのキャンプに参加してきたこれまでの私はどちらかと言うと受身な人間でした。しかし今回、ある訓練キャンプで隊長がおっしゃった「あなた達は選ばれてここにいる。」。この言葉が私には響き、心を新たにするきっかけとなりました。その日から私は先を見通し、自分に出来ることを見極め行動する努力をしました。私は自分がこれまでとは違う自分であると思っていました。しかし、それは本当は成長ではなく、ただの自己満足だったのです。

私は班長でした。しかし班員に指示をすることなく、自分で行動し、班員達は座っているだけでした。これをみた隊長に「お前は仕事をするな、座ってろ。」と叱られました。私は言っている意味が理解できませんでした。理解できないまま、言われたとおり座っているだけで時間が過ぎていきました。他の班に比べ、大幅に作業が遅れ、次第に私はまた手を出すようになりました。しかし大幅な遅れは縮まらず、頭を悩ませました。その時、やっと隊長の言っている意味が分かったのです。班長は班員に正確な指示を出すのが仕事であることに。

次の日から私は指示をして効率のいい方法作業を班員にさせました。勿論、最初は班員はいい顔をしませんでした。しかし事情を話したら皆、納得してくれ、協力してくれました。

次に私は外の国の文化や習慣を感じ、理解し、友情を深め合い友人を沢山作ってきました。今後の社会を担っていく私たち。この経験を活かしてより良い社会にしていこうと思います。そして私たちのように世界のみんなが寄り添い、手を取り合って生活していけたらとおもいます。話が大きくなりすぎている気がしますが、隗より始めよ。まわりの人々とのふれあいが大切になっていくとおもいます。

以上では語りつくせないことが沢山ありますが、一言で表すと「楽しかった。」。

それ以外はなにもありません。この経験は今後、私の生活に大きな良い影響を与え、私が進む力でもあり、道しるべにもなると思います。私は今、大学受験と言う人生の大きな分かれ目に立っています。不安なことも多いです。しかし昨日までの私が今の私の背中を押してくれ、明日へと繋げていけます。

最後に、この経験をさせてくれた両親や隊長、副隊長、関わってくださった全ての方に感謝し、大切な思い出にします。

世界ジャンボリーに参加して

ザクロ班　熊谷沙羅

茨城隊の結隊式の後、事前訓練で一緒になった班には私と同じ地区からのスカウトが配属されていなかったので、少し不安がありました。しかし、世界ジャンボリーが始まって、たくさんのプログラムやサイトで班の仲間たちと生活していくうちに少しずつみんなの事が分かってきました。

世界ジャンボリーの中で私が一番楽しかったのはアリーナショーです。海外のスカウトもアニメソングになると、とてもテンションが上がって、それを見ているだけでも面白かったし、一緒になって盛り上がることができたので一体感を感じることが出来ました。

場内プログラムの GDV では、地雷除去の体験をしました。地雷を発見する機械はとても重くて短い時間でも持っていると手がしびれてきます。世界には、まだまだ地雷がたくさん埋まっていて、命を落としたり、大怪我をしている人がたくさんいるということを知りました。日本で普段の生活をしている中では、そんな国があるということに気づくことが出来なかったと思います。

ジャンボリーと言えば、交流会も楽しみの一つです。私たちは東京の隊とイギリス隊と交流しました。東京の隊で行った交流会では「鬼のパンツ」を英語バージョンで行いました。また、イギリス隊との交流会では、私の話す英語があまり伝わらなかったことがありました。事前に英会話の勉強をしていただけに、とても残念です。

一隊のスカウト何名かで「コスプレ」をしようということを決めていました。それぞれが持ってきたメイド服を着て、アリーナショーや交流会に参加しました。海外のスカウトから写真を撮られたりして、とても評判が良かったと思います。日本の文化を紹介できて良かったと思います。

前回参加した日本ジャンボリーとは少し違いました。前回もゴミやトイレは汚かったのですが、今回はそれ以上に汚かったと思います。トイレは便器が壊れていて、「何をやったらこんな壊れ方をするのだろう。」と不思議に思うことがありました。おそらく海外のスカウトの使い方が雑だったのだと思います。

日本で 44 年ぶりに開催した世界ジャンボリーに参加する事が出来て、私は幸運だったと思います。これから私はベンチャースカウトになります。ベンチャー隊でも活動と学校生活を両立させ、次の北米で行われる世界ジャンボリーにも参加してみたいと思います。

最後に、今回の世界ジャンボリーに参加する事が決まってから英語を教えてくれた熊田副長や多くのサポートをしてくれたリーダーの方々に感謝したいと思います。

第 23 回世界ジャンボリーに参加して

キグナス班　笠井 野乃果

今回のジャンボリーは私にとって 2 回目のジャンボリーでした。そのため、前回の反省を踏まえ、余裕を持って大会に臨むことができました。

また、今回の大会ではいくつかの目標を立てていました。それは、英会話力の向上と、悔いのないように生活することでした。

外国人のスカウトに話しかけるのは、初めはとても勇気のいることでした。しかし。だんだんと慣れが生じ、たとえ拙い英語でも、相手は理解しようとしてくれることが分かり、相手と意思疎通がとれたときは嬉しかったです。

では、悔いのないジャンボリーだったかというと、その目標は達成できたとは言えません。もっと楽しめたはずだったな、ということと、たくさんの人に迷惑をかけてしまったことを後悔しています。しかし、そんな私のことをいつも励ましてくれた隊の仲間、通信員の仲間には本当に感謝してもしきれません。

私が今回のジャンボリーで最も思い出深いことのひとつに、県の代表として参加させていただいた、スカウト通信員の活動があります。最初、隊長からやってほしいと言われたときから、ジャンボリーに行くまでは本当に不安でした。最初のミーティングも全て英語で、きちんと仕事をこなせるか心配でした。しかし、英語で記事を書いたり、野口宇宙飛行士へのインタビューをしたり等、自分の英語力の低さにつらくなることもありましたが、貴重な体験をすることができました。また、通信員ではいい仲間を持つことができました。彼らとは、今でも連絡を取っています。

私がジャンボリー中驚いたことは、外国人との考え方、生活スタイルの違いです。たとえば、日本人である私たちは朝礼などをするのに対し、外国隊ではあまりそのような雰囲気はなく、それぞれが自由な感じがしました。また、やはり自分の意見を発表したりする等の積極性は外国人の方が長けているな、と感じることが多かったです。

あの二週間、きらら浜は世界一平和な場所だったと思います。人間、本当は国境も、宗教も、言語も何も関係ないと思います。世界には様々な考え方の人がいて、相互理解によって社会は成り立っているということを、身をもって理解できました。ジャンボリーを通して、将来やりたいことも少し見えてきたような気がします。私がボーイスカウトを始めた頃は、まさか自分が世界ジャンボリーに行くとは思っていませんでした。しかし、今までずっと続けてきて良かったと思います。正直、期間中は返りたいと思っていましたが、今になってふり返ると、ジャンボリーに戻りたいと強く思います。こりジャンボリーで得た経験を糧に、広い視野を持つグローバルな人間になりたいです。

この経験を生かしたい

フェニックス班　小杉 のどか

私は、世界ジャンボリーとその前の期間に様々な経験をしました。

１つ目は、部活動との両立です。私は，バレー部に所属していました。バレーボールはチームスポーツなので、ボーイスカウトの活動で部活を休むことに理解が得られませんでした。それに、レギュナーを諦めなければならなかったりし、辛い思いをしたことも色々ありました。しかし、ジャンボリー中、バレーで身に付いた体力であまり疲れなかったりと、バレーを通して学んだことが自分の役に立つことがありました。辛くても、バレーを続けていて良かったと思っています。

２つ目は、たくさんの国の人や分化にふれることができたことです。外国人がたくさんいて、まるで外国に行ったみたいでした。それに、ほとんどの外国人は、にぎやかでノリが良くユニーな人たちでした。また、フードフェスティバルでは、いろいろな伝統料理わ食べたり、民族衣装を見ることができてとても面白かったです。他にも、オフサイドプログラムで長門市に言ったとき、たくさんの外国人が楽しそうに日本の祭を体験しているところを見るのは、とても新鮮でした。また、日本人と外国人の清潔に関する基準の違いを感じる機会もありました。今回、汚れている地面に平気で座ったり、汚物だらけのトイレに裸足で入る外国人も多く見かけました。それを見ると、日本人は清潔だなと改めて思いました。

３つ目は、英語力についてです。私は、今回に向けて、英検準二級を取りました。しかし、それが役に立つことはありませんでした。なぜなら、今まで英語で会話をする機会があまりなかったからです。最初は何を言っているのか聞き取れ無かったけれど、英語に耳が慣れて分かるようになりました。しかし、すぐに英文を作ることと単語力がなく、会話が続かなかったり何も言えなかったりすることが多く、もどかしい思いをしました。ジャンボリーでは英語が話せないと不便です。何をするにも英語が必要弟巣。なので、英語がペラペラな外国人達を見ると、自分が恥ずかしいなと思うときもありました。しかし、ジャンボリー語、ホームスティで私の家に来た子たちに積極的に話しかける私を見て、母が「成長したね」と感心していました。自分ではそんな気はしなかったけれど、少しでも進歩できて嬉しかったです。これからは、えいごをもっと頑張ろうと思います。

貴重な体験をたくさんし、楽しい思い出がたくさんの世界ジャンボリーでした。これからも、この経験を原隊や普段の生活に生かして頑張りたいです。

英語力

ビートル班　千葉 孝太郎

外国にも友人を作る。これがジャンボリー中に行うこととしてあげた自分への課題だった。しかし、現地に着いた私はとんでもないものを忘れていた。なにを忘れていたのかというと、外国に友人を作るのであれば「英語力」が必要なのである。しかし、私は英語が全く以て出来無い。それも、洒落にならないくらい。例を出すなら中学の時に英語で二がつくくらい出来無い。そんな綿波が友人を作るという事は、相当な努力をしなければ行けない。しかし、そのことに気がついたのは現地。しかも、バスの中だ。ここで私は楽しむことを忘れてしまった。プログラムの説明も英語。周りを行き交う人が話すのも英語。それどころがアラビア語、フランス語、ドイツ語など意味どころが聞き取る事すら出来ないことばが飛び交っていた。知らない言葉のオンパレード。この時のわたしは最早外国語恐怖症になっていた。しかも、外国語恐怖症になっていた私に楽し事を思い出させてくれたのは、中日にあったアリーナショーだ。アリーナショーでは、国内外のアーティストがたくさん来て、すごく盛り上がった。特に私が大好きなアーティストが来たときは感極まって泣いてしまった。それくらい楽しかった。その日以後、毎日が輝いていた。どんな宝よりも光り輝く。とても眩しい日々へと変わっていった。耳が慣れてきたせいか、少しずつ英語も聞き取れるようになり外国語恐怖症だったことが嘘のように思えた。自分の持っている英語力をフルに使い、ナンとか外国の人と話せるようになりやっと英語力が身についた。やっと外国の友人を作ることが出来る。そう思った時に来てしまった。そう最終日が。閉会式も国内外のアーティストが来て盛り上がった。しかし私はそんな事よりも自分に対する課題をクリアする事ができなかった事がとてもショックだった。

ふり返えると外国語恐怖症だった時もそうでない時も、時間がとてもキラキラ輝いていた。直視する事も出来ない程、眩しく。美しく。あの時に戻れたらいいのに。そんな事も思った。しかし、これで良いのだ。戻ることの出来無い。一瞬たりとも無駄にすることの出来無い。そんな時間。だから輝く野田。だから記憶の中にこんなにも美しく、繊細に輝くのだ。

私はこのジャンボリーで沢山の事を学んだ。きっとこの経験はこれからの私の人生にに多大な影響を及ぼすだろう。厳に、もうジャンボリーのおかげで一つの目標が出来た。それは「英語力」をつけることだ。

ジャンボリーを通して学んだこと

フェニックス班　山本 樹

私は、この WSJ23 を通して学んだことがある。

ひとつは、海外の人との文化の違いを理解し、それを尊重するということである。例えば、宗教ではイスラム教を信仰する人は１日に５回、メッカ

に向かってお祈りをするというものがある。私はそれを目にすることは日常生活の中ではなかったが、ジャンボリーに行ったときに１度目にした。

普段の日常生活の時にもしそれを目にしていたら「何をやっているんだろう」という疑問を持っていたが、私はこのときに「この宗教間の違いを理解すること」がパレスチナ問題など、宗教間の対立を緩和する１歩になるのではないのかと思った。

その他にも、握手するときの出す手など、ジャンボリーでは文化の違いなどについても考える場面が多く、この経験は将来海外に行った時などにも役にたてていきたいと思う。

二つ目は海外の人と日本人のマナー意識の違いである。

私は、16NJ にも参加したことがある。その時も同じ山口のきらら浜でキャンプをしたのだが、特に今回の WSJ23 のアリーナショーで海外の人と日本人のマナー意識の差を実感した。16NJ の時のアリーナショーの後はゴミがあまり散らかっていなかったのだが、WSJ23 のときのアリーナショーの後はかなりゴミが散らかっていた。また、水洗トイレに「Don't use!」と書いてあるにもかかわらず、その張り紙を破壊して入っている人もいた。このことから考えて、私は日本人のマナーの良さというものを再確認した。アメリカでは『タイムズ･スクェアの交差点では日本人とドイツ人はすぐにわかる』という皮肉がある。なぜなら、ドイツ人と日本人だけは必ずといっていいほど信号をきちんとまもっているからだ。だが、私はこのことに関して日本人は誇りを持っていいと思う。この意識の違いがこのようなジャンボリーという場で出るのではないのかと私は思うのである。

最後に、海外の人とのコミニーケーションである。

私はこのジャンボリーを通して、たくさんの海外の人と対話することができた。その時に私は日本の漫画が世界に広がっていることを実感した。いろいろな外国人に「Do you know ONE PIECE?」などと聞かれたからである。私はあまり漫画を見るほうではなかったが、彼らとの会話では中々に盛り上がることができた。

このように、私はジャンボリーを通して様々な貴重な体験をすることができた。この体験を基にこれからのスカウト活動、及び国際交流などに役に立てていきたいと思う。

最後になるが、この WSJ23 への旅立ちを支えてくださった両親や団のリーダー、そして、私たちの活動を指導してくださった茨城第１隊のリーダー方に深く御礼の意を申し上げ締めの挨拶とする。

世界ジャンボリーに参加して

ザクロ班　浅野 哲

今回自分は第 23 回世界ジャンボリーに参加しました。

会場に入って最初に驚いたことは日本ジャンボリーの時より外国隊が多いということでした。世界ジャンボリーなので外国隊が多いというのは予想していましたが自分の予想を超えるほどだったので驚きました。ですが自分はいろんな国の人がいるということはその分安全に気を付けなければならないことだと聞いていたので自分の所持品の管理には特に気を付けていました。

自分は日本ジャンボリーにつづき今回も班長としての参加でした。

今回のジャンボリーではいままで体験したことのないようなことを体験できたと思っています。班としてどうだったかは自分では一人一人がとても個性的で他の班より個性あふれる良い班だったと思います。ただ個人的には反省点も多くこの反省を忘れずにこれからの原隊での活動に活かしていきたいと思いました。

大体の日程

１日目（28）会場入りバスの外を見ると多くの外国隊がいた。すでに設営の終わっている隊がいた。

２日目（29）１日目の設営のつづき、テントの位置調整など

３日目広島 (30) PEACE プログラム とても晴れていて暑かった。戦争についての資料などを見て回り朗読会を聞いた後、敷地内で自由行動。戦争の愚かさ、核兵器の恐ろしさを学ぶことが出来た。

４日目（31）午前 GDV (Global Development Village) 地雷の除去体験などを体験することが出来た。

５日目（１）コミュニティー

常盤動物園に行きソーラン節のレクチャーを受けるその後動物園に行きお猿を見てきた。

６日目（２）原爆の日朝黙とうをささげるお昼はフードフェスティバルでそうめんを作りふるまう。班単位で行動しいろいろな食文化を学ぶ。

夜は待ちに待ったアリーナショウ とても盛り上がった。

７日目（３）サイエンス

定番のヤクルト、電気自動車などの説明を受けた。折り返しのため班員に疲れが見えた。

８日目（４）ネイチヤー

じやんけんに負けてハイキングになる救護法やロープワーク、キムスゲームをやった。

９日目（５）ウォーター

午前はビーチでバレー、フラッグ、水の掛け合い、遊泳など楽しめたと思う。

１０日目（６）午後 カルチャー

いろんな文化や日本の伝統工芸などを学んだ。

１１日目（７）午後を利用しワールドスカウトセンターでスタンプを集める。

閉会式いろいろなアーティストが出演し盛り上がったが最後の最後で物足りない部分があった。

世界ジャンボリーに参加して感じたこと、考えたこと

フェニックス班　鈴木　寅矢

約２週間の世界ジャンボリーが終わり感じることがたくさんありました。

最初、僕は自分の英語力を伸ばしたい、将来海外にも通用できる人間になりたい、そういう思いからこの世界ジャンボリーに参加したいと考え参加しました。

僕は優柔不断なところがあるので最初は、ジャンボリーが待ち遠しいと思うくらい楽しみにしていたのですが、出発が近くなるほど大丈夫かなと不安になることが多くなってきて，早く行きたいという気持ちが薄れていきました。

そんな中、ジャンボリーのプログラムの中で広島に行くという話を聞いて少し楽しみになり行くなら楽しもうという気持ちになって、出発当日はワクワクしながらジャンボリー会場まで無事に到着することできました。

次の日からプログラムが始まりました。平和文化などたくさんのジャンルのことについて学ぶことができました。その中で印象に残っているのは、学校にも通えず、安全が保障されていない場所での僕よりも歳の小さい子供たちの労働について、広島の原子爆弾、核兵器、戦争について。自分の目で資料を見てとても胸が痛くなりました。

この実際に起きていること、起きていたことを自分の目で見て、感じて、それについて真剣に考えて行動することが、自分が今できる精一杯のことだなと思いました。

また、ジャンボリーの期間中は日本人よりも海外の人のほうが多かったので、プログラムの中でもプログラム中ずっと英語での会話という日がたびたびあり、自分の英語力の低さを身に染みて実感しました。

他にも海外との文化の違いも、日々の生活の中でたくさん知ることができました。

公共のものを丁寧に使う、ルールを守って使うという考えで僕は施設のものを使用していましたが、中にはトイレを壊したり、シャワーのノズルを取って水遊びをしたりと僕の日ごろ生活している場所では想像のつかないこともたくさんありました。

確かにワイワイ楽しく過ごすことはいいことだと思いますが、ルールを破ったり、物を壊したりするのはどうなのだろうなと思いました。それが場所の違いや文化の違いなのかもしれないし、よくないことばかり目に入っていましたが、とてもフレンドリーな所など良いところもたくさんあって、いろいろな人と触れ合うことが楽しかったです

これからも生活していく中で、たくさんの人と出会いがあるとおもいます。

その中で、自分との違いがたくさんあると思うので、その時は否定するのではなく、よく理解して尊重していこうと思います。

以上が、僕の世界ジャンボリーに参加して感じたこと、考えたことです。

後悔はありません！

ビートル班　松田樹生也

僕はこの夏第 23 回世界ジャンボリーに参加してきました。13 日間とそれまでの訓練期間は非常に楽しかったです。

外国隊のスカウトと交流し、自分はそれなりの英語は喋れるという考えは打ち砕かれました。だいぶカタコトだったと思います。それでも話が通じたのは相手が理解しようとしてくれたからです。大事なのは言語十理解しようという気持ちだったわけです。

僕が会った人について話します。ある日記念品交換に行きました。その日はプログラムあったんですが早めに帰ってきたので 4 人ほどで交換に行ったんです。そういうわけでどこも留守なんですが、インド隊のところにリーダーらしきおじちゃんとおばちゃんがいました。カーペットぽいのが敷いてあって、そこで記念品を交換したりお話をしたりしました。とても場がまったりしてゆっくり話せました。たまに忘れそうになりますが、場の余裕って大事ですよ。帰りにおばちゃんがビーズのネックレスをくれました。僕にじゃないですよ。一人女子がいたんでその子にです。聞きませんでしたけど、うれしかったんじゃないでしょうか。僕は楽しかったです。

次に期間中の僕のささやかな頑張りについて話します。後半で交流会の司会 2 回、ナレーターと 3 日連日でやりました。イギリス隊との交流会、東京隊との交流会、水戸黄門の劇のナレーターとありました。頑張りました。ただ、超だめだめでした。一日目、交流は安定の English talk ですね。ここで一番難しかったのは茨城の 3 つの隊とイギリス隊全員に伝えることです。声は大きくなきゃならないし、声が大きくても全部の方向を見回しながら喋らないと後ろの人には何も聞こえません。実に難しいです。一緒に司会をしてくれた小池さんにだいぶ教えてもらいました。

東京隊との交流会は実は我々日立方面の人間で企画したものでした。ただ、企画が遅れて何をするか前日の夜考え始めるというどえらい失態をやらかしました。なんとか企画をして東京隊を呼び、交流会が始まりました。どうすればみんなで本当に楽しめるかとか、ものすごく考える仕事でした。東京の司会の枝迫くんにめっちゃ助けてもらいました。最後に東京隊にもらったスイカをみんなで食べました。

このように結構頑張りました。ただ部活の顧問に「頑張りました。って言葉は無駄でえ、頑張った結果がないとマジで意味がないんだわ～（爆笑）」と言われています。従って僕は今回任された仕事には満足できていません。しかし先生にこういわれたとき僕はいつもこう返しています。「また次頑張りま～す（白目）」

このようにとにかく我々はジャンボリーを楽しんできました。結果いろいろ書きました

が思い出はやっぱり一緒に過ごした隊の人たちのことが多いわけです。多いので書けませんでした（泣）。茨城一隊で一緒に過ごしてくれたみなさんどうもありがとう。高 2 夏のアオハルまっただ中はこれに全部費やしちゃいましたが後悔はありません!

ジャンボリーを通して

キグナス班　白井 栄全

思い起こせば 5 年前、ボーイ井隊に上進して間もないときに日本ジャンボリーに行かないかと言われ参加したのが、ボーイをスカウトキャンプになった切っ掛けでした。何も分らないまま日本ジャンボリーに参加してみて、最初は不安でいっぱいでしたが、終わりにはとても楽しい思い出となりました。

隊に帰り、隊長と話をして世界ジャンボリーはもっとすごいことを知り、行ってみたいと思いました。それから地区・県キャンポリーにもさんかし、技術を上げ、ついに世界ジャンボリーに参加することができました。

今回参加して一番大きく感じたことは、班長としての役の大きさです。事前訓練のときは、正直、班員が指示を聞かず苦労することも多々ありました。そして、自分の技術の足りなさも感じました。しかし、回を重ねるごとにだんだんと班員一人ひとりの技量、性格が分かってきて、事前訓練最終日では、まあまあまとまることができました。

本番になってみて、最初の2, 3日は良かったのですが、その後、疲れたりしてなかなか動かない班員が出てきたりし、働く人とそでない人が分かれてきてしまいました。そして、そのとき改めて班長のたいへんさを理解しました。そして、どのようにしたらその班員が動いてくれるかを考え、さらに先のことまで考えて指示を出せるようになったときは嬉しかったです。なので、これからは下の班長たちに今回学んだことを教えていきたいです。

プログラムでは、話できいていた以上に大きく、すごいものばかりでした。会場に行くと周り全てが外国のブースでいっぱいでとても興味をひかれました。一番すごいと思ったことはアリーナショーでした。日本ジャンボリーとは規模が全然ちがい、来る人もちがい、世界中のスカウトと 1 つになり盛り上がることができました。

このキャンプを通して僕が学んだことはたくさんあります。特に事前訓練の時に隊長が言った「撤収の合図があるまでが設営だ。」という言葉の意味が良く分かりました。なので、このことを今後のスカウト活動に大いにいかしていきたいです。

最高の宝物

キグナス班　森田 壽一

今思うと、世界ジャンボリーに参加して本当に良かった、本当に楽しかった、そう心から思います。いつもの隊集会や、気などでは得られないことは勿論、二年前に遡る日本ジャンボリーでも得られなかったような体験や思い出がたくさん作れたからです。

でも、それらより班員みんなと仲良くなることの方が、一番辛くて、一番いい思い出です。その一説を書こうと思います。

2015 年の 4 月当初、世界ジャンボリー派遣隊の集まりが、青少年会館で行われました。顔もあまり見たことがない人が多く、二年前同様、この人たちと二週間も生活を共にできるのか、と正直感じました。また、その一ヶ月後にあった派遣隊の初気で版画決まりましたが、私が何か言いますと、反論したり、たいへんな作業を押しつけたりしてきて、嫌われているのではないか?　申請されていないのではないか?　と、もっと参加する気力が無くなってしまいました。（今ではあれは、みんなから私への期待だったろうな。と思います。また、最終的にみんなと仲良くなれたのでよかったなぁと。）この先、どうなってしまうのか。行きたくないなあとたったこんなことだけでくよくよしてしまいました。

唯一半セル家族にそのことを打ち明けたところ「行けない人のことを考えてみなさい。それに、もっと辛い思いをしている子だっているかもしれない。辛いとは思うけれど、射越の辛抱だから。」と背中を押してくれました。そこで、先ほどまでの思いは変わりました。行きたくても行けない子、私より苦労している子がたくさんいるんだ。そして沢山のお金をだしてくれた家族のためにも、自分がしっかりしなければならない。そう前向きにとらえることができました。

時は過ぎ 7 月某日、最後の訓練キャンプがありました。用事があって都庁からの参加になってしまったのですが、みんなの要望に応えることができ、おかげでみんなとも次第に打ち解ける関係に発展していきました。

ジャンボリー会場でも、なぜかみんなの意見が

一致せず、仲たがいすることも多々ありましたが、今ではいい思い出です。

日本ジャンボリーの時は、まだ成長の段階だったためあまり考えてはいなかったのですが、このような人間関係を通してもっと成長できたことが本当の宝物だと思います。

最後に、高額のお金をだしてくれた家族、私を県の代表にしてくださった、原隊の関係者の皆様。キグナス班のみんな、0406 隊の皆さん。ありがとうございました。私はこれからもっともっと発展していきたい、この宝物をみんなにも伝えていきたい。そう思っています。

世界ジャンボリーと日本ジャンボリーの違い

ザクロ班　白石 和輝

日本ジャンボリーと世界ジャンボリーの違いは、三つありました。

一つ目は、会場の広さです。僕は前回の日本ジャンボリーに参加していましたが会場がとにかく広かったです。さすがは世界ジャンボリー、日本ジャンボリーとの違いが広さだけでよく分かりました。

二つ目は、周りがほぼ外国人だけだということです。日本ジャンボリーではサイトの外を歩いていてもあまり外国人を見かけることは少なかったけど、世界ジャンボリーではどの方向を見ても外国人しかいなくて最初の頃はサイトの外に出るのが怖いぐらいでした。

三つ目は、言葉がほぼ全部英語だということです。日本ジャンボリーでは、英語をほとんど使わなかったけど世界ジャンボリーではサイトの外では英語しか通じませんでした。僕は英語が苦手なので英語が得意な友達についていかないと何を言っているか、まったく分かりませんでした。

最後に、今回の世界ジャンボリーは日本の中で行われたのであまり面白くありませんでした。今度の世界ジャンボリーはアメリカで行われるのでぜひ参加したいです。

こんなにも楽しいジャンボリー

フェニックス班　矢島 右喬

私は、これまでに 2 回日本ジャンボリーに参加しました、最初は朝霧で 2 回目は今回のプレ大会でもあったきらら浜で参加してきましたが世界ジャンボリーは初めてでした。

原隊でスゥエーデンで行われた時に参加した先輩が「世界ジャンボリーはめちゃくちゃ楽しい !! 日本ジャンボリーとは雰囲気が違うよ」と言っていました。次の世界ジャンボリーは、なんと 44 年ぶりに日本で開催されると聞いてとても嬉しかったです。

1 回目の訓練キャンプで班が決まり、私はなんと、班長になってしまいました。前回の日本ジャンボリーでは上班だったので今回も楽に期間中を過ごせるのかなと思いきや今回は違いました。ですが今回、世界ジャンボリーで班長になったことで様々な経験をしました。

1 日目は、各自で東京駅まで行き それから新幹線に乗り現地へ向かいました。

現地についてまず思ったことがあります。それは前回のジャンボリーに比べてとても土地も広くなり、参加スカウトも前回のジャンボリーよりはるかに多い 3 万 3 千人ものスカウトを見るのは初めてでした。テントもモンベルからの支給でサイトにぴったりのテントで快適でした。

2 日目に開会式をやり、3 日目からプログラムが始まり、ここから地獄が始まりました。プログラムをはじめ大会スッタフなどがすべて英語で進行するため英語ができない私は身振り手振りで外国のスカウトと話したり、ワッペンやネッチを交換をしました。中日ではアリーナショーでしょこたんを間近で見ることができて嬉しかったです。そのあとに皇太子と安倍首相のお話を聞きました、3 回もジャンボリーに参加しているのに皇太子と安倍首相を見たのは初めてでした。とても貴重な体験になりました。場外で行う「広島ピースプログラム」では日本にいるのにあまり良く理解していませんでしたが。実際に広島に行き、原爆ドームを見たり、被爆者の方のお話を聞いて改めて原子爆弾の恐ろしさや戦争の残虐さを深く理解できました。

あるプログラムで「自分の国の料理を世界のスカウトに作ろう」みたいなプログラムがありました、私の隊ではそうめんを作りました。外国のスカウトの反応はみんなおいしいと言ってくれたのでよかったです。その後世界各国の料理を食べに行きました。最初はイギリスの料理を食べ、そこではクッキーにひき肉がベースでスパイスの効いたものを上にのせ、エナジードリンクを片手に食べました。とても美味しかったです。次の国はアフリカの国でしたそこではなんとも言えないドロドロした黒いもの出され、勇気を振り絞って食べてみたらとても甘くて見た目とは全然違うのでびっくりしました。

私の班では、全員怪我なく、問題なく東京駅に帰ってこれたことがよかったです。今までジャンボリーに参加してきましたが、こんなにも楽しい経験ができたのは、派遣隊長の本橋さんを始め水戸 1 団の方、そして両親に感謝したいです。ありがとうございました。

23WS] を終えて

キグナス班　加葉田 駿

僕は、第 23 回世界スカウトジャンボリーに参加しました。日本で開催されるのは、1971 年の朝霧高原以来なので、参加できてとても良かったです。

結隊式の時は、知らない人ばかりでとても緊張していました。でも、訓練キャンプ等を重ねていくうちに、話したりして仲良くなれたので緊張がほぐれて良かったです。僕は 1 回目の訓練キャンプ時に炊事章のワッペンを付けていたので炊事係になりました。

東京駅での出発式後、新幹線に乗り込んだときとても涼しくて快適でした。快適だったので昼食を食べずにずっと寝てました。新山口駅について降りたらムワっとしていてとても暑かったですバスに乗って会場まで行きました。30 分もしないで会場に着きました。サイトも近くまでバスで行けたのであまり歩かないで済みました。サイトは草が生えていました。トイレや水汲み場にあまり遠くなかったので良かったです。テントなどを運び設営をして夕飯を作りました。曇っていたけど暑かったです。その日は疲れていたのですぐ眠れました。

開会式は、ステージの近くだったので良かったです。16NJ の時よりもステージが大きかったり、モニクーが 3 つあったりしてとても盛り上がりました。

シャワーは夜混んでいたので朝、早起きして浴びました。きらら浜の朝は意外に寒かったです。ピースプログラムの日は、4 時に起きて配給に行ったので眠かったです。広島では原爆について学びました。その他のプログラムもいろいろ学ぶことがありました。楽しめるプログラムもあったので良かったです。特にウォターの時はビーチバレーをしたり海水浴をしたりしてとても楽しかったです。

アリーナショーは有名な人がたくさん来てとても盛り上がりました。飛行機のパフォーマンスもすごくてとても盛り上がりました。

夕食がちらしずしの日にご飯がよく炊けておいしかったです。いろいろな国の人ともたくさん交流してチーフやワッペンを交換できて良かったです。スーパーマーケットもあって 30 分くらい並んでジュースやアイスなどを買いました。

閉会式もとても盛り上がりました。でもその後とても疲れて早く寝られました。次の日の撤営も疲れていて大変でした。

いい機会に世界ジャンボリーに参加できたのでこの経験をこれから生かしていきたいと思います。

世界大会で学んだもの

ビートル班　池田　啓悟

私は今回の大会で沢山学んだことがあります。

１つ目は、国によって生活の仕方やルールが違うこと、２つ目は、日本のこと。３つ目は、コミュニケーションに大切さです。

僕たちが生活していたエリアは、水道と電気が通っていて、比較的生活しやすく、シャワーやトイレなどが整備されていました。しかし、余った食材などをトイレの洗面台で流したりするなど、非常識に行動が目立ちました。また、普通の行動にも出ていました。ゴミを落とした他国スカウトが、気づいて拾っていったのは少しだけでした。プログラム、アリーナショーにども相です。後ろも考えずタープなどを張ったりする国があったり、飲んだペットボトルをそのままなしていくなど、ボーイスカウトで何を学んでいるのかと、不思議でたまりませんでした。

２つ目は、自国についてです。安全の面、衛生面など、気持ちよく美しくするために、ボランティア、なによりもスカウト一人一人が、率先して行動していたと思います。外国隊と違うなとつくづく思いました。また、プログラムの中で、日本の事を伝えるブースもあり、日本の環境のことなど知る機会になりました。

３つ目は、コミュニケーションの大切さです。プログラムや開閉開式、フリータイムなと、会話や人と関わる時間が多かったと思います。自分はフィンランドの友達の件があったので、英語で話し、会話をする機会がありましたが、その中でもうなずき方や、返事の仕方によってはいい印象を与えるし、悪い印象にもつながります。だから英語力だけでなく、コミュニケーションの方法も勉強が必要だと思いました。

最後に、何よりも僕がいってよかったと思ったことは、全部が全部同じ環境委で育った訳ではない。自分と違う人がいるということです。

日常生活にもつながることだと思います。今回の大会での出会いや経験を忘れず、「人に感謝すること」が学べたと思います。

世界の広さを実感

フェニックス班　境 要明

今年の夏、僕は初めての世界ジャンボリーにののぞんだ。まず最初に言える事は、世界ジャンボリーに参加してほんとうによかったということだ。

今回、世界ジャンボリーの会期と学校の期末テストが重なっていると知り、担任の先生を通じて調整を試みたが、やむを得ず会期の後半からの参加という形になった。それでも、団委員長をはじめとしたさまざまな方々の応援があって、参加する事が出来た。単身高速バスの長旅、はじめはとても緊張したが、他の県の IST の方たちと会場までの道のりを共にすることができたのは楽しい事だった。そして会場にたどり着いた時はほんとうにうれしかった。自分の隊のサイトを見つけ、ようやく落ち着いた。

やはり世界規模のイベントだけあり、会場内は日本ジャンボリーのときとは比べものにならないほどの広さと人の多さだった。しかも外国人ばかり。頭の中ではペラペラ英語で自己紹介して名刺交換して軽く会話して・・というイメージを抱いていたが、全然出来なかった。今でももっと英語を勉強しておけばと後悔している。

しかし、いろんな国の文化や人柄、それぞれの国のイメージとの違いなどをたくさん知り、学ぶことができた。なんだか世界の広さをこの身で直にしっかりと実感することができた。

でもまだこれで終わってしまったわけではない。またさらに４年後、北アメリカで世界ジャンボリーが開催される。そのときは IST としての参加となる。他の隊の隊長や会場に来るまでに会った IST の方から、スカウトとしての参加とはまた別の楽しさがあり、むしろ IST としての参加のほうが楽しいかもしれない。と聞いた。僕は今回の世界ジャンボリーを機にボーイスカウトをやめようと思っていたが、24WSJ に参加するという新たな目標をもって続けることに決めた。それまでにはスカウトとしての技能はもちろん、英語とできればフランス語もある程度は話せるようになりたい。

今回の世界ジャンボリーに参加し、最後まで無事元気に活動できたのは、僕自身のちからだけではない。団委員長をはじめ隊長、諸リーダーの方々のおかげ、もちろん両親の援助も大きかった。

そして、今大会の執行に携わった方々、派遣隊全員のおかげだ。そのことを忘れずすべての人々、すべてのことに感謝したい。

ありがとうございました。

世界ジャンボリーに行って

フェニックス班　鈴木 翔太

僕は、世界ジャンボリーがとても楽しく、良い経験になったと思います。ベクは、日本ジャンボリーに参加したことが無いので、10 日以上のキャンプは今回の世界ジャンボリーが初めてでした。また、「雨が降るとテントが浸水してしまう」「シャワーはすごく混むから、毎日は行けない」と先輩から聞いたときは、どういう物をを持っていけばいいのか悩んでしまい、手引どおり準備しても、何か足りないような気がして、出発する時まで不安でした。でも、ジャンボリー中に持ってくれば良かったと思うことがなかったので良かったです。

世界ジャンボリーの会場は、昼間はとても暑く、夜は夏とは思えないほど寒かったです。そして、テントが２人用なので狭く感じたけれど、星空がとてもきれいでした。

心に残ったことは４つあります。１つ目は外国人との日宇理由です。外国人の英語は、学校で勉強した英語とは違っていた、なにを言っているのか分からない時がありました。でも、ワッペンやネッチを交換することができ、ベルギーの場所でくつ型のネッチリングを作ることができて良かった。

２つ目は、プログラムです。「サイエンス」や「ウォーター」など、多くのプログラムがあり、良い経験になりました。言葉が分からなくても、相手の思いが伝わったような気がしました。

３つ目は、外国人の様子です。外国人はみんな身長が高くて、大人のようでした。また、5-6 人入れそうな巨大な傘や、男女ともチェックのスカートを着ていて、歩いているだけでも、いろいろな人と会うことができました。朝から夜までずっと歌ったりしていて、バスの中はカラオケ状態でしたが、楽しかったです。４つ目は外国の料理です。８月２日にあったフードフェスティバルで、世界中の料理を食べました。韓国では、すごく辛いパスタ、フィンランドでは、塩がたくさんついたキャンディを食べました。グミのような食べ物や、紅茶などもありました。

23 WSJ を終えて

フェニックス班　遠藤 晶

今年開催した第 23 回世界スカウトジャンボリーに参加して、僕は数々の基地用名体験をすることができました。開催期間の７日の中で特に印象を与えられ、記憶に残った日を３日取りあげます。

まずは、７月 31 日。ジャンボリーの会場に到着してから３日目です。まだこの日は早起きに慣れず, 寝不足と寝坊でクタクタでした。その日は広浜ピースプログラムに参加することになり、広島市にある広島平和祈念公園資料館に行きました。バス停集合５時半はとても辛かったのですが、そのおかげで原爆の恐ろしさを学ぶことができました。原爆の爆発範囲や被害者達の遺品など原爆に関した様々なものを見ることができました。僕の住んでいる日立市も昔は原爆の対象だったことも知り、色々と考える機会になりました。また、原爆ドームを実際に見ることもでき、とても貴重な体験でした。

次に８月３日。アリーナショーがあるこの日が一番楽しみに待っていた日でした。気象は６時、やっぱり朝が苦手な僕でもさすがに慣れてきた頃です。午前中の信仰奨励も乗り切り、カメラの代わりの携帯電話を持っていこうとした僕たちに隊長たちから「携帯電話を持っていってはダメだ」という言葉はとても衝撃的でした。でも会場に行くと周りはカメラや携帯電話を構えていました。中川翔子さんか

登場した驚きと興奮は今でも忘れられません。しかしこの日を思い出すと、どうしても考えてしまうのが「携帯電話は持って行っていれば良かったなぁ。」

最後に、８月４日。イギリスのスカウトとの交流です。この日はそんなにドタバタすることもなく，ゆっくりと時間が進むようでした。夕暮れまでは、イギリス隊との交流のため夕食を大量に作ることに。トイレ掃除が終わらないということで急遽ザクロ半の手伝いをすることになった僕は、手際よく作業を進めるのに必死だった。僕はあまりそのことを覚えていませんでしたが、取りあえず大変だったことは体が覚えていました。

たまにくだらないことや面白いことがたくさんありましたが、、その体験は僕の中でずっと生かしてくれるでしょう。次回の WSJ はスタッフを目指して行きたいです。

長谷川反省会

ザクロ班　長谷川 二朗

ジャンボリーでの２週間、僕は、散々罪を犯してきました。これから反省したいと思います。

まず、はじめに、ザクロ班の皆さんへ。初日の夕食でお米を焦がしてしまって、ごめんなさい。班内に炊飯が得意な白石さんかいてくれて助かりました。次に、班長として皆をまとめてくださった浅野さんへ。僕は班長と共に班内の最高学年であり、本来班長をフォローしなければならない立場であるにもかかわらず、班長任せにしてしまい、挙げ句の果てには夜の班会議にも遅刻する有様でした。迷惑ばかりかけてしまってごめんなさい。

次に、班員の空さんへ。空さんとは、２週間同じテントで過ごしましたね。23 時の就寝後、毎晩指導者の目を掻い潜り、僕はサイエンスブースでアマチュア無線をやっていたため、深夜テントに戻って来た時にはガサガサと物音をたててしまい、寝苦しかったことでしょう。ごめんなさい。

次に白石さんへ。白石さんには、いつも美味しいお米を炊いていただきました。白石さんのつくるご飯が毎日待ち遠しかったです。ありがとうございました。

次に友田さんへ。友田さんはザクロ班だけでなく、茨城１隊のムードメーカーとして隊を盛り上げてくれました。これからも、友田さんと一緒に活動できたら光栄です。ありがとうございました。

次に熊谷さん。熊谷さんはザクロ班の紅一点!! 女子一人で大変なこともあったかもしれませんが、熊谷さんのお陰で班の雰囲気も柔らかくなりました。ベンチャー隊に上がっても、富士章や隼章を目指して頑張ってください。

次に伊織さんへ。伊織さんは班内で最年少であったにもかかわらず、次長として班を引っ張って行ってくれました。時にまでテニスラケットを持参する程、テニスが好きなんですね。部活でも頑張ってください。

最後に横須賀さんへ。横須賀さんは早朝・夜の配給等、毎日皆が嫌がる仕事を率先してやってくれました。ラグビーの横須賀さん。今、日本ではラグビーワールドカップで盛り上がっています。横須賀さんの活躍も期待しています。ありがとうございました。

何かと波瀾万丈なザクロ班でしたが、皆さんと共に過ごす事ができ、幸せでした。ご迷惑をおかけすることもあったと思いますが、時で体験したこと全てが僕の大切な宝物です。ありがとうございました。

ジャンボリーで学んだこと

ビートル班　大場 友樹

自分が、第 23 回世界スカウトジャンボリーで印象に残ったところや思い出になった出来事は２つあります。

はじめに驚いたところは，世界のさまざまな子にと地域からスカウトたちが来ていることです。自分は最初、外国人はほんの一握りでほとんどが日本人だと思っていました。ですが、自分の予想は間違っていました。実際は、自分達のサイトから一歩出たら外国人だらけで、逆に日本人を探すのが困難が状態でした。自分はその外国人の多さにとても驚きました。

２つ目は、アリーナショーの規模の大きさです。日本ジャンボリーでのアリーナショーも、とても規模が大きかったですが、世界ジャンボリーのアリーナショーはそれとは比べものにならないほど大きく豪華でした。特に会場の人間全員でダンスをしたときは、みんなの心がひとつ担ったような気がしました。

３つ目は外国人のテンションが高く，非常にノリが良いことです。昼間から、道のど真ん中でラグビーを始めたり、上半身裸で寝転んでいたりして自分達の常識では考えられないような講堂が多く見られました。しかし、そのノリの良さから、日本人である自分にも積極的に話しかけてくれて、沢山の写真を一生に撮ることができました。また、自分の下手糞なカタカナ英語を一生懸命聞こうとしてくれて、外国人と沢山会話をすることができました。

最後に、この第 23 回世界スカウトジャンボリーに同じ 0406 隊として参加したスカウト、熱くご指導してくださったリーダー、IST の人たち、大会の運営の人たち、また、自分のことを優しく見守ってくれた両親にも感謝したいと思います。

この第 23 回世界スカウトジャンボリーで学んだことをこれからの生活や、ボーイスカウト活動に生かしていきたいと思います。

世界ジャンボリーでの経験

ザクロ班　横須賀 颯太

世界ジャンボリーは、僕に様々なことを学ばせてくれました。

初め、僕は日本ジャンボリーに行ったことがないのに７泊以上のキャンプをしたことがありませんでした。

そこで、行った先輩たちにジャンボリーがどのようなものか聞くと、皆口を揃えて「地獄のようだった」と言いました。大げさに言っていることは分かっていましたが、とても不安でした。

実際に行って、確かに地獄だと思いました。体力がいくらあっても足りず、毎日水汲みに行くのはとても大変でした。しかし、それ以上に楽しかったこともありました。

アリーナショーや他のタイトの交流、プログラムとたくさんの経験をつむことができました。

英語も学校でべんきょうこそしているが、外国人と話したことなんてなかっので、学校の英語が本当に使えるのか分かりませんでした。しかし、10 日以上も外国人とくらしていたので、自分の英語にも自信が持てる用になりました。

いろんなところをかけずり回って、重いものを持って走って、部活の練習と言わんばかりのことをやってきました。そのおかげで、体力がかなりつきました。

外国人は、とてもユーモアがあって、イギリス人とラグビーもしました。ラグビー部に入っていましたが、本場の人の体格の大きさにビックリしました。そこで得意のスローをすると、今度は相手がビックリしていました。

この世界ジャンボリーで得たことは、一生忘れません。本当に色々経験できました。

世界ジャンボリーに行って

フェニックス班　鈴木 翔太

僕は、世界ジャンボリーがとても楽しく、良い経験になったと思います。ベクは、日本ジャンボリーに参加したことが無いので、10 日以上のキャンプは今回の世界ジャンボリーが初めてでした。また、「雨が降るとテントが浸水してしまう」「シャワーはすごく混むから、毎日は行けない」と先輩から聞いたときは、どういう物をを持っていけばいいのか悩んでしまい、手引どおり準備しても、何か足りないような気がして、出発する時まで不安でした。で

も、ジャンボリー中に持ってくれば良かったと思うことがなかったので良かったです。

世界ジャンボリーの会場は、昼間はとても暑く、夜は夏とは思えないほど寒かったです。そして、テントが２人用なので狭く感じたけれど、星空がとてもきれいでした。

心に残ったことは４つあります。１つ目は外国人との日宇理由です。外国人の英語は、学校で勉強した英語とは違っていた、なにを言っているのか分からない時がありました。でも、ワッペンやネッチを交換することができ、ベルギーの場所でくつ型のネッチリングを作ることができて良かった。

２つ目は、プログラムです。「サイエンス」や「ウォーター」など、多くのプログラムがあり、良い経験になりました。言葉が分からなくても、相手の思いが伝わったような気がしました。

３つ目は、外国人の様子です。外国人はみんな身長が高くて、大人のようでした。また、5-6 人入れそうな巨大な傘や、男女ともチェックのスカートを着ていて、歩いているだけでも、いろいろな人と会うことができました。朝から夜までずっと歌ったりしていて、バスの中はカラオケ状態でしたが、楽しかったです。

４つ目は外国の料理です。８月２日にあったフードフェスティバルで、世界中の料理を食べました。韓国では、すごく辛いパスタ、フィンランドでは、塩がたくさんついたキャンディを食べました。グミのような食べ物や、紅茶などもありました。様々な料理がありましたが、どれもおいしかったです。

世界ジャンボリーでは、初めての体験がたくさんあり、長いと思っていた世界ジャンボリーも短く感じました。今回の経験を生かして、２年後の日本ジャンボリーに参加したいです。

世界ジャンボリー

ザクロ班　鈴木 空

私は、初めて世界ジャンボリーに参加しました。日本ジャンボリーは都合が悪くて行けなかったので、今回世界ジャンボリーに参加できてとても嬉しかったです。世界ジャンボリーで一番思い出に残ったことがやはり外国隊との交流です。最初は英語に自信が無く話しかけることができませんでしたが、いざ話みるととても楽しくて間違えてもいいんだと軽い気持ちになれました。それからのジャンボリー金では毎日外国人と話すようになりました。国が違くてもあいさつをすればあいさつが必ず返ってくる、やはりスカウトはあたたかい心をこんな持っている野田と実感しました。

第 23 回世界ジャンボリー

フェニックス班　増子 司

私は今回の第 23 回世界スカウトジャンボリーに参加して、今までにないくらい良い経験になったと思いとても良かったです。

私は第 16 回日本ジャンボリーにも参加しましたが、今回の会場となつた山口県のきらら浜に到着したとき日本ジャンボリーとのあまりの違いに圧倒されました。規模がものすごく大きかったり、人がわんさかいたり、歩いていたら周りからは英語ばっかりが聞こえてきたりして、最初は「こんなところで約２週間もやっていけるのか」とだいぶ不安になりました。ですが、そんな不安はすぐになくなりました。そのきっかけは設営のときでした。設営の際備品等を運んでいたとき台湾のスカウトに話しかけられ、今まで少し恐いと思っていたイメージが一気になくなりました。他にも、通りすがりに気軽に「ハロー」とあいさつしてくれて恐怖感とか不安感はなくなりました。

世界ジャンボリーはプログラムも充実してい増した。広島の原爆ドーム行き核兵器の恐ろしさを学んだり、GDV で発展途上国の子どもたちの悲痛な現実を教わり、サイエンスでは逆に先進国のすばらしい技術や科学のことを見て学び、フードフェステイバルでは他国のおいしい料理や一風変わった料理などを食べて直接異国文化に触れることができ、信仰奨励ではいろんな宗教に属する人の話を聞きそれぞれにいろんな考えかたがあるのかと感心し、ウォーターやネイチャーでは体を使ってゲームを楽しむだけでなく救命方法なんかも教わり、アリーナショー・開閉開式ではゲストが来て会場が一体となって大盛り上がりしました。これらのプログラムの中で外国の人たちとも関われたりできてとてもよかったです。

私はこの世界ジャンボリー中にコミュニケーションについて感じたことがあります。同じ版の伊藤君は英語が苦手であまり喋れないようなのですが、彼は「Excuse me サイン　please!」という一言わ使ってたくさんの人に話しかけて打ち解けていました。

英語が話せなくても自分からガンガン攻めていけばなんとかなるし思った瞬間でした。だから私もまずは話しかけてみるということをやってみようと感じました。

最後に、IST や隊長・副長、班のメンバー、家族など支援していただいたいろんな人に感謝したいです。

感想文

フェニックス班　伊藤 勝敬

僕は、世界ジャンボリーに行って嬉しかったことが２つあります。

１つ目は、外国人の方や日本人の人などに沢山のサインをもらったことです。

２つ目は、外国人の手伝いをしたら、ありがとうと言われたことです。

23WSJ に参加して

ザクロ班　鈴木 伊織

「あー、めんどくさいなぁ」
僕の足取りは重かった。下を向いたまま歩いていると

「おーい、伊織！」と声がする。声の方に顔を向けるとそこには仲間がいた。

僕は７月 28 日から８月９日までの約２週間、第 23 回世界スカウトジャンボリーに茨城派遣隊として参加した。世界中で活動しているスカウト仲間との国際交流が目的だ。

しかし参加したのも半ば親からの強制で、正直僕は行きたくなかった。事前の訓練キャンプも知らない人ばかりだったし、中学生よりも高校生の方が多かった。もちろん部活にも参加できない。本当に行きたくなかった。「中止になってくれればいいのに」。出発前の僕の気持ちは最悪だった。

きらら浜に到着して僕はおどろいた。会場の広さ、人の多さ、そこには巨大な「町」が作られていた。

どこまでが会場なのか分からないほど広く、海外から参加しているスカウトで一杯だった。「もしかしたら海外にきてしまったのではないだろうか。」と思ってしまうほど、海外のスカウトであふれていた。

８月１日は朝４時に起床して、ピースプログラムとして広島県へ行った。

今回の場のデーマは「和」。その１つが「平和を考える」だった。

原爆ドームや資料館へ行き、戦争の恐ろしさを知った。そしてとても悲しい気持ちになった。ちょうど今年は終戦から 70 年だ。「もう 70 年」なのか、「未だ 70 年」なのか。僕たち学生ももっと戦争について知るべきだと思った。

８月２日のアリーナショーが終わり自分たちのサイトへ戻っている時、ある事に気がついた。「あれ？ 毎日とても暑いしキャンプで大変だけど、楽しくなってきたかも。」

８月７日、ついに閉会式を迎えた。次に世界ジャンボリーが行われるアメリカへ引き継ぎをした。あんなに行きたくない、参加したくないと思っていたのに、その時には帰りたくない、もっと仲間達と一緒にいたいと思っていた。最後の打ち上げ花火がとてもきれいで美しく見えた。

撤収も終わりいよいよ帰る日になった。会場には感謝の気持ちを置いてきた。

怒ったり、笑ったり、楽しいだけではなかったけど、思い返せばこの２週間は僕の人生でかけがえのない期間だったと思う。次回、石川県で開催される日本ジャンボリーにも必ず参加することを心に決めた。

集合写真を撮ろうよ、という声が聞こえた。

「めんどうくさいなぁ。」

僕の足取りは軽かった。

23WSJ に参加して

ビートル班　渡邉 愛哉

僕は、７月 28 日～８月９日まで山口の第 23 回世界ジャンボリーに行きました。

１日目は、東京駅まで友達と行きました。その時、電車が事故で会うの駅止まりとなってしまい、「うわー、まじかよ」と思いました。上野駅から超満員の山手線に乗りました。人が多くて、メッチ暑かったです。

現地に着いた時は、もう夕方でした。その日は、疲れて、すぐ寝ました。

開会式では、参加している国の国旗を持って入場してきました。知らない国もたくさんあって「こんなのあんだー」と思いました。

そして、月瀬の日は、楽しみだった外人との交歓をしてきました。イギリス手背は、ワッペンを交歓してもらい、アメリカとは、Tシャツとネッカチーフを交換できました。アメリカのネッカチーフはドイツの国旗とアメリカの国旗が並んでいて、カッコよかったです。

広島ピースプログラムでは、初めて原爆ドームを見て、すごいなと思いました。あと原爆記念館では、原爆の悲惨さを物語る展示品を見てきました。もう1つ講演会場では、英語でスピーチしている女の人がいて、なんでこんなに英語が読めるのだろうと思いました。そとて英語の重要さを知りました。

又、初めて出来た、スウェーデンのエリックと話したら、英語がペラペラで何を言っているのか全く分かりませんでした。

アリーナショーでは、中川翔子やEガールズやエグザイルの人が来て歌っていました。あと、アクロバット飛行の人も来て、上に行ったり下に行ったり、エンジンを止めたりしていて、すごいなと思いました。最後には、今大会のロゴマークを描いて行きました。もうあと少しで完ぺきでした。でも、すごかったです。

閉会式は外国の有名らしいアーティストが来ました。外人は盛り上がっていたけれどまったくわかりませんでした。

最終日はテントをすべて片づけたあと、配給所にいったら、れーションを配っていたので１箱もらってきました。味はふつーでした。

僕は、この次の第 24 回世界ジャンボリーに行きたいと思いました。それには、次はアメリカなので、しっかりとした英語を覚えていきたいです。

とにかく楽しくて、とにかく英語が大事だと思った夏でした。

和の心　アツく輝け　きらら浜

副長　　藤田 秀一

「あぁ，やっと着いたぁ。」

誰ともなく，つぶやく声が聞こえた。標高230mの陶ヶ岳（すえがたけ）山頂に，0406隊の2つの班が到着した。それぞれ,疲れが見えたり汗びっしょりだったりしているが，表情は達成感で満ちた顔になっている。登っているときは，ツライことだらけだが，登頂した時のこの感覚は，山登りの醍醐味の一つだ。8月4日のネイチャープログラム。毎日の生活一つ一つがスカウトにとって何物にも代えがたい経験となっている。

第23回世界スカウトジャンボリー。スカウト経験者でなく，指導者歴が浅い私にとって，ジャンボリーへの参加は，初めてのことだった。不安がないわけではなかったが，これから起こる未知の出来事に，様々な期待がよぎり，ワクワクした心持ちで開催を待った。5月からの訓練キャンプを通してスカウトたちを知ることができ，開催してからは，早く現地入りしたい気持ちでいっぱいだった。

8月3日に現地入りし，森田副長と役務を交代した。ジャンボリーの生活は驚きと楽しさに満ちていた。日本であって日本でない会場の雰囲気。外国隊の陽気さとアグレッシブな行動には圧倒された。連日の暑さに対抗するビニールプールや水遊び。サイトの片隅で繰り広げられる，バレーボール。ソングもよく聞こえてきた。もちろん，毎日の点検や朝礼を行い，規律をもってキャンプ生活を送る我が隊を誇りに思う。だが,「お祭り騒ぎ」に見えるほど,心からジャンボリーを楽しんでいる姿をみると，その「ノリ」をちょっぴりうらやましくも思うのだった。各国の文化性や国民性の違いを肌で感じ，それぞれによさがあることを改めて考えたジャンボリー生活であった。

私は，8月4日からのプログラムに同行した。冒頭に挙げた8月4日のネイチャープログラム。8月5日はウォータープログラム。カヌーやライフセービングの体験とビーチでの競技で盛り上がった。8月6日。8時15分に0406隊全員で黙禱を行った。70年後という節目の時に，ジャンボリー会場という場所でささげた黙禱は，ピースプログラムを体験してきたスカウトたちにとって，特別なものであったに違いない。この日はカルチャープログラムとして，外国・日本の様々な文化を体験した。8月7日は閉会式。本橋隊長の計らいで，私も会場で式に参加することができた。ステージ前を埋め尽くす数えきれないほどのスカウトたちを見ながら，きらら浜に集まった3万4000人が，明日からまた，それぞれの場所に帰っていくのと同時に，次回2018年17NJ，2019年24WSJのスタートがもう切られているのだと感じた。

12日間（隊としては実際13日間）の長期キャンプ生活を中高生スカウトが送る中では，様々な問題が生じることがある。健康上の問題，個人の抱えるもの，人間関係でのもの…。しかし，それを自分たちの力で乗り越えていくこともまた，スカウトにとって大切なのだと思う。我が隊においても，各班は，何かしら問題を抱えていた。即解決の難しいものもあり，苦しい思いをしたり悩んだりしたスカウトもいた。問題解消のために話し合い，改善を図って努力した。その結果，ジャンボリー後半は，日に日に，だんだん班のまとまりが見えてくるようになった。ジャンボリーでの生活があっという間に過ぎて，物足りない気持ちの私は,「あと数日，ここで生活すれば，もっとまとまりがよくなるだろうな…。」と思うほどであった。（おそらく，初日から参加しているスカウトや指導者は，これ以上の滞在はゴメンだと思うだろうが…）このジャンボリーを通して，人間的な成長がたくさんあったと思える。

今回，日本で開催された世界スカウトジャンボリー。参加するチャンスをつかんだスカウトたちは立派だ。特に結隊式以降，毎月の訓練キャンプに参加し,様々な準備を整えて,12日間のジャンボリー生活を終えることができた。しかし，そこに至ったのは，周囲の大きな支えがあってのことを忘れてはならない。ジャンボリーへの参加を尊重し，送り出してくれた家族。技能だけでなく，困難に耐える心も鍛えてくれた原隊の指導者。開催を歓迎し，ボランティアとして快く迎え入れてくれた山口の方々。開会前から閉会後まで，大会を陰で支えてくれたISTをはじめとするスタッフ。どれが欠けても，これだけの成果はなかったはずだ。私たち隊指導者も，少しでもスカウトの成長に寄与できたと思うと幸いだ。今回のジャンボリーを通した経験は，きっとこの先の人生にとっても大きな財産になると思う。

私自身，指導者としてスカウト活動を続けていく上で，素晴らしい経験ができた。今後もこの経験を生かしてスカウト活動を続けていきたいと思う。そしてジャンボリーの楽しさを知ってしまった私は，3年後に…珠洲の地でスカウトたちと楽しんでいる自分の姿を想像するのである。

日本派遣団 0407 隊

所属　ENA サブキャンプ

隊長
　大月　健人　（笠間第1団）
副長
　吉田　理佐　（牛久第1団）
　鈴木　義之　（水戸第6団）
　木村　慎一　（水戸第2団）
　古川　和男　（塩谷第8団）

Revolution 班

井端　秀平　（大田原第 1 団）
藤原　琉晟　（坂東第 1 団）
藤澤　翔平　（古河第 1 団）
池田　実鈴　（石岡第 3 団）
大脇　歩華　（つくば第 1 団）
吉田　有佑　（つくば第 3 団）
岡本　　陸　（桜川第 1 団）
佐藤　洋希　（つくば第 3 団）
末光　渉一　（つくば第 3 団）

たけのこ班

小竹　善宣　（つくば第 1 団）
岩井　拓磨　（つくば第 3 団）
高見　彰太　（坂東第 1 団）
松木　涼夏　（笠間第 1 団）
荻上　　天　（つくば第 3 団）
富田　涼心　（古河第 1 団）
皆川　拓哉　（石岡第 3 団）
深見　宇彰　（つくば第 3 団）
石戸　　暁　（真岡第 1 団）

ホークス班

根岸　由弦　（つくば第 1 団）
中村　奎斗　（古河第 1 団）
川島　瑠莉　（つくば第 3 団）
真中　友輔　（坂東第 1 団）
澤村　悠希　（石岡第 3 団）
門屋　　快　（つくば第 3 団）
高松　七海　（笠間第 2 団）
並木　理久　（つくば第 1 団）
齋藤　　華　（つくば第 3 団）

Rising Sun 班

岡田　拓哉　（塩谷第 8 団）
見目　　至　（塩谷第 8 団）
丹野　凱登　（塩谷第 8 団）
増形　有紗　（塩谷第 8 団）
溝下彩恵子　（塩谷第 8 団）
風間　龍生　（塩谷第 8 団）
小川　明里　（塩谷第 8 団）
丹野　耀登　（塩谷第 8 団）
荒井日花里　（塩谷第 8 団）

407 隊　（茨城第 2 隊）
隊長　　大月　健人

今年，44 年ぶりに日本で開催された第 23 回世界スカウトジャンボリーに、茨城県と栃木県のスカウトからなる 0407 隊の隊長として参加した。これまで海外の大会や派遣の経験がなかったため、このような規模の大会はスカウトだけでなく私も最初から最後まで初めてづくしの経験であった。

会場到着から閉会式まで、150 を超える国と地域から参加した海外からのスカウトのパワーに終始圧倒されながらも、スカウトたちは同世代の世界の兄弟たちとの生活や交流の中で、貴重な経験を積むことができたのではないかと思う。当隊の参加プログラムは、

- 会場内外でのプログラム
- サッカーワールドカップ
- イギリスやベルギー隊との交流会
- 文化交流日での習字，折り紙体験，桜餅
- ステージでのよさこいソーランの披露
- 開会式
- アリーナショー
- 閉会式

などであった。

どれを取っても、日常では体験することのできないものばかりであり、日本にいながらにして「世界」を感じられたことはスカウトにとって有意義な場となった。

さらに、国内開催ということで、英語とフランス語が公用語であったが、所々で日本語のフォローがあり、大きなアドバンテージとなった。

一方で、英語が話せない、外国スカウトに話しかけられないなどにより伝えたいことを伝えられなかったり、生活の中で自身の技量不足を感じたりしたスカウトもいたことと思う。事前訓練等で準備はしたが、まだ不足した部分も多くあった。

今回大会に参加したスカウトには、是非この大会で得た経験を自分の中の思い出だけに止めず、周りのスカウトや指導者にも伝えていただきたい。そして、自分の力を伸ばし。今後も弛まぬ努力を続け、3 年後の日本スカウトジャンボリー、そして 4 年後にアメリカで開催される次回の世界スカウトジャンボリーに多くのスカウトが参加してくれることを期待したい。

最後に、今回の大会にあたっては、茨城県連盟、スカウトの所属地区、所属団、所属隊、さらには保護者の皆さまなど、多くの方々の協力を賜り無事に終えることができました。改めて御礼申し上げます。

世界ジャンボリーで学んだこと

ホークス班　高松 七海

私が参加した世界ジャンボリーではたくさんの「初体験」があった。外国の方と話すことや長期間にわたるテント生活。分からないことだらけでも精一杯頑張った。

初めにテント生活。とても簡単にたてられる2人用のテントだったが、通気性があまり良くないテントだった。でもテントの中でも色々な工夫が出来た。制服などはよく使うものだからテントの中でハンガーにひっかけてしわをつけないようにしたりをしました。テントは前半、中間あたりは寒いし、つかれがたまっていてつらかったけれど、後半あたりからはもう何も感じなくなった。でも二人でテントで寝たから、色々の話などができて楽しかった。

プログラムでは特にサイエンスとカルチャーが楽しかった。かるちゃーでは各国の伝統文化を体験しました。言葉とかはよくわからなかったけれど、ダンスを踊った。体をたくさん動かして踊れたので楽しかったです。サイエンスでは分光学についてをやりました。自分たちでLED光源から分光器をつくったりをしました。発熱電球、ランタンの光、スペクトルを見たりしました。普段は肉眼でみることができないものなので、とてもきちょうな体験だと思いました。

また、広島に行ったのも印象的。初めて行ったし、原爆ドームなどではとても怖かった。どんだけつらかったかがわかりました。また写真などをみて飛行機などや、けがをしてしまっている人、なにもなくなってしまった土地、とてもかわいそうだった。

今回のジャンボリーではたくさん学べた。キャンプ生活をとおして、友達もできた。団から一人だけしか出なくて初めは不安だらけだったけれど、とても充実できました。

思い出に残ったジャンボリー

たけのこ班　深見 宇彰

僕は最初、正直に言ってジャンボリーは乗り気ではありませんでした。電車に乗っているときも、不安とこの長いキャンプへのだるさがおしよせていました。重い荷物を持ちながらの移動は楽なものではなく、山口県のきらら浜に着く前に疲れてしまいました。

着いたらすぐにテントを張るのを始めましたが、また不安がここで押し寄せてきました。僕は普通に外国人としゃべれるのかと。結局あまり話しませんでしたが、ジャンボリーに行く前に「日本が日本でなくなる」という話を聞いていたので、これからどんな毎日が始まるんだと不安で、もう今日は寝られないだろうと思いつつ、普通に寝れました。

そんなわけで第１日目が始まりました。

あまり期待していませんでしたが、期待以上のすばらしいプログラムが僕を待ち受けているとはこのとき思っていませんでした。こういう行事にはつきものの最初の式「開会式」ですが、ぼくは最初、やはり開会式だからどうせ堅苦しいものだろうと思っていましたが、その予想は見事に空振りしました。決して堅苦しいものではなく、その逆、とにかく楽しかったです。和太鼓のパフォーマンス、アイドルなどが出てきて、いつの間にか僕も、もう先ほど書いた不安は忘れて普通に楽しんでいました。まさかこんなものとは、と本当に驚きました。

開会式が終わると普通に寝て、その日からまたイベントづくしの毎日ですが、今僕が楽しかったなあとか勉強になったなあと思ったイベントの二つは、広島ピースプログラムとアぬリーナショーでした。

まず広島ピースプログラムですが、それは二日目か三日目のイベントでした。朝からバスに乗って広島に向かいましたが、着いたときは本当に人だかりがすごいなと思いました。原爆資料館は前にも行ったことがあるので二回目となりますが、原爆資料館を見学しながら、本当に平和って大事だな、と当たり前のことをしみじみ感じました。その後に地下のホールに行き、原爆の歴史についての映像を視聴することになったのですが、一つ気になったのがアメリカのスカウト達のことです。アメリカはこの原爆の加害者側と言える立場なので、見るのがいろんな意味でつらいのじゃないか、と思いましたが、アメリカのスカウト達はとても真剣に観ていました。やはり国同士は過去のことでいがみあうのではなく、友好な関係を築くことが平和への第一歩なのだなとなぜかそこで思いました。

そしてアリーナショーですが、七日目ぐらいのイベントで、開会式のような楽しいものだと聞いていたので期待していたのですが、やはり期待通りでした。もうとにかく有名人がたくさん出演していて、楽しくてもう踊ったり、叫んだりとその日はとにかくあばれました。他にも首相の話、皇太子の話や、飛行機のパフォーマンスなど、もうすごいとしか言えませんでした。

そしてあっという間に約１４日間がおわりました。最初はだるいとさえ思っていたのが、帰るときはもうとにかくすがすがしかったです。いつものつまらない毎日を、このジャンボリーが僕の毎日を変えたとさえ思いました。学校の行事とはまた一味違う体験ができました。家に着いたときはもうジャンボリーがなごりおしいぐらいでした。

次のジャンボリーも楽しみにしています。

山口県での 13 日間

レボリューション班　藤沢 翔平

僕は、７月 28 日から８月 10 日まで山口でキャンプ生活を送った。そこでは色々な体験をすることができた。

僕は最初、ジャンボリーに参加したくなかった。2 年前の日本ジャンボリーで少し大変な思いをしたから、今回もまた大変なものだと思っていた。山口県にいくまで、行くのが嫌だった。28 日を迎え、緊張と不安を募らせたまま山口県へと向かった。

山口県での生活は、本当に楽しかった。山口県に行ったら「楽しむだけ」と思っていたので、楽しもうと努力していたが、努力をしなくても楽しめたのでよかった。

山口県での生活は、驚きと発見の連続だった。自分のサイトを出ると、周りには外国人しかいないという状態に驚いた。朝起きて、トイレに行くと、外国人しかいないという生活が毎日続いたので、茨城県に帰ってきて逆に不思議に思ってしまった。発見ことというと、スカウトは国境などが関係なく一つになる力を持っているということだ。セレモニーのときに、違う国同士のスカウトが笑い合っていたり、協力している映像をみた。他にも、活動中に陽気に話しかけてくれるスカウトもいた。そのように、みんなが平和に仲良くできるのもスカウトなのだと感じた。

僕は、リボリューション班の一員として、ジャンボリーへ参加した。みんながいい人でとても楽しくて、とてもおもしろい班だったと思う。最初は。チームワークが全くなく、料理を作ったりプログラムを実行するのにも時間がかかっていた。しかし、徐々にチームワークもよくなっていき、時間も有効に使うことができた。班長の井端は、優しいけれど班員を引っ張ってくれた。岡本陸は。普段はふざけているがやるときはやる、とてもメリハリのある人だ。他の団指導者4人も、とてもいいやつだった。女子も上手に男子をまとめていた。みんながいたからジャンボリーも楽しむことができたので、本当に班員の皆には感謝している。

今回のジャンボリーを通して、世界には様々な人がいるのだと改めて実感した。様々な人種や考え、生活習慣などがあり、私たちは互いに尊重し、助け合って生活していかなければならない。そのような社会をつくっていければ、人間は平和に暮らしていけるのではないかと思った。

スカウトとして

レボリューション班　佐藤 洋希

ボーイスカトを始めて8年になりました。そして僕は今年の夏、162 の国と地域から2万人をこえ

るスカウトが集まる第 23 回ワールドスカウトジャンボリーに参加しました。そこでの学んだことや経験したことは、これからの人生によい影響を与えたと思います。ワールドスカウトジャンボリーに行ったことで考えたことが3つあります。

1つ目は、気持ちを通い合える友達がいることの大切さです。14 日間真夏の太陽の下で過ごせてきたのは共にいてくれた友達のおかげであり、その他のなにものでもありません。自分が困っているとき助けてくれたりする友達を見ていると、友達の存在がいてくれるのはとてもありがたいことなんだなと深く考えさせられます。

今までつくば3団で一緒の友達との仲はさらに深まったなと思うし、新しくできた友達とも仲良くなれたと思います。

2つ目は、チームワークの大切さです。ワールドスカウトジャンボリーに参加する前に事前訓練として一泊二日のキャンプを3回行いました。一回目のキャンプは、ひじにひびが入っていてギプスをしていたため泊まることができず残念な気持ちでした。二回目と三回目のキャンプには宿泊して参加しました。同じ班になった友達と、一緒にテントを組み立てたり、食事を作ったりしている中で、ちがう団に所属しているスカウトとも、たくさん話をするようになりました。毎晩、最後に班会議をして、反省や話し合いもしました。

この事前訓練を通して、みんなで協力しないと仕事が進まないことや、一人でやるよりみんなでやった方が楽しいことが分かりました。さらに、世界ジャンボリーでは 14 日間も一緒にキャンプ生活をしたので、わがままは嫌われるし、思いやりが大切だということを痛感しました。

3つ目は、今までしたことがないことへの挑戦の大切さです。ワールドスカウトジャンボリーの前に、スコットランドのスカウトが2人、僕の家へホームステイに来ました。日本語は「はい。」「ありがとう。」「こんにちは。」しか話せない2人でしたし、僕も英語をあまり話せないので、会った時はすごく緊張しました。でも、二泊三日を一緒に過ごした後には、お互いに、

「ジャンボリー会場で会おう。」

と約束して、晴れやかな気持ちになりました。最初は、ホームステイなんか受けて大丈夫かなと不安でしたが、やってみて楽しかったです。

ワールドスカウトジャンボリーに行ってみると、外国から来たスカウトは、髪の色も肌の色も体型も、日本人とはちがう見慣れない外見のスカウトたちでした。でも、いろいろな活動を一緒にやって、楽しい時に一緒に笑ったり、握手をしたり、おみやげを交換したりしていたら、自然とみんな同じスカウト仲間だと思えるようになりました。ジャンボリーに参加して本当に良かったと思いました。「和」というジャンボリーのテーマをこれからも大切にしたいです。

14 日間のワールドスカウトジャンボリーを経験したことは、この夏1番の思い出であり、感動でした。所属しているつくば3団のリーダーたちが応援してくれて、壮行会も開いてくれました。そんなみんなのおかげで参加できたことに感謝して、これからもやりたいことに挑戦していきたいです。

世界が集まるジャンボリー

ホークス班　齋藤 華

私はこの 23WSJ を終えて思ったことがいくつかあります。

それは、世界は広いということです。ジャンボリーでは自分達のサイトに母国の国旗を上げます。そうすると、サイトの周りを歩くだけで自分の知らない国旗がたくさんあることがわかります。

また、開会式では参加国の国旗の入場がありました。知らない国ばかりで驚き、興味が湧きました。もっと、世界を知りたいと思うようになりました。そして、ボーイスカウトは世界と繋がっているということも知ることができました。そのおかげで、普段の活動も世界のスカウトに負けないよう技能を身に付けたいと思うようになりました。

2つ目は、英語は役に立つということです。開会式もアリーナショーも閉会式もプログラムも英語で行われます。開会式、アリーナショー、閉会式は画面に英語の字幕が出るのでなんとか少しはわかります。しかし、プログラムやの方外と国のコミュニケーションでは字幕ありまはせん。このジャンボリーで学校の英語はあまり役に立たないと感じました。でも、英語が全てではないこともわかりました。身振り手振りと少しの英語で伝わります。その少しの英語の中で私が一番便利だと思った単語を紹介します。それは「Excuse　me」です。これは使える単語です。混んでいる時に通してもらうときや、話かけるときに使えます。

そして、これが良かったということは2つあります。

1つ目はこの世界ジャンボリーの会場が日本だということです。開催国ということで、外国の方は日本のネッチがほしいらしくたくさんの方に声をかけられました。なので、自分が欲しいネッチを手に入れることができました。

2つ目は荷物の整理がきちんとできたということです。前回のジャンボリーで大雨が降ったのでいつでも出かけられるように毎日寝る前、荷物整理をしました。これは大切なことだと思います。

次の日本ジャンボリーは 2017 年です。今度は地区で行くので、23WSJ の仲間と同じになれないのは残念です。しかし、クジャク班の子と一緒に日本ジャンボリーにいけるのはとても楽しみです。そして、この貴重な体験を支えて下さった全ての方々に感謝したいです。

世界ジャンボリーにて

ホークス班　中村 奎斗

茨城県から山口県へと電車、新幹線、バスを乗り継ぎ、きらら浜へと着きました。そこでまず驚いたのは、日本語がほとんど聞こえなかったことです。見渡す限り外国人ばかりでした。話に聞いていましたが、ここまでとは思わず、今回の世界ジャンボリーでの自分の目標である、外国人とたくさん交流していろいろな文化に触れて自分の視野を広げることを達成するどころか、外国人とのコミュニケーションをとることすらできないのでは、と思った。その上、00407 隊には友人が少なく、事前訓練キャンプのときの班員や古河第 1 団の数人しかおらず、協力してこのキャンプを過ごすことができるのか、ととても不安でした。しかし、日がたつにつれて、仲間との交流が増え、たくさんの人と中四間なりました、そして夜のプログラムでは、外国人と伝統的な遊びや踊りをしたりして交流をしたり、少しではあるが会話をしたりなど楽しく過ごすことができました。

それからは毎日が楽しくなりました。プログラムのないフリータイムでは、マルキュウへ行き、買い物をしたり、広場で野球やキャッチボールなどで楽しんでいました。広場で遊んでいると外国人スカウトがやって「僕たちも入れてくれませんか」と言う人達　がたくさん来ました。もちろん、一緒に遊び、コミュニケーションをとりました。お菓子やジュースももらってーとょに食べたり、ワッペンやチーフを交換したりもしました。

そして食文化の交流プログラムでは、いろいろな国をまわり、手でご飯を食べている国や、アリなどを食べている国などとても興味深いものが多く、他の国の文化を体験することができて、とても良い経験になってよかってです。

しかし、楽しいことばかりではなく、つらいこともたくさんありました。

まず、食事です。毎日量が多く、残さず食べるのがとてもたいへんでした。特にポテトサラダと牛乳がキツく、今でもポテトサラダは食べたくありません。

次に昼食です。昼食は基本、手を加えたりしなくて済むような、パンやポテトチップスなのですが、ピタパンは味がなく、フランスパンはカタくて食べにくく、とても大変でした。

次に暑さです。また、暑さに慣れていない初日、テントの中は暑くて耐えられませんでした。クーラーののかかった冷えた部屋で過ごしてきた自分は、慣れるまで毎日大量の汗をかいていました。その上、お風呂にはいることができず、体をふくし

かできませんでした。そのかわり、入れたときの爽快感はすごく、それも楽しみになりました。シャワールームは個室ではないので外国人と水をかけあったり、シャンプーを借りたり、ここでもたくさんコミュニケーションをとれてよかったです。

この世界ジャンボリーで他の国のいろいろな文化を見て知ることずできてとても良い経験になりました。そしてこの経験を生かし、今後に役立てていければいいなと思いました。

最高の 14 日間

たけのこ班　富田　涼心

私は、7 月 27 日から 8 月 9 日までの 14 日間、山口件きらら浜で行われた第 23 回世界スカウトジャンボリーに参加しました。

そこで、私は、多くの外国スカウトに出会いました。

また、普段原隊では、体験する事のない、14 日間のキャンプや、いろいろな国の文化や言葉を学ぶことができました。

その中でも、特に思い出に残っているの事が2つあります。

1つめは、プログラムです。プログラムは、Culture と Science と Comunity と Nature と Water と Peace の大きく分けると 6 ありました。その中でも1番楽しかったのは、Water です。私たちの班は、ビーチバイクをやりました。つな引きでは、たけのこ班のみんなと協力しました。

ビーチバイクは、サドルが高くて、外国人用のサイズで、すごく大きかったです。そして、ビーチサッカーは、砂浜がすごく暑かったです。そして、その後に，班のみんなで、瀬戸内海の海に入りました。海に入れたのは何年かぶりだったので、すごく楽しかったです。

2 つ目は、開閉開式&アリーナショーです。開会式には、山口県のご当地アイドルの山口活性学園など、アリーナショーには、しょこたんこと中川翔子さんや DANCE EARTH PARTY など、閉会式には、皇太子様と安倍総理などが来ました。また、会場のみんなと盛り上がることができました。すごく楽しかったです。

そして 407 体は、茨城県トレーニングチーム栃木県の合同隊なので、今後会うことがあまりないかもしれませんが、また 00407 隊のみんなとキャンプができるといいなぁと思いました。

最後に、ジャンボリーは、普段体験できないことばかりで、本当にすごく楽しかったです。

23WSJ に参加して

レボリューション班　吉田 有佑

00407 隊の一員として、今回山口県の世界ジャンボリーに参加して一番感じたことは「とにかくめちゃくちゃ楽しかった」ということです。最初は世界中の人と交流するということでとても緊張していて、英語の力を伸ばすだとか異文化理解だとかを公言していたのですが、向かった先で出会った外国の方々はとうも優しくて親切でした。初めて会ったアメリカ人達と一緒になって食事をする機会も得ることができました。ステーキをごちそうになり、美味しいかと聞かれて、正直塩辛すぎたのですが美味しいと答えました。水を一杯飲みたくなりましたが、これも異文化理解だと自分に言い聞かせて必死に食べました。外国の人との味覚の違いにも驚きましたが、彼らのフレンドリーさにはもっと驚きました。誰もが笑顔で話しかけてくれるので、一緒にいる側としても非常に良い居心地でした。などなど、今回のジャンボリーには非常に学ぶものが多かったです。かなり身構えてしまっていたのですが､そんな必要はなかったんだと後から思いました。アーティストなどの公演したショーなどで色々な人と友好関係を築くことが出来たように感じます。イタリア人の男性で同じ年齢くらいの人とネッチを交換したり、一緒に方を組んで踊ったりもしました。隊では自分から仕事を求めるようにして早めのペースで仕事を片付けるように努めました。偶に隊員とけんかをすることもありましたが直ぐに和解し、より絆が深まったように感じます。今回、外人スカウト達との様々な交流で感じたことは、言語や文化が違うことは壁ではなく個性であって、その個性に彼らはむしろ、興味を持ってくれているということです。日本の観光地はどこ?と聞かれたので、とりあえずアキバのオタク文化を紹介しておきました。とにかく、グローバル文化だとか国際交流を抜きにしても、世界ジャンボリーは明るく、楽しい平和的なものでした。

平和と云えば、広島の平和記念館を見に行きました。私たちの隊は外国人達と、同じホールで、原爆被災者の方のお話をお聴きしました。被爆者の話を聞いた外国人達はみな驚いていて、こんなひどいことがあったのかとショックを受けている様子でした。ホールではスカウト達が壇上に立ち、即席で感想を言う機会があり、その中でイギリスの女性が緊張して喋れなくなってしまう場面がありました。そんな時、周りにいた外国人スカウトたちは一様に彼女への励ましの言葉をかけました。この光景を見て、私はこういうことの積み重ねが平和につながっていくのだなぁと感銘を受けました。小難しい国どおしの話ではなく、その国の人間一人ひとりが友好的な関係を構築していくこと。それに世界はかかっていると感じました。

最後に、今回の世界ジャンボリーはまさに世界の国々、195 か国の平和象徴だと感じました。

人生経験

レボリューション班　池田 美鈴

第 23 回ボーイスカウト世界ジャンボリー。13 日間のキャンプ生活は、私にとってこれからの人生を生きるための糧となったと思う。理由は2つ。

1つ目は人間関係がいかに難しくすばらしいものであるかを、気付けたということ。私が共に活動したレボリューション班のメンバーは、当たり前だがとても個性豊かだった。正直なことを言えば、最初から全員に良いイメージを抱いていた訳ではない。私には苦手だなと思う人がいた。そのこそが、ジャンボリーが始まってから辛いことになるとは、事前訓練の時は思っていなかった。

13 日間一緒にいるということは、一緒に生活をするということ。いくら苦手で嫌いな人とも生活をしなければならない。分かり合っていない人と時間を共にするのは、ストレスだった。うまくいかず、誰かに相談することもできずに何度も泣いた。

しかしそんな中で、ひとり一人をちゃんと見るとそれぞれに良いところがあるということに気が付いた。それまで苦手で嫌いというレッテルを貼って見ていなかった人間性を見た。

いつもの言葉は冷たいのに本当は優しい人、ふざけてばかりで人の話なんて聞いていないのに人ができないようなことをこなしてしまう人。

ちゃんと見ていなかった自分がいた。否定しかしなかった自分がいた。でも、いくら嫌いだった人のことも認められた自分も、そこにはいた。そして、ああ、認め合うって、心を開くって、仲間になるって、こういうことなんだなあ、と思った。

気付かせてくれた班の仲間には本当に感謝をしている。それに、これからの私の人生でまた人間関係で悩んでも、このことを思い出して乗り越えられる自信がある。B-P は、ボーイスカウトを通して、これを伝えたかったのではないかと思う。

2つ目は、何かを人と共有すれば言葉の壁なんて簡単に乗り越えることができることを実感したこと。

全くはなすことができない外国のスカウトともパフォーマンスでつながることができた。ほんとに楽しい思い出だ。

今大会のことを絶対に忘れずこれからも生きて生きたいと思う。

23WSJ の感想

たけのこ班　皆川 拓哉

スコットランド隊の受け入れの前はいろいろ考えてあれしたとかこれしたいとかかんかえていたり、言葉が話せないなど考えていたが、いろいろかんがえていても思いどおりにはいかいず、言葉を全然通じなかったが、思いどうりにいかなくてもそれはそれでいろいろなことがわかったし、ことばなんて自己紹介ぐないしてつかわず、身ぶり手ぶりでだいたいつたわるし重要な単語だけを言えばつたわるので言葉はそんなに必要ないと思った。

それにスコットランド隊の受け入れでいちばん楽しかったのは枕なげだった。体格の差はまさに大人と子供ぐらいだったが、枕をなげあって当たったり当てられたりするのはたのしかった。

ジャンボリーにきてからはまず会場のひろさにびっくりした、そして人の多さにもびっくりした。

開会式では、ブルーインパルスが飛んだりしてとてももりあがっていてたのしかった。ジャンボリーの夜はいつもお祭りさわぎてはしゃいでいたりみちばたでこうかんしていたりして、歩いているだけで楽しかった。その国の人の文化や習慣がしれてよかった。ジャンボリーのご飯はみんなで英語のレシピを見ながらつくって、失敗もしたがおいしかった。ジャンボリーで受け入れたスコットランド隊のサイトがすぐ近くにあり、合いにいくことができた。

ジャンボリーでは他では絶対に体験をすることができ、いろいろなことを学び、いろいろなことをすることがでした。ジャンボリーに行くために協力していただいた隊の指導者の方や、派遣隊の指導者の方そして、いろいろな面で支えてくれた両親に感謝したい。

第 23 回世界ジャンボリーに参加して

レボリューション班　岡本 陸

私は、4 年に 1 度開かれる世界ジャンボリーに参加しました。今回は、山口県きらら浜で開催し、162 の国と地域から 3 万人が集まり、2 週間、世界の仲間とともにキャンプをしました。想像していたよりスケールが大きく 3 万人の参加者がテントを張った風景や世界の国々の人がたくさん見かける状況は今まで経験がなく、日本にいながら英語が飛び交う雰囲気に圧倒されました。また、慣れないテント、集団生活を体験し、また世界の方々と交流でき貴重な体験と感動、驚きでした。

特に、世界の文化や環境問題、さらに平和を考えるプログラムを体験し、文化にふれることでその国々や地域の特色を理解することができ、環境問題では、一人一人の心がけで地球温暖化や病気の方々を助けることなどを学び、さらに平和については、広島原爆ドームを見学し原爆について世界の仲間とともに平和について共有することができました。

私にとって世界ジャンボリーはたくさんの思い出や友情をつくることができました。こんな経験ができたのは、ボーイスカウトの隊長たちが訓練で教えてくれたことや両親の支え、協力がなければできなかったことです。感謝してます。ありがとうございました。

コスタリカのコーヒーに感動

レボリューション班　藤原 琉晟

大会当日、気分は高らかにかつ不安も抱えながら大会の目的地を目指しました。新幹線はとても多くの人が乗り、中には外国隊の方もいらっしゃいました。現地に着くと多くの IST の方が迎え入れてくれました。開示用はほぼできており、2 年前見たあのアリーナがもう一度歓迎してくれました。テントを張り、自分達の場所が完成したとき今大会への意志は一層強くなりました。開会式、多くの完成が響きわたりついに大会がスタートしました。次の日から次々とイベントがあり、スケジュールが詰め込まれており、大忙に日々を送っていました。中でも自分のお気に入りはウォータープログラムがこの時期夏だったのでとても気持ちよくかつ終盤だったので心と身体をリフレッシュすることができました。その他にも各国のブースのコスタリカのコーヒーを飲んだときはうまさのあまり感動しました。ブラジルもよかったのですがコスタリカが一番です。他にも印象的なのが広島でのピースプログラムです。2 年前も来ましたが改めて来てみると心が染みてきます。現地で遺した爪痕や遺族の方々の思いが痛いほど心にきました。外国隊の方々もいました。普段、快活で一緒にいるすテンションも上がってしまえ彼らが真剣に話を聞いて中には涙を飲んで話を聞いている人もいました。

日々の活動の中には外国隊との交流があったのですが、夜でもテンションが高くおいしい夜食やプログラムを用意してくれました。中にはこの前会ったホームステイの方がいてとても楽しく過ごせました。

アリーナショーでは有名人である中川しょうこさんや EXILE の USA さん、安倍晋三総理大臣などが多く来て終始気分が上がりっぱなしでした。日本ジャンボリーとは規模の違いにおどろききました。そして最後の日前日、閉会式が行われました。マーティ・フリードさんのギターテクに付くに感動し、花火が上がりました。2 年前と同じ花火です。最後の感動を運んでくれました。

そして次の日、感謝しながらこの地を後にしました。会場での IST の皆様や山口の方々、そして何よりも体調やリーダー、班の皆にとても感謝しています。

ジャンボリーを通して

たけのこ班　高見　彰太

僕は、ジャンボリーでたくさんの外国スカウトとコミュニケーションをとる戸井亜子とを目標にジャンボリーに参加しました。しかし、英語が苦手なので、大会のスタッフの方も外国の人ばかりで、配給ですら少し緊張してしまいました。けれどあまり難しい単語がなくてメニューを考えてくれたスタッフの方々に感謝したいと思います。プログラムでもあまり難しい英語がなくて良かったですが、1 つ困ったことがありました。GDV のブースで、日本語でやる内容が書いてあったのですが、直訳しすぎていて英語の方が分かりやすいということが起こってていました。そのことが一番言語のことで印象に残っています。他にもバッヂ等の交換で相手が英語を喋れないフランスの方でお互いに苦労したことがありました。また知らない単語も数多くあったので相手の行っていることを理解するのがとても辛かったです。それらを改善するためにやはり英語の勉強はとても大切だと痛感しました。最後に 1 つジャンボリーによる弊害があって、帰って来てから人にぶつかると Sorry と言って、謝ってしまうことがありました。もし海外に行って帰ってきたときには気をつけようと思います。

ジャンボリーを通して感じたことは、コミュニケーションをとるには英語だけでなく、ゼスチャーなとの言語以外のことも大切だと思いました。さらに夏休みの宿題の大変さを改めて感じました。

23WSJ に参加して

ホークス班　澤村 悠希

「いよいよ 23WSJ の日が来た !」
僕は家を出るとき、そう思いました。

不安ながらも楽しみにしていた 23WSJ に行くことになり、僕は車や電車の中で、外国の人たちと上手く話せるか、みんなの足手まといにならないかと緊張していました。また、受験生ということもあ勉強のことでも不安がありました。しかし、なかなか味わうことのでない体験をしに行くので、勉強のこと一時的に忘れることにしました。

長時間バスと電車に乗って、いよいよ 23WSJ の会場「きらら浜」に到着しました。着いた時、はじめに驚いたことは、会場がとてもきれいな事でした。2 年前に行われた 16NSJ では、あまり整備が進んでいなかったためほとんど砂漠のような状態でした。そして，整備された会ジャンボレット用又

僕は、ここで 10 日間仲間と過ごすと思うと、不安と楽しみな気持ちになっていきました。

会場に到着して、荷物をまとめて設営しているとき、僕はあることに気がつきました。それは、当時身長 173cm の僕より高い人がたくさんいることです。外国人の身長は高いとは聞いていましたが、まさかあそこまで高いとは思いませんでした。

会場に到着してから 3 日後、ついに楽しみにしていた開会式が始まりました。開会式には、様々な方がゲストとして訪れました。安倍首相や交替指導者様といった方々が、ボーイスカウトのために来てくださいました。

開会式が終わり、ジャンボリーが本格的にスタートしました。そして、最終日までにいろいろな事をしました。外国人との交流や路上マーケットでの物々交換、海でのプロジェクトや仲間達トの友情を深めるプロジェクト、班の仲間と協力してごはんを作ったり、考え合ったりしました。その他にも、たくさんの楽しいことがありました。しかし、そんな数多くのイベントやプロジェクトの中で特にイン使用に残ったものは、広島での「ピースプログラム」です。1945 年 8 月 6 日、第二次世界大戦の最中に広島に原爆が落とされました。そして終戦から 70 年補迎える広島で、23WSJ の参加者が語り合うプログラムでした。

このプログラムを通して僕は、欄の命の大切さや戦争の恐ろしさなどを、改めて実感することができました。

様々なイベントやプロジェクトを乗り越え、世界ジャンボリー修亮まであと 2,3 日というところで、僕は高熱を出してしまい、閉会式に出ることができませんでした。最初はとても苦やして気持ちになっていましたが、心配してくれた仲間達には、今でも感謝しています。このジャンボリーを楽しく過ごすことができたのは、仲間達や、リーダーの方々の支絵があったからです。次の日本ジャンボリーで再会したいです。ありがとうございました。

ジャンボリーの感想

たけのこ班　荻上 天

僕は今回世界ジャンボリーでたくさんの国の人たちにあってきました。中でもレバノンやインドの人たちが特ににぎやかで、日にちがたつにつれ、みんながレバノンやインドの人たちのようになっていったことが印象に残りました。また、今回丸久（スーパー）や医療施設など、日本ジャンボリーにはなかったものもありました。他にもアリーナショーや展示といったイベントもありました。アリーナショーでは中川翔子や飛行機のアクロバットなどがあり、とても面白かったです。他にも山口の有名な場所や広島にもいきましました。僕たちの隊は秋芳洞に行きました。秋芳洞はとても涼しくよいところでしたが、ライトアップがいまいちよくなくてただ涼しいところに行ったという思いでしかできませんでした。

広島は今回で 2 回目で、前回とは違った視点で見ることができました。

今回の世界ジャンボリーでは日本と海外のちがいや普段味わうことのない楽しみを味わうことができました。またぜひ参加したいです。

世界ジャンボリーを通して

たけのこ班　松木涼夏

私が世界ジャンボリーに参加しようと思ったきっかけは 2 年前の日本ジャンボリーです。そこでの経験の何もかもが新鮮でかけがえのない思い出になりまたきらら浜であの感動を味わいたくて参加を決めました。

会場には日本人より外国人のほうが多くていろいろな文化が入り混じり、一度にいろんな国に旅行をしているようでとても不思議な気持ちになりました。それと同時に楽しみな気持ちや不安な気持ちにもなり、ジャンボリーが始まるんだなぁと感じました。

プログラムや交流会では、外国の食べ物を食べたり、伝統的なダンスや音楽などの文化に触れたりする事ができ世界ジャンボリーならではの体験ができました。プログラムの中でも特に広島ピースプログラムでは 2 年前よりも悲惨な戦争と向き合う事ができ、平和について深く考えさせられました。

そんな中で私が一番強く感じたことは、互いの違いを認め合う事ができれば、国も言語も文化も違う 3 万人がこうして生活を送ることができるのだということです。自分たちにとって当たり前のことが外国の人からしたらありえないことだったり、またその逆だったりしてびっくりしたことが何度かありました。でもそこで相手のことを否定せず、受け入れることでその国の生活の様子が分かったりそこからいろいろなことを学ぶこともできました。自分たちの文化だけでなく他の文化に触れてみることであたらしいものをみつけることができるという事は、このことに限らず友達関係でも勉強でも頑なにならずに柔軟性を持つことで得られるものが増えるのだということを自分自身に教えてくれたと思います。更に、異文化理解の心を広げていけば、世界の平和にもつながっていくのではないでしょうか。

ジャンボリーで外国の文化を知るという自分自身の目標も達成でき、毎日朝から晩までいろいろなところでたくさん刺激を受けた、いい 2 週間になったと思います。会場での思い出から、訓練キャンプや集会まで全て含めて、人生で一度しか味わうことのできない、いい経験になりました。また、参加させてくれた親にも感謝したいです。この経験を今後のスカウト活動や普段の生活、更に進路などにも活かしていきたいです。

23WSJ に参加して

ホークス班　並木 理久

楽しかったことは、アリーナショー、福島平和フォーラム、各隊との交流、外人との物交換、の 4 つです。

アリーナショーでは、しょこたんなどの様々なアーティストや、安倍首相などの VIP など、様々な人たちが来て大盛況となりました。日本人に比べて外国人はテンションがとても高くて驚きました。

広島平和フォーラムでは、原爆資料館を通して戦争について様々なことを学べました。外国人もここでは、しっかり見学したり聞いたりしていました。

各隊との交流では、イギリス隊などとの交流をしました。同じ歌でも国によってメロディが全然違ったりとお互いの文化を知ることができたと思います。

外人との物の交換では、最初はかなり緊張しましたが、だんだんなれてきてはっきり英語を話せるようになりました。取引のための簡単な単語もおぼえられ、英語に対する意欲がわきました。

反省点

反省点は、テントに物を忘れたり、夜になっても洗濯物を取り入れなかったりという点でした。最年少での参加となりましたが、もっとしっかりやれることがあったのではないかと思います。

よかったことは、物干を作って、たくさん干せるように工夫したり、話し合ったりしたことです。

これからも日本ジャンボリーに参加したりしてスキルを高めていきたいです。頑張って英語を勉強して、生かせる日がくるといいと思います。

24WSJ にもできれば参加してそのためにも英語を頑張って行きたいと思います。

とても楽しい世界ジャンボリーとなってよかったです。

23WSJ に参加して思ったこと

ホークス班　門屋 快

ぼくが世界ジャンボリーに参加したいと思った理由は、海外や日本など多くのスカウトと交流したかったからです。二年前の日本ジャンボリーでも、ほかのスカウトと交流することができ、それが楽しかったのでもっと色々なスカウトと交流したいと思いました。

世界ジャンボリーに参加して一番よかったと思う

ことは、希望通り色々な人とコミュニケーションをとり、交流することができたことです。今回のジャンボリーでは茨城や日本の人をはじめ、他の国など色々な人と話したり踊ったり仲良くなることができました。

今回のジャンボリーでは一緒に参加した 00407 隊や班のみんなと一番関係を深めることができました。一つ後悔している点は、ジャンボリーの途中から積極的にみんなと話すようになったので、事前訓練から積極的に話してればよりよかったことです。

世界ジャンボリーでは、2 年前の日本ジャンボリーよりも外国のスカウトが多く参加していました。ぼくは英語が使えるので、外国のスカウトと積極的に話すことができました。フードフェスティバルや閉会式の前の「そなえよつねにゲーム」なども外国のスカウトと交流することができました。通訳をしたので、班や隊のみんなの役に立てたと思います。

ピースプログラムとして広島の平和祈念館と原爆ドームにいきました。そこで、ぼくは戦争のひどさと平和の大切さを感じました。B-P が目指したように、スカウト活動を通してみんなが仲良くなれば、平和な世界になれると思います。

ネイチャーのプログラムでは秋吉台と秋芳洞にいきました。そこでは、自然の美しさをまなびました。大きなものが長い時間をかけて少しずつできてくるのをみて、小さなことでも重ねていけば大きくなるのだなと思いました。

サイエンスのプログラムではたくさんのブースから班で二つ選んで参加しました。サイエンスとボーイスカウトの活動の関係性について学んだり、生活でどのように役に立っているのかなどについて学んだりしました。サイエンスも日常で大切だなと思いました。

文化体験のプログラムでは、コロンビアのダンスや石川県の金箔シールなどを体験しました。海外の踊りなどを体験できてよかったです。

フードフェスティバルではほぼすべてのサイトで自国の食べ物を少しずつだして、参加者が回って食べるといる仕組みで世界の食べ物を食べることができました。前半は、隊のサイトで桜餅と緑茶を提供して外国のスカウトに桜餅がなにでどういう風に作られているかを説明しました。後半では、サイトを回りコロンビアのアリや、イギリスのお茶、ドイツのスープなどを食べることができました。世界の食文化を体験できてとてもいい経験になりました。

今回のジャンボリーでは、日本や世界のスカウトと色々なプログラムやアクテイビティを通して、交流できました。参加の機会を与えて下さった皆様、つくば 3 団や 00407 隊のリーダー、県連の方々に非常に感謝しています。ありがとうございました。

お互いを知った上で連携をとる

たけのこ班　小竹 善宣

今回の訓練では班員どうし、また隊員どうしでよくコミュニケーションがとれたと思う。お互いを知った上で連携をとることができたのでよかった。その一方、点検やプログラムで時間が遅れてしまうというような改善すべき点も多数あった。本大会ではたくさんのプログラムや他国のスカウトとの交流が待っている。このすべてを楽しむには、仲間と協力し時間通りに行動する必要があると思う。班長として班員をまとめ、全員で楽しんできたい。

ジャンボリーを終えて

ホークス班　真中 友輔

私が今回の 23WSJ で、たくさんの思い出を作ることがでさ、色々な国の人との出会いを通してたくさんのことを学ぷことがでさました。そのなかでも思い出に残っているのは、たくさんのスカウトたちとの交流、開会式、アリーナショー、閉会式、そして、秋芳洞です。

まず、海外のスカウトとの交琉では私は英語が得意ではありませんでしたが、海外のスカウトや指導者の方々とコミュニケーションをとっていく中で、実語の能力が上がったと思います。また海外のスカウトたちと少し会話ができるようになりました。

次に、開会式では有名な方々がたくさん来ていました。前回の I6NJ と今回の 23WSJ を比べると参加者の人数やゲストの人の数の違いなと比べ物にならないほどでした。参加者の人数が I6NJ とは比べ物にならなかったにも関わらず、全日程が順調に進みました。全日程が順調に進んだのは、スカウト 1 人 1 人が時間を守り集団生活を行った結果だと思います。

そして、ジャンボリー当日は初日からハードなスケジュールで I6NJ とは、だいぶ違いました。今回の 23WSJ では、天候にも恵まれ雨も降らずに全日程を終了することができました。しかし、気温はとても高く熱中症になってしまった人もいたようです。私は、連日の猛暑にも負けることなく 1 日 1 日の日程を成成し遂げました。

次に、アリーナショーでは、皇太子さまや安倍内閣総理大臣、宇宙飛行士の野口聡一さん、EXILE の USA さんなどが来ていました。その他にもブルーインパルスなども来ました。アリーナショーのときの色々な人の話では全部が英語だったため理解するのが大変でした。葵語で話しているなら日本語の字幕を出してほしかったです。

そして、秋芳洞は初めての鍾乳洞でしたが、とてもされいで感動しました。秋芳洞の出口アイスクリームよりも秋吉台のアイスクリームの方が美味しかったです。

最後に、閉会式で一番印象に残っていることは打ち上げ花火です。打ち上げ花火はたくさん上がりとてもきれいでした。そのほかにダリルスミスが来ていました。歌はとても上手かったです。たくさん歌を熱唱していました。

今回の 23WSJ を通して、たくさんの人とコミュニケーションをとることの楽しさや大切さ、多文化に触れることで私自信も成長することができたと思います。そして、普段の生活でも体調管理の大切さも学ぶことができました。これからのスカウト活動でも今回の 23WSJ で学んだことを生かして活動していけるように努力していきたいと思います。

23WSJ 報告書

レボリューション班　大脇 歩華

〈感想〉

私は、今回 00407 隊の隊員として 23WSJ に参加し、楽しくて毎日が新鮮で濃厚な 13 日間を過ごせました。

この 13 日間という期間は、初めのほうこそ長いと感じましたが、折り返したあたりからは本当に一分一秒を意識して過ごさないとあっという間に過ぎて行って、それほど私の中で、407 隊のメンバーの存在や、そこまでで作った思い出など、みんなと過ごした日々のすべてがかけがえのないものへと変わったということだと思います。

私のいた Revolution 班はきっとどの班よりも個性的で、まとまりがなくて、でも笑いの絶えない班だったと思います。このアンバランスでもきれいな感じが、13 日という期間を短く感じさせたんだと思います。個性的が過ぎるゆえに、班長が途中ダウンしてしまったり、動き出しが遅かったり様々なトラブルがありましたが、あの 9 人だったから乗り越えられたかは定かではありませんが、何とかなったんだと思います。

改めて、私の班はめちゃくちゃで、適当で、今思えば班長が本当にかわいそうで、でもこうして笑って思い返せるすごくいい班だったと感じます。

ジャンボリーが終わった今、この最悪にして最高な班が集結することはもう難しいけど、この強烈な思い出は忘れようと思っても忘れられないので、この思い出は大切にしたいです。

最後に、私は、23WSJ に参加できたことを誇りに思います。ひと夏の思い出でしたが、この思い出のために 1 年以上を費やしてきました。

日々挑戦し、そのたびに失敗もし、それを笑い飛ばしてくれる仲間がいたこと。これは、思い出以上の価値があると思います。

この 23WSJ で学んだこと、思い出、絆を大切にして、何年たっても 13 日間での日々の一瞬一瞬を思い出せるよう、胸に刻んでいたいです。

〈23WSJ 参加にあたって〉

● 参加したきっかけ

16NJ に一昨年参加し、そこでの楽しかった思い出や、やりきれなかった事の反省から、自分の成長を確かめる意味でも、16NJ の何倍も規模が大きくなった 23WSJ でスカウトとしての技量や自分が世界にどれほど通用するかを試したいと思った。

● 23 WSJ 参加が決まってから当日まで

面接を合格し、参加への気持ちが高ぶる中、参加資格である一級をまだ取得していなかった私は急ぎで取得し、結団式で初めて 13 日間を共にするメンバーと対面。

第 1 回訓練キャンプで班員が決まり、徐々に参加するという自覚が自分の中で大きくなっていった。

回を重ねるごとに、次第に班員へのよそよそしさがなくなっていき、最後の訓練キャンプでは楽しみという気持ちがかなり強くなり、当日を迎えるまでが待ち遠しく感じられた。

しかし、当日が近くなってくるにつれて、英語がうまく話せないことへの不安や、自分は代表として選ばれたということへの緊張が芽生え始めた。

〈23WSJ 振り返り〉

● 成長した点

活動に積極的に取り組めた
自ら新しいことにチャレンジできた
毎日必ず外国人と話すことができた
様々な文化に触れることができた
協調性をもって活動に参加できた

● 課題点

語学力が低い
諦めが早すぎる
一つの課題への改善が遅い
作業が基本的に遅れがち
先のことを考えずに行動してしまう
やりたことがはっきりしていない

● 印象に残ったこと

水着で歩いてる人多数
同い年と思えないルックスと顔面偏差値の高さ
文化の相違
みんなそろいもそろって英語上手い
ポケモンの人気具合
日本人に会った時の安心感
想像以上に多かった外国人
突如始まる伝統楽器による演奏、パレード
コーンフレークが瞬殺でなくなる
気を抜くと列を追い越される
曲がかかるとたいていの人が踊りだす
↑の中に入っていくと潰されかける
スカウトショップと丸久での長蛇の列
イギリスのテントがかわいかった
Ｗｉ-Ｆｉエリアの人口密度の高さ
基本的にトイレットペーパーは無い
最終日のシャワーの汚さ
アリーナへの移動中前後で始まる謎の掛け声
意外とみなさん優しかった
16NJ より明らかに楽しかった

訓練キャンプに参加して大会に向けて

ホークス班　根岸 由弦

WSJ の訓練キャンプに参加して感じたことがいくつかあります。

一つ目は、初めて会うスカウトをまとめるのが大変だということです。自分は班長をしているのですが、はじめはまとまらずあやふやなところが多かったのですが、訓練の回数を重ねていくうちにまとまりが出てきて班員から意見を言ってもらったりして楽に活動ができました。また，初めてでも自分が何をすべきなのかを考え自らできることを探して活動している姿が多く見受けられてやりやすかったです。

二つ目は、班の行動が早いということです。班員が考え行動し、できることを探し、協力して活動ができました。特に、設営・撤営はいつも一番に終了しました。班員同士が声を掛け合って行動したことが大きな要因だと思います。

自分は 15NJ、16NJ と 2 回のジャンボリーに参加しているので、そのときの経験を生かして活動をしたいと思います。また、班長として一歩前進してサポートするのではなく、一歩後退して後ろからのサポートを忘れずに活動していこうと思います。

訓錬キャンプで 80 のことはやったので，あとは本番で 20 のことをやるだけなので，準備を怠らず失敗を恐れずに活動していきたいです。

23WSJ を振り返って

僕は、訓練キャンプから「班長として大丈夫だろうか」と悩んでいました。指示を出しても聞かない、話を聞かないでも四回の訓練キャンプを通して班が 1 つにまとまってきました。

そして出発前日。荷物チェックを済まして最終確認をしました。「きっと大丈夫。」と心に言い聞かせてきました。

当日はいつもどおりに行き、ちゃんと駅に着きました。これからジャンボリーが始まります。大会初日からハードな内容で NJ とは違うなと思いました。でも班長として、弱音を吐かず、前を見て活動していました。順調に日々が過ぎていき、あっという間に閉会式。自分は最後まで班員をまとめ、楽しく過ごすことができました。

それは、班員ががんばって着いてきたからだと思います。

そして自分には夢が出来ました。英語をもっともっと勉強して将来は、海外のスカウト活動に参加しよう、というものです。

このジャンボリーで培った技能・知識・語学力を充分に発揮して、これからのスカウト活動に生かして活動していきたいです。

23WSJ 感想文

ホークス班　川島　瑠莉

私は、ベンチャースカウトとして初めての世界ジャンボリーに参加することができた。この場を借りて、23WSJ に行かせてくれた家族に感謝したい。

23WSJ では、たくさんの国のスカウトと交流することができ、自分の英語は、世界でも通じるんだ!という驚きで胸がいっぱいになった。これからもっとさまざまなことを勉強して、深い内容で世界の人達とディスカッションできるようになっていきたい。

私の心に一番強く残っているのは、なんといっても毎日日替わりで行う、プログラムだ。班ごとに行動し、単独行動では学べないものを学ぶことができた。特に、広島ピースプログラムは、2回目の広島だったので、最初に訪れた時よりも余裕を持って見て回ることができた。広島では、同じハブのスカウト達も一緒だったので、「平和ってどういうものだと思う?」とか、「あなたの国で一番の平和を感じられる時っていつ?」などと、同年代の外国スカウトがどのように日常を感じているのかがそれぞれの国ごとに違ったので、それを知れた事は、とてもいい経験になった。最後の日のお昼に行われたプログラムでは、「和　そなえよつねに」という 7 文字それぞれのカードを持っているスカウトとグループになり、お昼を食べるというものだったが、なかなか文字が揃わない中、お昼を食べることになった。イギリスのスカウト、スウェーデンのスカウト、コロンビアのスカウト、フィンランドのスカウトと同じグループになった。

話に加わるときに少し緊張したが、話してみるとみんなと打ち解けることができたので、とても楽しかった。それぞれの国によって違う学校制度や、学べる言語の種類など、日本では考えられないような高度な内容を学んでいるというスカウトもいて、驚いたし、実際に足を運んでみんなの国に行ってみたいなと強く思った。

現在は高校生でゆくゆくは将来、進むべき自分の道を決めるという大きな選択をすることとなる。その選択をする上で、自分がどんなことに興味があるのか、どんなことを自分の人生をかけてやりたいのかなど、たくさん考えるべきことがある。その

中で、この23WSJ で得た経験はその手助けになるのではないかと思っている。

また、私たちスカウトが現地で健康で、安全に生活できたのは、支えてくださった指導者の方々のおかげや、IST のみなさんのおかげであることは間違いない。本当に感謝したいと思う。清潔の保ち方やテントの乾燥、毎朝の点検では指摘されることもたくさんあり、大変だと思うときもあったが、今となっては、たくさんの知識を教えてもらったんだなと思う。

本当にありがとうございました。

第 23 回世界ジャンボリーに参加して

レボリューション班　末光渉一

今回の第 23 回世界スカウトジャンボリーは、自分の想像や予想を超えるものでした。当然楽しかったけどそればかりじゃない。13 日という経験したことのない日程でのキャンプは、僕にとっては過酷なものでした。

僕はこの第 23 回世界スカウトジャンボリーで、何かを得るとか、成長するとか、そんな具合の目標を立てて望みました。望まなきゃいけなかったのです。

結果的には、得るものがありました。しかしチャンスを充分に活かせたとはいえません。僕は準備が足りていませんでした。目標は、なんとなく思っていたもので、具体的なものでは無かったのです。明確な目的、準備が無ければ行動することが難しいとわかりました。

英語が話せなくても、自己紹介などで、相手に印象を与えるぐらいできたと今は思います。日々の活動や思い出も、やろうと思えば、記録に残すことができました。自分の期待するものがそこにあれば疲れていても楽しくすごせる、こんなこと以前の自分でも考えられたのに、13 日という日数に不安を持ち、不満さえ覚えていたのです。そのため今回のチャンスを充分に活かそう、という発想が思いつかなかったのです。

ジャンボリーでの生活で得たものはこれだけではありません。もう一つ、それは「考える」ということです。ジャンボリーでは基本的にイベント以外は、ほぼ同じことをして生活していましたから、次に何をするのかだいたい見当がついたのです。ですから一歩先に行動するようになり、たいしたことはべつにしてなかったのですが、生活は少し楽になりました。それから自分は、考えることを目標にして生活し始めました。これは、様々な環境で役に立ちました。ジャンボリーの会場はとてつもなく広かったです。だから移動するたびに道を覚え目的地までの最短なルートを導き出し、移動距離を短くしました。また、気温がとても高かったため、熱中症になる危険がありました。そのため、会場内では自衛隊の給水タンクを飲むようにして、給水タンクが無い外でのイベントの時に、お金を使うようにしていました。

結果的に自分は、具合が悪くなることは無かったのです。だからなんなんだと今では思う時もありますが、気に入らない未来を作り替えるのに必要なスキルなのだと分かったと言えます。

分かったけれどあれからたいして変わったことはない現実です。原因は、自分の甘さにある、とでも言うべきか。最終的には自分次第ということだろうと。ただ一つだけいえることは、自分の中にある可能性を引き出すチャンスが、この経験から生まれた、ということです。

あともう一つ、今回行きたくても行けなかった人もいるのに、自分は、曖昧な気持ちで参加してしまい、本当に成長しようと思っていた人には申し訳なかったと思います。

最後に、今回のジャンボリー参加で、お世話になりました 407 隊の隊長はじめ、リーダーの皆様方に、こころから厚く御礼申し上げます。

23WSJ　きらら浜にて

00407 隊　副長　吉田理佐

1971 年に富士山麓の朝霧高原で行われた第 13 回大会、そのとき小学校高学年だった私は、ガールスカウトの同級生が夏休みに世界ジャンボリーに参加してきて、どんなに楽しかったかを聞かされて、私もガールスカウトに入って、世界ジャンボリーに参加したいと強く思った。それから 44 年、ガールスカウトにはならなかったが、世界ジャンボリーに参加したわけである。

山口市きらら浜、プレ大会の 16NJ と同じ場所、サブキャンプも前回と同様の場所での 23WSJ 開催だったが、新山口駅に降り立ったときからその様相は違っていた。受付を済ませバスから ENA サイトに降り立つと、海が見える。道路が、トイレが、スーパーもできている。道路沿いの既設トイレから入ってすぐの、シャワー、仮設トイレもすぐ前の角の一等地?がテントサイトで、迷子の心配はまずなさそうであった。お隣さんはメキシコ、アメリカ。隣の隣は交歓会を行ったベルギー斜め後ろがインドネシア。Wi-Fi ステーションも目の前で、その周りに自分の国とつながりにスカウトが、指導者が昼も夜もやってくる。すでに前日会場入りの隊の設営が進んでいる。各テントサイトはお国柄が実にでている。ドイツ隊のテントはどこか「すてきな三人ぐみ」風でお昼寝は気持ちよさそうで、イギリス隊は大きなボストンとサブザック、チーフにテントと、折鶴のモチーフで統一され、人気の的でもあった。日本隊は、若草色の小さなテントが、サイトに所狭しと並んでいる。

ここで、約 2 週間のテント生活が待っていた。16NJ とは違う緊張感を感じていた。プログラムが始まってからは、山口県内記録更新の暑さのためにプログラム内容に変更があり、やはり我が隊でも熱中症でダウンするスカウトがでて、連日医療チームのお世話となった。熱中症の対応もお国柄があるようで、医療方針の違いに戸惑った。外国人スタッフには、日本人対応の指示が出されていたそうであるが、経口補水液を渡されただけとか、全身ずぶ濡れのシーツで冷やされたりもした。自衛隊の車両で移送という貴重な体験もした。

ジャンボリーで毎回大変なのが、まず食事であろう。食材の配給は、主食はパン、米、パスタ、朝はシリアルも選べる。パンもハイカロリーの菓子パンでなくなり、サラダも選択ができるが、数に限りの早いもの勝ちで、いつもマヨネーズたっぷりのスパゲッティサラダが残っていた。1 日 2500 キロカロリーの設定で、毎日昼食にはポテトチップスが 1 人に 1 袋ついてくる。それなのに、隊長はどんどん痩せていく。私は新しい制服のズボンが帰りにはけるかと心配した。また、通常のメニューのほかにご当地メニューや和食があって、だしみそはほんとにおいしかったが、外国隊には、よくわからない素材・レシピでもあったようで、配給の時に説明するのだが、お隣さんにこれは何だ、どうするのかと聞かれた。しかし根本的に、スカウト達は、おいしく料理をして食べようという気が感じられない。工夫もない。か、と思うと、フードフェスティバルでの桜餅、イギリス隊との交流の際の限られた食材で作ったお好み焼きは、一生懸命で、職人芸を見ているようでもあり、とてもおいしく食べていただけたと思う。何事も極端であった。

また食べ物はなんとなく、ベジタリアンやハラルだとかの理解はあるものの、同じような食材を同じように調理しているとは限らないわけで、思っている以上に生活習慣、文化の違いは大きかった。つくづくそれを思ったのは、トイレとごみ。これはもう大変。サブキャンプのスタッフにはホント頭が下がる。日本の常識は通じない。そう、食べ物や買い物やトイレまで歩いている時も、日本なんだけれど日本じゃない、そのすべてがカルチャーショックの連続だった。そしてそれはそれで、大人以上にスカウト自身が毎日毎日体験し感じ、それでも様々な違いを、今目の前にあるがまま、向かい合って、受け入れている。なんてことだ。

スカウトの成長が見て取れるのは、長期キャンプならではのことだと思う。トイレを我慢するわけにもいかず、洗濯をしないと着るものがなくなり、食べるものも好き嫌い言っていて食べないわけにもいかなくなる。スカウトの素の部分を出さずにおれない。日々の生活の中で、自分と周りの誰かと、どのくらい理解できるところまでいっただろうか。しかし、普段の原隊の活動では班活動が十分にできていない班員が多いこともあり、訓練キャンプの段階ではどうなることかと頭を抱える状態であった。ストレスをお互い抱えたままであったものが、ジャンボリーの期間中、日を追うごとに、GB が、班が機能してくるのがわかり、それぞれの班に独自の成長が見られ、スカウトと一緒に指導者もたくさんのことを学んでいった。

地区・県が違い普段接していないスカウトたちとの日々は、それぞれの目標・課題を指導者としてバックアップできるように、見守っていたつもりであった。なんであれ成長していくスカウトたちが、私の原動力でもあった。それが私の世界ジャンボリー。40 歳若かったら…スカウトで参加したかったなぁ。また、スカウトに一緒に行こうと言ってしまいそう。

日本派遣団 0408 隊

所属　ENA サブキャンプ

隊長
　郡司美津江　（土浦第 2 団）
副長
　太田　好紀　（笠間第2団）
　大野　政智　（日立第5団）
　金子　俊之　（牛久第2団）

日本オオカミ班

笠倉　京佳　（土浦第2団）
狩谷　璃佳　（牛久第2団）
高橋　慶浩　（牛久第4団）
田村　圭一　（土浦第3団）
入江　海斗　（牛久第4団）
正野　　桜　（牛久第2団）
川並　　樹　（石岡第3団）
鈴木　仁人　（牛久第2団）

セブンキャッツ班

飯泉　親浩　（牛久第2団）
正野　　紫　（牛久第2団）
藤枝　弘樹　（利根第1団）
関　　梢子　（土浦第3団）
小針　　優　（利根第1団）
高橋　　瞭　（牛久第2団）
倉金　秀明　（牛久第1団）

梟　班

堀田日菜子　（守谷第1団）
坪野　実卯　（牛久第2団）
穴田　悠太　（守谷第1団）
栗本　　迅　（牛久第1団）
福島　向陽　（守谷第1団）
飯塚　　豪　（石岡第3団）
平方　　曜　（阿見第1団）
下條　椿絵　（稲敷第1団）

鶴　班

八木隆太郎　（神栖第1団）
東條　優映　（牛久第1団）
寺門　宏規　（土浦第3団）
丹波由記子　（阿見第1団）
嶋本　翔治　（神栖第1団）
西　　琉太　（守谷第1団）
斉藤　圭祐　（牛久第4団）
長谷川　聖　（牛久第2団）

408 隊　（茨城第 3 隊）
隊長　　郡司美津江

　私達 0408 隊はスカウト 31 名指導者 4 名合計 35 名でした。その中で10名が中学2年生で6名がジャンボリー初参加でした。全体的に少し幼さが残る印象があり当初は不安がありました。しかし元気いっぱいで明るく前向きなスカウト達の姿が徐々に不安を消してくれました。

　3回あった1泊2日の事前訓練では全員が揃うことがありませんでしたが2日間の訓練の中で少しでも来られる時間帯があれば参加する努力をしてくれたスカウト達の姿に誠実さを感じ取ることができました。また送迎等の保護者の皆様の協力、原隊の指導者の皆様の多大なる支援を得ることができた事に感謝いたします。

　現地では最初は回りに圧倒され消極的なスカウト達でしたがグッズなどの交換交流をするにつれて自発的に話しかけたり、自分たちで交流会の交渉をしたりと積極的に活動していました。また、よさこいコンテスト、サッカーワールドカップに参加し皆の絆も深まっていきました。

　スカウト達には広島プロジェクトが衝撃的だったようで平和に暮らせる事に感謝したいと言う感想が多かったです。

　不安だった英会話も克服し猛暑の中で、やり切ったという自信が帰りのスカウト達の顔にでていました。この経験を今後の活動に活かし感動を後輩スカウトに伝えていってほしいと思います。

　最後になりましたが、不慣れな私を支えて下さった副長をはじめ関係者の皆様に感謝いたします。そして、何より沢山の感動をくれて、私を隊長として迎えてくれたスカウトのみんな、ありがとう。また準備から開催期間中まで私達を支援してくださった現地スタッフの皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

世界ジャンボリーに参加して

セブンキャッツ班　正野 紫

私は、今同の恒界ジャンボリーに次長として参加しました。前回の日本ジヤンボリーに参加した時は班長として参加しましたが、私にはうまく務めることができず班が割れてしまう事態が起きてしまって正直帰りたいと思えてしまうほどでした。しかし今回は、「帰りたくない」そう思えました。なぜそう思ったかということをこれからお話ししたいと思います。

今回の世界ジャンボリーに参加するにあたって目標を立てていました。その目標は、たくさんの友達を作ることでした。世界ジャンボリーは日本ジャンボリーよりもたくさんの国からスカウトが参加していて外国の友達をたくさん作ることができました。いまでもジャンボリーで出会った友達と手紙やインターネットなどでやりとりをしています。そんな私ですが、最初は英語も得意ではない私が話しかけて伝わるのだろうかという不安で外国のスカウトに話しかけることはできませんでした。でも、同じ隊の子が励ましてくれたおかげでスムーズに話すことはできなかったけれど自らはなしかけてジェスチャーを交えて会話が成立するくらいまでできるようになりました。いまでは、本当にその子に感謝です。

次に、外国のスカウトに対して日本を学ぶプログラムに私たちも参加したとき案外知ってそうで日本のスカウトのほうが何にも知らなかったことがわかりました。あらためて学んだことや感じたこと知っていたこと実はちがかったことなどたくさんの知識を学ぶことができました。一番心に残ったのは広島に落とされた原爆についてです。授業では８月６日におとされたことその被害について少しだけ知ってはいました。しかし、広島平和記念資料館へ見学に行って資料や当時の状況そっくりに作った模型などをみてとても心が痛みました。自分が思っていたものよりもおもくつらく耐えがたいものでした。世界でも原爆を落とされたのは日本だけですが 13 本だけでよかったと思うとともにもうどこにも落としてほしくないと思いました。

私はこの 23 回世界ジャンボリーに参加してたくさんの仲間との絆を深め、13 日間共に過ごせたこの夏の思い出を忘れないと思います。また、私たちスカウトが思いっきりこの大会を楽しめたのは大会を裏で支えてくれた IST と実行委員会の方々のおかげだと思います。スカウトとして世界ジャンボリーに行くことはできないですが、今度は私が裏で支える IST の一員として世界ジャンボリーに参加してみたいです。こんなに楽しいジャンボリーを体験できて本当に良かったです。参加させてくれた親に本当に感謝しています。本当にありがとうございました。

23WSJ に参加して

鶴班　斉藤 圭祐

僕は第 23 回世界ジャンボリーに参加しました。

世界中からボーイ、ベンチャースカウトが集まったので、とても規模の大きいものとなり、そして文化の相違を知りました。

自国の料理を紹介するフードフェスティバルというイベントがありました。緑や赤のポテトサラダやアリ?の丸焼きなど、驚く様な食べ物が多く、とても楽しめて、そしてかなり疲れたイベントでした。中でも印象深いものは、黒色のグミです。どこの国だったかは忘れましたが、そこのサイトの入り口で配られていたものを食べました。想像以上の味にびっくり。そこからテンションがガクッと下がりました。とても強烈に口の中をきついミントらしき味が口の中に充満し、口の中にへばり付いてしまって、もう一度食べたいという気持ちは起きませんでした。そのグミで驚いた事は、その現地の人たちがみんな美味しそうに食べていたことです。やせ我慢している様子でもなく、ごく普通に口に入れていました。さらには少数ですが、日本人の中でも普通のグミとして食べられた人がいたことにも驚きました。日本人が納豆や生卵や海苔を食べるのと同じく、国によって食べ物の嗜好の違いは著しいものだと実感しました。

ジャンボリーの期間中、サッカーワールドカップが開催されました。我らが茨城 0408 隊はアメリカの派遣隊と試合をしました，僕は選手ではなく、応援をしました。かなり熱い気候で観戦している方が倒れそうになりながら、茨城 0408 隊の出番を待ち、試合が来た時には応援する気力がすっかり消えてしまいそうでした。試合が始まってもなかなか点数が入らず、途中でボールを蹴ったら靴が吹っ飛んだりするハプニングが起こったりしながらも 0 対 0 で前半戦が続いていた時、アメリカ隊のオウンゴールで点数が決まりました。それから後半戦になっても両チーム点数が決まらずそのまま試合終了、アメリカに勝利しました。とても白熱した試合になりました。

その他には簡易トイレに自転車が突っ込んであったこと、とても盛り上がったアリーナショー、群馬隊との交流会や 5 時間以上並んだ大混雑のスカウトショップなど、思い出を挙げると切りがありません。本当に素晴らしく、貴重な体験となりました。

今回、世界ジャンボリーに参加したことで、現段階では自分の成長を実感できていませんが、学べたことや身についたことは多かったと実感しています。

今後の目標は、来年の県キャンポリーまでに菊章を取得し、3 年後に開催予定の日本ジャンボリーに参加したいと考えています。

世界ジャンボリーに参加できたことはとても幸運で、恵まれていたと思います。世界ジャンボリーを支えてくださった牛久 4 団の方々、県連や派遣隊のリーダー、そして家族に感謝したいです。

充実した世界ジャンボリー

日本オオカミ班　田村 圭一

今回、僕は山口県きらら浜で開催された「第 23 回世界スカウトジャンボリー」に参加し、沢山の経験をしました。

大会自体は９日間でしたが、準備・撤営をするための期間も含め、12 泊 13 日の長期キャンプとなりました。

７月 28 日、東京駅に集合してから新幹線に乗り、およそ５時間位かけて新山口駅に行き、駅から会場までバスで移動しました。会場に着くと、既にたくさんの隊が会場入りしており、これから始まる長いキャンプにとてもワクワクしました。そして大会が始まり、２年前の日本ジャンボリーの時よりも沢山のプログラムが用意されていました。「peace」「GDV」「Community」「Food festibal」「Arena show」「science」「Nature」「Water」「Culture」などのプログラムがありました。開会式の時、会場はとても盛り上がりました。開会式の前には、会場上空にブルーインパルスが飛び、色々な技が披露されました。

「Peace」の活動では、僕は、初めて広島を訪れました。原爆ドームや資料博物館を見学して、核の恐ろしさや平和な日常が一瞬にして奪われてしまうのだということを知りました。

「GDV」の活動では、事故が起きてしまった時に出ているスピードとその衝撃の大きさや飲酒運転をしている人にはどう見えているのかなどの体験をしました。

体験では、目の前がぼやけて歩きにくかったです。そして飲酒運転の怖さを知りました。

「Community」の活動では、美祢市を訪れました。最初に美祢市の体育館に行き、歓迎セレモニーを受けました。その後、小学校に行き、絵はがきを作りました。そして、秋芳洞という洞窟を見学しました。自然のすごさが分かりました。

「Food festibal」では、多くの国のサイトを回り、色々な食べ物を食べました。一番おいしいと思ったのは、「イタリアのスパゲティ」でした。とてもいい経験ができてよかったです。おなかもいっぱいになりました。

「Science」の活動では、コップに自分の名前を入れる作業をしました。あと、分光学を学びました。こちらは、少し難しかったです。

「Nature」の活動では、バスで施設まで移動して、ロッククライミングを体験しました。初めて体験したので面白かったです。

「Water」の活動では、バレーボールやビーチフラッグ、水かけバトルなどをして、最後に海で泳

ぎました。楽しかったです。

「Culture] の活動では、蒟蒻を作ったり、バルーンアートを作ったりしました。作ったことがなかったのでいい経験になりました。

今回の世界ジャンボリーでは、温水シャワーや冷水シャワーなどが用意されていて毎日シャワーが出来てよかったです。スーパーには、必要なものが揃っていたのでとても便利でした。

片言の英語でも海外のスカウトに通じたので、僕にとって大きな自信になりました。楽しかったです。

最後に、今回の世界スカウトジャンボリーで得た、沢山の貴重な体験、経験を今後のスカウト活動に生かしていきたいと思います。想い出多い中三の夏となりました。

貴重な体験をすることができたジャンボリー

鶴班　長谷川 聖

僕は、7 月 28 日から 8 月 9 日まで、僕にとって 2 回目のジャンボリーである第 23 回世界スカウトジャンボリーに行きました。

会場が第 16 回の日本ジャンボリーと同じ山口県のきらら浜だったのであまり抵抗はありませんでした。でもいくつか違うことがありました。その中でも一番大きかったのは、参加している外国のスカウトの人数が 16 回とときと比べ物にならないほど多かったことです。なのだ、僕の隊のサイトの近くにいた隊は外国の隊のサイトばかりで、日本の隊のサイトはあまりありませんでした。また、会場が整備されて道ができていたり、芝生が生えていたりしていたことに驚きました。

僕が体験したウォーターやサイエンス、ピースプログラム等の多くのアクティビティの中で一番心に残っている野は、ネイチャーです。僕の隊はウォールクライミングでした。A コースかせ D コースまであり、僕は最初に D コース、次に B コースをしました。B コースはきつかったためクリアできませんでした。ウォールクライミングの楽しさが分かりました。あと、ほとんど関係ありませんが、休憩中にトカゲを見つけ、捕まえて眺めていたら尻尾を切られて逃げられてしまいました。そのとく、トカゲも必死なのだなと思いました。

もたろん、外国隊との交流もいい経験になりました。8 月 1 日のフードフェスティバルが僕としては、とても良かったと思っています。僕の隊では稲荷蕎麦と稲荷そうめんを出しました。外国のスカウトたちがとても美味しそうに食べてくれていたので、うれしかったです。数ヵ国の料理を食べました。クレープなどのこれは美味しいという食べ物からスリを使ったこれはちょっとという食べ物もありましたが、すべての料理にその国の特徴が出ているなと感じました。

ジャンボリーに参加した人にしか経験できないようなことがたくさんあります。さらにこれらの経験は将来に役に立ちます。だから、これから先にある様々なジャンボリーを無駄にしないようにしていきたいです。

23WSJ に参加して

セブンキャッツ班　小針 優

私は、第 23 回世界ジャンボリーほ通して、普段味わうことのできない素晴らしい体験をし、多くのことを学び、そして何より、精一杯楽しむことができました。

まず、やはり、海外の方々との交流です。2 年前に行った日本ジャンボリーとは比べものにならないくらいの規模で、当然、様々な国の方達が大勢いました。周りを見まわしてみても、

外国人ばかりで、まるで海外に来ていたようでした。そんな海外の方々とは、文化交流をはじめ、フードフェスティバル、各プロジェクトなど多くのイベントを通じて交流することができました。中でも、バングラデシュとの文化交流と、ビーチプログラムからの帰りのバスの何で話したカンボジアの方々が印象に残っています。まだまだ話し切れない程、多くの方々と交流することができました。

次に、各プログラムやイベントです。これらも日本ジャンボリーとは規模が違い、驚くものばかりでした。自分の中では特に、水をかけあったり、びーちばれーをしたウォータープログラムと初のロッククライミング体験をすることのできたネイチャープログラムが忘れられません。他にも、GDV や広島ピースプログラム、サイエンスなど、様々なものがありました。また、日本ジャンボリーではなかったイベントがありました。サッカー大会では、男子勢が頑張り、敵にオウンゴールながらも勝利することができました。夜のイベントでは、皆で練習したソーラン節も踊りました。その中でも多くの外国人との交流ができたと思っています。

そして、1 つの話題として話しておきたいのが、我々自身のことです。正直、自分は、周りを上手くまとめることができず時間にもルーズだったため、あまり良くはなかったのですが、この世界ジャンボリーを通して、参加スカウト全員が成長することができたと思っています。12 日間のキャンプ生活の中で 1 人 1 人がボーイスカウトとして、しっかりとした講堂をするように意識し、そしてそれは、普段からも生かされていると思います。

最後に、世界ジャンボリー全体を通して。
正直なところ、自分にもっと英語力があれば、コミュニケーション能力が高ければ、さらに楽しめたのだろうと思います。しかし、開会式から始まりアリーナショー、そして閉会式、そこまでの全てが、世界ジャンボリーというもの自体が自分たちを、全力で楽しませてくれました。そして！その世界ジャンボリーは、自分が想像しているよりも多くの方々のおかげでなりたっていることへの感謝を決して忘れません。

私は最初で最後であろう、この『再考の世界ジャンボリー』に出会えたことへ感謝します。この素晴らしい体験を決して忘れません。今回培った、経験を胸に・・・・

最高のジャンボリー

梟班　福島 向陽

ぼくは、この夏に、山口県きらら浜ですばらしい体験をしてきました。

ぼくは、前回の日本ジャンボリーに行ってとても良い思い出をつくることができ、そして 2 年後に開かれた第 23 回世界スカウトジャンボリーに出場したいと思い、行くことを決めました、そして、結団式のとき知らないメンバーがよとんどで、自分はやっていけるのかと不安になりました。しかし、3 回の訓練キャンプを終え、メンバーと普通に接し合うことができ、不安が残ることなく訓練を終えることができました。

そして出発の日両親には笑顔で「行ってきます」と言い家を旅立ちました。守谷駅で、守谷 1 団のメンバー 4 人で東京駅へ向かいました。東京駅に着いたときには、茨城派遣隊以外にも他県からの派遣隊がたくさんいました。そして、みんな笑顔で山口へと向かいました。

新山口駅に着くと、ものすごい数の海外スカウトがいて、とてもおどろきました。その時ぼくは、すごい大会なんだなと感動しました。そしていよいよきらら浜にバスで到着しました。会場を 2 年ぶりに見て、なつかしかったです。自分たちのテントサイトは、ENA の 30 でした。備品なども前回と違って、全て支給されるかたちでした。1 日目の夕食は、米が失敗してしまいました。残念です。

2 日目に入り、いよいよこの日は開会式です。全スカウトがその場に集まり、開会式が始まるとすごい盛り上がりいよいよスタートという感じでした。3 日目からプログラムが始まり、初日は朝早くから起き、広島までバスで向かって、原爆ドームへ行きました。そこに行くのは 2 回目で、改めて原爆の怖さを知った広島ピースプログラムでした。なによりもが以外のスカウトにその事をしってもらえてよかったです。

その後のプログラムでは、GDV や、サイエンスやウォータープログラム、ネイチャーなどがあり、そのなかでも印象に残ったのでウォータープログラムで、つな引きとサッカーと砂浜バイクを行い、つな引きは、海外スカウトに負けましたが、サッカー

で勝ててとても嬉しかったです。真夏の中、とても涼しくて最高でした。海外スカウトとの交流では、メキシコとイギリスとバングラディッシュの３ヶ国と交流し、互いの国の文化を教え合い友だちも作りました。

ジャンボリーの一番盛り上がるアリーナショーでは、いろいろなスペシャルゲストが来て、最大に盛り上がり、テンションNAXでした。ジャンボリー後半では、バッチなどの交換もでき、毎日シャワーに入れました。山口ジャンボリーフェスタでは、代表の人達がソーラン節をおどってくれました。そして、とうとう閉会式。もう終わってしまうのかという気持ちであったが、最後にみんなと盛り上がれて、この夏最高の思い出になりました。

ジャンボリー体験記

日本オオカミ班　川並 樹

僕のジャンボリーは、気持ち的には４月12日の結隊式に出席してスタートしたと言える。それから事前訓練に参加するたびにどんどん気持ちが盛り上がっていった。

僕と飯塚君はジャンボリー参加申込が遅れてしまったが、八城県連盟副理事長と工藤４地区コミッショナーが面接で温かく迎えてくださり、ほっとしたと同時にとてもありがたかった。けれど参加資格の１級章に今までの活動内容がとどいていなくて少しあせった。そのため前島隊長や池田副長がいつもの隊集会のほかに補講を重ねてくださり、事前訓練前にはたくさんのアドバイスをしていただいた。お母さん達も一緒に23字過ぎまでつきあってもらったこともあった。

このようにジャンボリー本番前までですら何人もの人にお世話になったことへの感謝を忘れないようにしたい。

そしてジャンボリー当日。電車の遅れやラッシュアワーで東京駅にたどり着くのは、思ったより大変だった。気持ちの面でも「そなえよつねに」は大切だ。

きらら浜の会場では、世界各国から参加したスカウトの人数や会場のスケールの大きさに圧倒された。

僕が印象に残っている活動のひとつは毎日の夕食作りだ。みんなが思いやりや気くばりをしていていっきにきずなが深まった来だした。ふたつめはワールドフードフェスティバルだ。僕たちの作ったそばいなりは公表だった。和食のよさを認めてもらえたようだ。いろいろな国の食文化を体験してみていろいろな味を知ることができた。みっつめは広島平和プログラムの参加だ。原爆ドームを見学とゲバ区の恐ろしさを外国のスカウトにも知ってもらえたのはとても有意義だったと思う。

見るもの聞くものがはじめてのことばかりで時間があっという間に過ぎた。

こんなに楽しく安全に過ごせたのも郡司隊長や太田副長、大野副長、金子副長が的確な指示を出してくださったおかげだと思っている。お世話になりありがとうございました。そして、ジャンボリーの高額な費用やザックなど必要なものをそろえるために親にはたくさんの出費をしてもらったので感謝している。

第23回世界スカウトジャンボリーに参加して

鶴班　丹波 由記子

私は今年の夏、第23回世界スカウトジャンボリーに参加して、さまざまな物事を見て体験し、いろいろなことを考え、学びました。

大会中の日付を辿って見ていくと、まず最初は７月30日。この日は朝から広島へ行って夕方までというピースプログラムの日でした。私はこの日、広島平和記念館での原爆の被害を受けた人々の遺品や病気について、原爆のしくみについて見聞きして、私が想像していたよりもずっと原爆は悲惨なもので、このようなものはもう二度と使ってはいけないと思いました。

そして２日目。この日はGDV、日本語で言うと地球開発村にいきました。私の班ハイキング赤十字社の出していたブースで救急手当の方法を習い、また外国の太陽光についてのブースでゲームをしながら太陽光らはさまざまな活用の方法があることを学びました。

３日目、８月１日。この日はコミュニティで、県内の公園に行きました。ここでは動物を見て、よさこいを見学しました。よさこいには様々なものがあるのだと知りました。

そして４日目、８月２日。この日はフードフェスタとアリーナショー、宗教儀礼があり、私の中では一番盛り上がった日でした。この日は外国の人は日本の有名人も知っているということ、また外国の人は習字をかいたものが好きということを知りました。

８月３日。この日は主に交換品の交換をしました。外国の人はなかなか交換をしてくれないことを学びました。

８月４日、６日目はネイチャーでクライミング・ボルダリングをしました。ずっとクライミングをやりたかったので楽しかったです。

７日目、８月５日。この日はウォーターと、メキシコとの交流をした日で、やはり外国と日本では料理や歌が異なると思いました。

８月６日、８日目。カルチャーへ行きました。そこでは、世界の庭園を見て、木の靴をはき、ムチのショーも見ました。このような体験は、これからはできないかもしれないので、とても良かったと思います。

そして、最終日。この日は閉会式で、様々なアーティストが来ました。外国の人はテンションが高いと思いました。それとは対照的に、この日行ったワイドゲームでは人見知りな外国の人たちに会って、外国には人見知りな人はいないと勝手に思っていたので驚きました。

私は今年の世界ジャンボリーに参加して、とてもたくさんのことを知り、学ぶことができたと同時に、日本良さや特徴を再認識することができたと思います。一生の中でもとても大切なものとなったあろうこれらのことをこれからの生活に生かしていきたいです。

僕の初めてのジャンボリー

セブンキャッツ班　倉金 秀明

僕は、16NJに参加することができませんでした。その分も楽しんでこんごのためにしようとして23WSJに参加しました。

初めてのジャンボリーで楽しかったこと、おどろいたことが４つあります。

１つ目は８月２日にあったアリーナショーです、安倍総理のお話があったり皇太子様のお話があったことや「DANCE EARTH PARTY」のコンサートやしょこたんがアニソンをうたったりしました。とても楽しかったです。また、その後には先輩達が「残酷な天使のテーゼ」や「翼をください」を歌いながらテントサイトに帰りました。

２つ目は８月４日にあったネイチャーモジュールではボルダリングをやりました。初めにまぼったときは中腹で止まってしまいましたが、２回目にのぼったときは山頂までのぼれました。その後小さい方に移ってからインストラクターさんの指導のもと挑戦しました。最後にはレースもありました。とても楽しかったです。

３つ目は、８月６日に参加したダンスコンテストです。他の隊と一緒に40人で「SIFT」として踊りました。グループ名の由来は静岡のS、茨城のI、福島のF、富山のTです、結果は４位でした。

４つ目は、７月31日のワールドカップです。みんなはTシャツにいろいろな文字を書いていました。そして僕は「犠牲」でした。アメリカとの試合でした。あぶない所もありましたが、１対０で勝てました。とてもうれしかったです。一番印象に残ったことは広島ピースプログラムです。朝５時30分に起きて６時40分にバスで会場をあとにしました。１時間ぐらいで広島につきました。そこから広島平和記念資料館に行きました。そこで核

兵器がどれほど恐ろしいものなのか、1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分に何が起こったのかを学びました。原爆の子の像の所へ行って昼食を食べました。19 時 40 分の帰りのバスに乗って会場に帰ってきました。ピースプログラムではいろいろなことを学びました。このことを世界に伝えて行きたいです。

最後に僕は 2019 年に開催される 24WSJ にも参加したいです。

世界ジャンボリーに参加して

梟班　坪野 実卯

私は、今年の夏に世界ジャンボリーに参加しました。開催地である山口県きらら浜では 2 年前にも日本ジャンボリーが開催されたときにも行ったので。人生 2 回目となりました。日本ジャンボリーに行くときは、ジャンボリーというものに魅力が感じられず、よく分からないけれどとりあえず行くか、という感じで参加しました。けれども行ってみると、本当に楽しくて普段ではできない経験をたくさんしたので、今回参加しようと思いました。世界ジャンボリーに参加する前の 6 月 7 月は高校生活に慣れず悩んでいることも多かったのですが、ジャンボリーに行っているときに本当に今までの悩みを全て忘れてしまうほどジャンボリーは楽しく、一生忘れない思い出になりました。

今回のジャンボリーでココロに残っていることをいくつか紹介したいと思います。まず、現地に着いて思ったのは、本当にこんなにいろいろな国から集まっているんだ、とごく普通のことを思いました。けれども本当に、肌の色、言語、地域、どれをとっても地球上のすべての人種を集結させた光景ががあり、どんな国のトップの人だってこれ程までに世界中の人たちと一気に関わることなんて出来ない、ものすごいチャンスだと思いました。期間抽は、本当にたくさんの国の人とコミュニケーションを取りました。中でも印象的なのは、バングラデシュに人と交流したことです。バングラデシュの人たちは、みんな明るく元気で、積極的に私たちに話しかけてきました。英語の知識に乏しい私たちのたどたどしい英語を楽しそうに聴いてコミュニケーションをとってくれたり、向こうの伝統ダンスを一緒に踊ったりと、とても温かい人ばかりで忘れられない思い出となりました。また、最後の方の日に、班員とゴミ拾いに出かけたことがありました。そのときにすれ違ったラテン系の女のみが、私の肩をたたいてから、うーんと考えてダイスキと行ってくれました。本当にうれしかったです。ゴミ拾いをして良かったなと思いました。こうした何気ない会話が私にはかけがえのない思い出となりました。

私は、思い出というものは、自分 1 人だけが楽しかった、と思ってもそれはそれで思い出ではありますが、自分も楽しくて更に周りにいた人も楽しかった、行って良かった、と言っているものこそが本当の意味での思い出だと考え手います。今回の世界ジャンボリーは自分自身も楽しかったな、初日に戻りたい、などと言っているとき、周りも帰りたくない、ここに住めるし、などと言っていたので、自分以外の他の人の大切な思い出の一部に自分がいて、自分の大切な思い出の中に周りの人たちがいると思うと、この世界ジャンボリーはみんなにとってかけがえのない思い出になったと思います。本当にありがとう。

世界ジャンボリーで

日本オオカミ班　高橋 慶浩

世界ジャンボリーを終えて、僕は 1 つ学んだことがあります。

それは結束する力です。それを一番かんじたのはジャンボリー会場で開かれたよさこいの大会でした。元々外国隊と交流用に練習してきたからです。そしてうちの隊の代表と、他県の代表で作った、それぞれの県名を頭文字として組み合わせてチーム「SIFT」として出場しました。また、他隊との話し合いの結果、練習していたものと違う踊りをすることになってしまい、プログラムの合間を縫って特訓してなんとか 3 日で覚えることができました。そしてこの大会がなければ知り合うはずのない人達が 1 つの目標に向かって戦っているのを見て、結束の力を感じました。

小さな世界

セブンキャッツ班　高橋 瞭

自分がジャンボリーについて最初に感じたことは本当に様々な人たちが、集まっているなということだった。自分がジャンボリーへ行って感じたことは、外国の人とコミュニケーションとるときにもちろん英語などの言語は必要だがそれよりも相手に伝えようとする気持ちこそが大切なのではないかと思った、それは外国の人と話して感じたことだが自分と話をしているときだけ、聞き取りやすいようにゆっくりと話をしてくれるのだそれによって自分は何度も救われたと思っている。また、ある日には、お互いの英語が通じなかったときには、ジェスチャーを使いコミュニケーションをするなど、誰に対しても非常に優しかったと感じた。

ジャンボリーの感想では、今回がの人の気づかいがすごいと思った。ある日バケツ運びでその場に座ってしまったときにどこからか外国の人がやってきてバケツを運んでくれたのだ。そしてその後お礼をするとお世話になっております顔で去って行ったのだ。これがボーイスカウトとして本来あるべき姿なのかもしれないと思ったと友にこのような姿を自分たちも見習っておかないと行けないと感じた。

そしてジャンボリーで最も楽しかったことが交流である。自分たちが交流したバングラデシュの隊が印象的だった。その隊の印象は日本のことをよく知ってくれていることだった。会話をするときも向こうの人たちが日本語で話してくれていることに驚いたり、日本の好きなことなど日本のことをくわしく知ってくれていてお退きの連続であった。

そしてこのような優しい外国の人や現地の人達のおかげでジャンボリーはせいこうしたのではないかと感じた。地域の人たちとの交流や外国の人達との交流があったからこそ自分たちは、十分に楽しめたと思う。

最後に自分は、まだやりたりなかったと感じたのでもう一度行けるのであれば行きたいと思う。

2 回目のジャンボリー

鶴班　東條 優映

これで私のジャンボリー参加は 2 回目になっりました。でいず初めてのジャンボリー参加かと思わせるくらい、前回のジャンボリーとは違いました。周囲には海外スカウトがほとんどで言っているとは全く分からないしハンドブックやプログラムについて書かれている紙、注意書きなどすべて英語で本当にここは日本なのかと思うことも多かったです。

私は相変わらずの次長でしたがとても楽しい 2 週間を過ごすことができました。

今回はスポンサーがイオンだったり maiji だったりしたのでごはんも良いものが出ると期待してしていましたが、サラダは業務用でアメリカンサイズ、ヒルはポテトチップスとやっぱりジャンボリーはジャンボリーでした。まぁ、日本ジャンボリー昼食のぬるいフルーツゼリーや直射日光によりあたたかくなった果汁 100% ジュースよりかははるかに良かったです。何より大好物のカルパスが出て幸せでした。

また、今回はは 1 日も雨が降りませんでした。

この最強中島清行雨女（自分）が参加したのに全く降りませんでした。コドン的には 1 日くらい降っても良かったなと思いましたが、配られたジャンボリーオリジナルテントの丈夫さを考えたら降らないで良かったと思います。

そのおかげで猛暑日が続き、私もこまめに水分をとっていなかったからか考えのく熱中症になりました。2 日目あたりで。

まぁ、日本ジャンボリーのときは参加できなかっ

た閉会式に参加できて、マーティーも見られたので良かったです。

一番の思い出は鳴子でした。すごく久々に踊りました。しかもステージの真ん中に立たせてもらえてすごくうれしかったです。1 位にはなれなかったけれど楽しかったので良いんです !!

日に日に濃くなる思い出と班員の肌が愛おしく感じました。

楽しい思い出をありがとうジャンボリー !!

ツル班のみんなまたどこかで会おう !!

WSJ に参加して

梟班　飯塚 豪

僕は小一からビーバースカウトに入っています。現在 8 年目になります。スカウトになったからには世界大会に出たいというのが夢でした。その大会が 44 年ぶりに開催されることが決定しました。参加するにあたって多くの課題があり、リーダーをはじめたくさんの先輩のご指導・事前訓練を受けて参加できるようになりました。大会の前にはスコットランドのスカウトがホームステイし、あい染め、習字、お茶、かき氷、すしパーティー等交流を深め友だちになりました。

7 月 28 日に、茨城を出発しいざ山口のきらら浜へ !!　そこなは世界 150 ヶ国 34,000 人余りのスカウトが集まりました。そのスケールに驚きました。気温 35℃、湿度 90% の中でエアコンもなく、扇風機もなく野外で 12 泊 13 日のキャンプ生活をするということはとても過酷でした。しかし僕達は仲間と共にはげまし合い乗り越えました。周りから聞こえてくる歌や声は英語、仏語、独語等さまざまで、まるで外国にいるようでしたが、その歌声を聞いていると心が和みました。

毎朝 4 時起床、朝食の準備をし、その後、カルチャー、サイエンス、ウォーター、GDV などその日ごとのプログラムをこなし夜には世界各国のボーイスカウトと交流を深めました。

6 日目のアリーナショーでは中川翔子さんの歌、宇宙飛行士・野口さんの体験談、安倍総理大臣のスピーチ、皇太子様からのお言葉をいただきました。中でも皇太子様からの「この場所にいられることに感謝しなさい」という言葉が心に響きました。毎日配られる深部も日程表も全て英語だったので、僕はあまり理解出来ず先輩方に助けてもらうばかりでした。もっと英語ができていれば友だちも作れたと思うので英語を頑張りたいと思いました。

WSJ にいって感じたことは、暑ければエアコンをつけ、お腹がすけばご飯場出てくるあたり前の生活がこれほど幸せなことだし思いませんでした。両親に感謝したいです。

たくさんの外国のスカウトと交流を持ち、いろいろな国の価値観や、生活習慣を知り、日本人としてのアイデンティティを強く感じたことと日本人として日本がすばらしい国なんだと改めて感じました。

ありがとうございました。　　弥栄

23WSJ について

鶴班　八木 隆太郎

自分は、中学 3 年生の時に 16NJ に参加し、その時の体験も大変貴重なものだったが、それ以上に今回の 23WSJ は個人的に貴重な体験ができたと思う。

数ある体験の中でその中でも特に強く印象に残ったことをいくつかあげていく。

自分は前回と違い、班長という重役を背負った。もちろん、BS 時代に原隊の班長をやっていた時期もあったが、求められる能力や責任、それに伴う重圧が段違いであった。

今振り返ってみてお世辞にも良い班長だったとは言えない。むしろ駄目な部分の方が多く思い出せるし、もう一度班長としてジャンボリーをやりたいかと言われたら、NO と答えるだろう。けれど、班長という体験が WSJ を通して一番、反省点が多く、自分の糧となったと思う。

また、今回一番困惑したものが、言語である。NJ と違い、WSJ は参加者が世界各国から集っているので、会話やプログラムの説明なども英語だった。説明の方は聞くだけなので大体どうにかなったが、他国のスカウトとの英会話はあまり出来たとはいえない。が、向こうの方も、ボディランゲージを多用してくれたり、英語をあまり使わなくても成せばたいていなんとかなることも多かった。このことは、言語は会話の主要な手段というだけで、すべてではないという事を、教えてくれた。これから会話には完ぺきな受け答えをしなければならないという心持ちでなく、要点と、それを伝えようとする努力さえ伝わればいいくらいの軽めの気持ちでしてみたい。

プログラムの中で、前回行っていなかった広島の原爆資料館に行った。そこでは広島に落とされた原爆の被爆地の写真や当時のままの物品などを見学し、少なからずショックを受けた。NJ の時には全スカウトが対象のプログラムではなかったが、WSJ では Hirosima peace program として全スカウトが対象となっていて、日本人としては常識だけども、外ではそうじゃなく、「あったことは知っているけど、具体的にはよくわからない。」という人も多いらしく、そういった人たちもすでに知っている自分たちも改めて原爆の悲惨さと平和の尊さを知ることは大切なことだと思う。

その他のプログラムやイベント、ワールドスカウトセンター等で様々な伝統芸能や料理といった文化を紹介していて、料理では自分たちは稲荷蕎麦を出して他の日本隊も手軽なのか麺類を出す隊はおおかった。外国隊は自国のファストフードかゲテモノを出す隊が多く中でもコロンビアの蟻やグミが強烈にまずかった。

自分は最初、16NJ の延長位の気持ちで参加を志願し近づくにつれて言語や班長など不安になる要素が多くて始まってからもあまり余裕がなかったが最終的には「終わってほしくない。」という気持ちが占めていた。多分こんな経験はもうないと思う。なので、この経験は、一生の福と思い出にしたいと思う。

第 23 回世界スカウトジャンボリーを終えて

鶴班　西 琉太

大 23 回世界スカウトジャンボリーは、ぼくにとってとても有意義なものとなりました。様々な場内プログラムに参加したり、バスに乗って場外プログラムに言ったり、世界中のスカウトと交流したりなど、数え切れないほど思い出があります。その中でも特に印象深かった思い出を挙げて行きたいと思います。

1 つ目は開会式です。とても広いアリーナに、とても多いスカウトが集まっていました。更に、有名なアーティストも多くきて、とても盛り上がりました。

2 つ目は、サッカーのワールドカップです。これはサイトで行われたサッカー大会で、僕たちはアメリカのチームとしあいをしました。10 分位の短い試合でしたが、勝つことが出来ました。それは本当にうれしかったです。

3 つ目は、場外プログラムです。場外プログラムでは、広島や山口市内に行きました。広島では、平和記念公園に行き、戦争の悲惨さを学びました。お世話になっております間口市内では、猿ばかりの動物園に行ったり、よさこいを踊ったりしました。また、クライミングやボルダリングもしました。クライミングやボルダリングもとても大変だったけれども、とても楽しかったです。

4 つめは、バングラデシュのスカウトとの交流です。バングラデシュのスカウトは、にほんごを少し話せるスカウトもいて、コミュニケーションが取りやすく、とてもノリがよかったのでとても交流がおもしろかったです。また、バングラデシュのことばを教えてもらったり、日本語を教えたりすることができ、とても良い経験になりました。

そして、何よりも心に残っている思い出は、隊、そして班ですごした何気ない時間です。役 2 週間もの会田、毎日過ごしてきた仲間達との思い出は、

一生忘れることはないと思います。

僕はこの第 23 回世界スカウトジャンボリーで学んだことを、これからのスカウト活動や日々生活に役立てて行きたいです。

感謝

日本オオカミ班　正野 桜

私は第 23 回世界スカウトジャンボリーで学んだこと，経験したことが数え切れないほどたくさんあります。その中で印象に残ったことを 2 つ話していきたいと思います。

1 つ目は、やはり外国人と話したことです。私は日本ジャンボリーにも参加していたのですがその時とは人数が桁違いに多かったです。まわりを見れば外国人ばかり、日本人を見つけるのが大変なくらいでした。外国の人は、とってもきれいでした。23 ラ解スカウトジャンボリーで初めて外国人と 1 対 1 で話したときのことは今でも覚えています。きれいな茶髪のお姉さんでした。彼女は

「シャワーはどこにありますか?」

と聞いてきました。外国人のお姉さんに話しかけられてビックリしたけれど

「向こうにある白手員トレーナーがシャワーだよ」

と言いました。たぶん文脈はグチャグチャなんだろうけれど彼女は理解してくれたみたいで

「ありがとう」

と言ってシャワーの方に行きました。中学校で習った英語だけでも意外と伝わるし、この言葉ってたしかこんな感じだったっけという英語に訳し会話をしていました。あとは、身ぶり手ぶりだ大体のことは伝わりました。外国の友達もたくさんできたし、自分の伝えたいことか伝わったときはすごくうれしかったです。

2 つ目は IST 方々です。私達が快適に過ごせるようにと清掃、交通整理などいろいろなことをしてくれました。そのおかげで私達は 2 週間快適に楽しく過ごすことができ、また快適だったあまり最終日に

「帰りたくない」

「何言ってんの、まだ初日でしょ」

などこの 2 週間が辛かったらぜったいに言えない冗談までも皆で言い合うことができました。私達をサポートしてくれた方々には感謝して仕切れません。私はこと感謝の心を忘れずに次の代へ引き継いでいこうと思います。

最後に、この大会に参加できて良かったです。この大会の思い出は一生忘れません。とてもいい経験になりました。次回も行きたいです。

ボーイスカウトを超えた感動を

鶴班　嶋本 翔治

2015 夏、僕は何事にも代え難い経験をしました。文化・言葉の壁を越えた交流、たくさんのアクティビティ、隊・班の人々との新しい絆、ジャンボリーを通して様々な経験をしました。

ジャンボリー初日、バス、新幹線を乗り継いで。会場に着きました。最初、会場を見たとき、ド肝を抜かれました。前回の日本ジャンボリーと同じ場所なのに、大きさ、人の数、全てが違く、周りを見ると外国の方々だけで、まさに外国でした。ぼくは今凄い場所に立っているのだと改めて思いました。

ジャンボリーの生活は朝弱い僕にとって、大変な物でした。しかし、仲間ととに居たためかあまり、苦にはなりませんでした。ただ、1 回ご飯が失敗し、そのご飯を見たときは、少し不安になりました。

そうした中で，開会式が始まり、約 2 週間という長差WB研修所に見えて短い日々が始まりました。

アクティビティでは、水泳やロッククライミング、自然を感じ、触れるものなど、様々なアクティビティがありました。その中でも、ピースプログラムで原爆ドームを見たのが一番印象的でした。

そこでは、戦争の悲痛さや、原爆の怖さ、今では考えられない衝撃の数々でした。僕はこれらを見て、言葉を失いました。そして、今この世界は平和であり、過去にはこんな壮絶で悲しいことがあったことと、もう二度とこのようなことがなくなる社会を作っていこうと思いました。

アクティビティ以外にもたくさんの事がありました。限定商品を買うために約 5・6 時間並んだり、その合間で、外国の方々と物々交換したり、そこで交換する時、渡す物があんまり気に入らなかったのか NO と断られたり、何故か一緒に踊ったり、あそんだりもしたり、たくさんの人々とふれあいました。

また、隊でも様々に国と交流し、外国の友達もたくさん増えました。

そして、あっという間に閉会式となりました。ここでの 2 週間は毎日が新鮮で、生涯をかけてもここでしか味わうことができないものばかりでした。

家に帰ると、肌が真っ黒に焼けた僕を見て大変驚いて居ました。そのあと、僕は，そこでの 2 週間の生活の事、新しく外国の友達がではたこと、そして、そこでの生活は毎日が楽しく、知らなかったこと、改めてわかったこと、もっと長く続ければ良かったことなど、全てを話しました。

当初は長いと思っていた 2 週間でしたが、終わった今では、短く感じられ、その体験は貴重なもので、僕はこれらを生かして遠い国の人々を助けるなど、ボーイスカウトの枠を超えた活動をしたいと思いました。

世界スカウトジャンボリー

セブンキャット班　藤枝 弘樹

「必ず世界スカウトジャンボリーに行く」そう心に決めて、長い年月ボーイスカウト活動を続けてきました。少しでも多くのチャレンジ章を取り、少しでも高い旧を目指し，菊章も取得しました。そして、今年念願の世界スカウトジャンボリーにスカウトとして参加することができました。

出発の日、東京駅で仲間の姿を見つけた時「いよいよ始まるぞ」とワクワクしたのを今でも覚えています。そして 6 時間以上かけ、山口のきらら浜に着きました。2 年前の日本ジャンボリーの時とは規模が違い、参加している人たちの人種の多様さ、見渡す限りの人、人、人。かなた遠くまで続くテント、テント、テント。「これが世界なんだ」と圧倒させられました。

日々、朝から晩まで様々な体験をしました。ピースプログラムでは広島に行き、原爆のおそろしさを学びました。よさこいの発表のために、みんなで一致団結して一生懸命に踊りを覚え、無事本番で上手く踊れて、たくさんの拍手をもらいました。小学校に行ってスイカを食べたりウォータープログラムでビーチバレーをしたりと、毎日があっという間に過ぎて行きました。そんな中、一番心に残っているのは、外国人スカウトと昼食を共にし、英語で会話をしたことです。ジャンボリーでは、毎日周りは外国人がたくさんいましたが、この日以外、ゆっくりと話ができなかったので、良い経験ができました。実際、外国人との会話をしてみると、えいごが上手に聞き取れず、何度も聞き返してしまいました。これからは、もっと英語を日頃から親しもうと思いました。

私は 2 年舞うの日本ジャンボリーに参加したときは中学 2 年でした。あれから 2 年経ち、自分自身の立ち位置が変わったことに気づきました。2 年前の私は「自分のやるべき任務をやる」ことで精一杯でしたが、今回はそれはもちろんのこと、年下のスカウトを面倒見、指示して動かすという役割もあり、前回のジャンボリーの班活動と比べて、忙しくも楽しくもあり、より充実したものになりました。

今回のジャンボリーで、スカウトとしての参加は最後でしたが、あの充実感や感動は忘れません。そして、機会があれば大会スタッフとして、指導者として再びジャンボリーに行きたいです。

最後に、今回世界ジャンボリーに行かせてくれた利根 1 団の団委員長、隊長及び関係者の皆様、どうもありがとうございました。

2 週間共に生活してきた仲間達に何よりも感謝をします。

世界ジャンボリー「和」

梟班　栗本 迅

私は今年の夏に行った、ジャンボリーではたくさんの事を経験し、学びました。

まず、開会式では日本ジャンボリーとし比べものにならない人数のスカウト舘がいて世界の大きさを知り増した。最後の方は慣れてきて、様々なスカウトと交流をしました。英語で会話するのも中学生でならってきた英語を使えば、だいたいできました。そして、それが通じると嬉しかったです。

一番思い出に残っているのは、８月２日にあった、フードフェスティバルとアリーナショーです。フードフェスティバルではいろいろな国の食文化を体験できました。夕方のアリーナショーは日本の様々なアーティストや安倍首相、皇太子なでが来てくれて、ものすごく盛り上がりました。外国のスカウトとも一緒に盛り上がれたので一番楽しかったです。

次に楽しかったことは、フットサルでのミニワールとカップです。世界のスカウティングたちと対戦しました。けっかはあめりかと戦って 1-0 で勝ちました。守谷の友達と一緒にやれて。とても良かったし、楽しかったです。

他にも心にのこったことがたくさんあります。広島ピースプログラムでは、戦後 70 年という節目の年だったし、戦争のおそろしさを身を以て知りました。

でも、なんと言っても一番良かった体験は、同じ隊の人たちと親しくなれたということです。初日や事前訓練では少し緊張していたし、あまり行きたくないなと思うこともありましたでも、４日目くらいからは同じ班員とも親しくなれたし、特に守谷の西君とこうよう君と穴田さんとは毎日すごしていた楽しかったです。毎日、飯を作ったり。シャワーに行ったりするのが楽しくてしかたありませんでした。

このジャンボリーでは本当に良い経験をしたなと思っているし、行けて良かったと思います。日本ジャンボリーに引き続き、スカウトの「和」を広げることができました。

ジャンボリーに参加し感じたこと

日本オオカミ班　鈴木 仁人

私は 23 回世界スカウトジャンボリーに参加して、３つのことを思いました。

１つ目は、コミュニケーション力です。私は今まで海外に行ったことがなかったので、あまり実感が無かったのですが、外国の人し話すと、はっきりと話せないこととはっきり話さないせいで、相手にされないことがあるという事が分かりました。なので、ジャンボリー後は物事をはっきり伝えるようにしたいです。英語が話せないということを理由にして、外国の人と話さないということをしないようにしたいと思いました。

２つ目は、英語の大切さです。これもまた日本に住んでいると感じにくいことなのですが、ジャンボリー会場に行ったとき、ほとんどの国の人が英語をペラペラと話していたので、正直驚きました。また、閉会式の午前知勇にあったイベントで、外国人と昼食をとったとき、香港やドイツなどの英語圏じゃない国の人でも、英語圏の人とスラスラ会話できていたので、もっと自分も英語を勉強しなければならないと思いました。

３つ目は、外国人の開放感です。ジャンボリー人、外国の人を見ていると、国籍や話す言語など関係なく色々な国の人が集まって一緒に踊っていたりしました。それほ見て私は、とてもフレンドリーだなぁと思いました。日本人でもそのような人はいますが、やはり、他の島国に比べて少ないと思いました。見ず知らずの人とは一緒にふざけたりしないということは、日本人らしいことかもしれませんが、それでも私は少しくらいだったらそれを許してもいいのではないかと思いました。

最後に今回世界スカウトジャンボリーに参加したおかげで様々な事を知りました。また世界がここまで大きいのかと実感できました。

世界ジャンボリーに参加して

梟班　平方 曜

僕は世界ジャンボリーに参加して楽しかったことやすごいと思ったこと、学んだことがたくさんあります。

まず現地に行っておどろいたことは外国人の人がすごく大きくて瀬が高かった事です。僕の隊の背が高い人も外国人の女の人にかなわないくらいの身長がありました。それに外国人には太った人も沢山居ました。これも食文化の違いなんだと思いました。

外国人はすごくテンションが高くてノリが良かったです。開会式の会場に行くときも、なんか叫んでいたり歌っていたりとずっとテンションが高かったです。夜になっても歌っている国もありました。日本人は恥ずかしくて歌えないなんてことがありますが外国人にはそんな気持ちがないのかなと思いました。

マナーの悪い人もたくさんいました。道路にゴミが沢山落ちていて、班でもゴミ拾いをしたら、すぐに袋がいっぱいになってしまいました。特にペットボトルのゴミが多かったです。それに食べ物で遊んでいる人もいました。ビックリしました。

プログラムも一杯やりました。ピースプログラムでは、広島に行き戦争のことについて学びました。原子爆弾について少ししか知らなかったけれど、このプログラムで犠牲になった人の事や、すさまじい破壊力などいろんなことを知りました。戦争はこれだけではないけれど、その一部をしれた気がしました。

その他のプログラムでは、楽しいことがたくさんありました。ワールドカップもどきでアメリカを 1-0 で勝ったこともあったし、ウォータープログラムではつな引きをしてボロ負けしたり、ビーチサッカーでイギリスに勝ったり、いろかな事をしました。楽しいことがたくさんありました。

このジャンボリーで外国人の文化にふれることができました。アメリカなどの日本と違う文化に興味がでて、ホームステイなどにも行ってみたいと思いました。アメリカで行われる 24WSJ にも行けるなら行きたいと思いました。今度は英語を話せるようにして…。

第 23 回世界スカウトジャンボリー

日本オオカミ班　入江 海斗

僕は今回の第 23 回世界スカウトジャンボリーに行った感想が多数あります。まず１つめの感想は２年前に行った日本ジャンボリーより設備がしっかりしていた事です。日本ジャンボリーではまずトイレに問題があり朝にトイレに行くと 30 分くらいは並んでいましたが、今回の世界ジャンボリーでは、トイレに行って並ぶことはまずなく、並んだとしても約 2,3 分しか並ばずに行ける事がとてもうれしかったです。そして日本ジャンボリーの時には無かったマーケットがすごく設備がととのっていたのがすごいと感じた所の一つです。

そして次の感想はアリーナショーについてです。今回のアリーナショーには自分の好きな歌を歌っている人がゲストとして登場してとてもうれしかったです。またアリーナショーが終わったあとでもみんなで歌を歌ったりしたことが今も時々思い出します。

そして３つめは外国隊の人々との交流や交換などをしている時に思った事です。今回のジャンボリーに来た外国隊は１万人を超えて自分達のサイトのまわりには外国隊ばかりでしたがその外国隊とは何回か交換をしましたがその時の人がとてもやさしく、自分はこれではだめだなどと思っていた物でも交換してくれたので、うれしかったです。また私は何回かあった項了解でもやさしくしたもらったので外国隊でもこんなにやさしくしてくれたのでありがたかったです。

23WSJ に参加して

鶴班　寺門　宏規

23WSJ に参加して員章に残っているのが３つあります。

１つ目は、やけど虫に触れてしまい、足が線状に赤く腫れて水ぶくれができてしまったことです。朝起きたら、足にピリピリとした痛みがありね足ヲ見て見たら両足の内側に水ぶくれがあり、とても驚きました。キネコ副長に言ったら、やけど虫じゃないかと言われました。すぐに隊長と 407 隊に行き、吉田副長に、やけど虫にやらけていると言われました。吉田副長に薬をもらって、サイトに戻りました。毎日、朝と夜に薬をぬっていたら３日くらいでだいたい治ってよかったです。今もやけど虫にやられた痕があります。すぐに薬をもらえたので早く治りよかったです。

２つ目は、ご飯の量が多かったことです。毎日ポテトサラダとポテトチップがたくさんでました。量がとても多かったですが、みんなで分け合って、頑張って食べました。

３つ目は、外国隊しの交流です。バングラデシュとの交流では、ベンガル語やダンスなどを教えてもらったり、日本語を教えたりしました。メキシコとの交流では、じゃんけんを教えたりしました。英語は、あまりよくわかりませんが、なんとなく会話ができていたので良かったです。もっと長い時間交流をしていたかったです。もつと英語をペン教しなければならないと思いました。

23WSJ では、たくさんの人のことを学ぶことができました。お世話になった人たちに感謝の気持ちで一杯です。24WSJ にも、行けたら行きたいです。

第 23 回世界スカ ウ トジャンボリーに参加して

梟班　堀田 日菜子

この夏私は、念願の世界スカウトジャンボリーに参加することができました。 カブスカウトの頃から数々のキャンプやキャンポリー・ジャンボリー、フォーラムな どに参加してきましたが、世界ジャンボリーの存在感は別格でした。サイトの規模、プログラムの充実度、スカウト達の熱気など、何もかもが想像を超えていて驚きの連続でした。

特に新鮮に感じられたのは、いろいろな外国隊の日常をかいま見れたことです。食事や民族衣装、お祭りなどを、写真やネットではなく、生で見て体験できたのは貴重なことでした。 もちろん、一番大きな経験はコミュニケーションであり、初めて出会った国籍も外見も違う仲間達が、互いを尊重し合いながら協力して一つのことを成し遂げる素晴らしさを、これほど強く感じたことはありませんでした。 閉会式での降納の場面で、広大な会場で国も言語も違うスカウト達が静かに敬礼する姿は、二ヶ月経つ今でも目に焼き付いて離れません。 スカウトとして参加した最後のジャンボリーがこの第 23 回世界ジャンボリーであったことは、大変栄誉なことだと思っています。

感動の一方で、反省点もいくつかあり、特に自分の語学力不足を痛感しました。 開催地が日本であっても、一歩会場に入れば周りは外国であり、ネイティブの英語は教材の CD とは違って早口でなかなか聞き取れず、自分がとても小さな存在に感じました。そのため､班長以上の立場でありながら、始めは班員たちの手本となるような積極的な外国人との交流ができませんでした。グローバルな空気や英会話にようやく慣れて、少しずつ積極的な交流ができるようになった時に閉幕してしまったのはとても残念でした。 これからはコミュニケーションを大切にしながら語学のレベルアップを図りたいと強く感じました。

私は今後、この世界大会での経験を生かして指導者側からボーイスカウト活動を支えていきたいと考えています。辛いことも仲間と協力して乗り越えた達成感、自ら行動して身に付けてきた技術、何よりもスカウト活動の楽しさを、広く伝えていきたいで。 近年はボーイスカウト活動を志す人が減っているようですが、この経験を知らないのは損だと思います。 多くの人にスカウト活動の尊さを知ってもらい、次の世代へと繋げていけるように、指導者としての実力と実績を身に付けていきたいです。

第 23 回世界スカウトジャンボリー

副長　太田 好紀

世界スカウトジャンボリーが終わり、2ヶ月が過ぎようとしております。時間が経つのは早いもので、あれだけバタバタしていた生活が、嘘のように落ち着いた日々を過ごしております。この世界スカウトジャンボリーは、さすが世界規模ということもありまして、様々な報道機関が様々な情報を発信しておりまして、皆様も度々、目にして、耳にしておられることと思い、また、昨今はインターネットで調べようと思えば、いろいろな情報が収集できますので、イベント内容については割愛致します。私からは、半分自慢話にもなってしまうかもしれませんが、このジャンボリーに参加して、大変恵まれており､幸運だったことについてご報告させて頂きます。

①まずは、指導者を初めて５年目である私が、16NJ に引き続き、23WSJ においても、指導者として参加できたことであります。任命されなかったら、何もかも始まりませんでした。

②次が、開催期間に仕事の休みが取れたことです。１週間をリフレッシュ休暇、１週間をボランティア休暇で休み、23WSJ 最終日翌日からは会社自体が夏季長期休暇に突入致しました。休暇明けの出勤は他社員同様、長期休暇明けの出勤だったので､目立たなくて済んだことであります。

③次が任命された隊ですが、原隊所属の３地区、４地区の茨城２隊ではなく、５地区、６地区からの構成である茨城３隊の指導者に任命されたことであります。茨城２隊が嫌な訳ではなく、茨城３隊での指導者の方々とは、全て、初めての行動であり、輪を広げることができたことであります。

④四つ目は、５地区、６地区のスカウトと共に 23WSJ を経験できたことであります。素直に考えれば、16NJ を共にした自地区スカウトがいる茨城２隊に配属ではあったはずだが、今回はシャッフルでの配属であり、顔見知りのスカウトが少なく、ここでも輪を広げる事ができたことであります。

⑤次が、0408 隊のスカウト人数でありますが、事前訓練から定員 36 人に対して、31 人で、不足状態が続いており、このままでは、欠員分を外国スカウトで補充する可能性が大きいと噂が流れておりました。結果的には 31 人のままで 23WSJ に臨むこととなしましたが、これも良かったと考えております。英語圏以外のスカウトが来たことを考えると、ゾッとします。

⑥先程も述べましたが、今回、指導者は原隊との係わりを関係なく配属されたため、茨城１隊、２隊の隊長は、私と同地区の３地区所属の指導者でありました。良く知る指導者でありましたので、茨城派遣隊全体での連携、調整を図る時には、大変話し易かったことであります。

⑦キャンプサイトの配置ですが、16NJ では、茨城の派遣隊同士でも、キャンプサイトが異なり、ちょっと歩いて行ける距離ではなかったのですが、23WSJ では、１隊、２隊、３隊とも歩いて１～２分の距離であった為、連携が取りやすかったことであります。

⑧３隊のスカウト達ですが、参加 MUST ではないイベントに関しましても、積極的に参加し、交友を広め、様々な思い出を我々指導者にも、残してくれた事であります。ワールドカップサッカーでは、アメリカと戦い勝利し、よさこいでは、恵那、富士エリアで、富山、福島、静岡の隊と合同即席チームを結成し、ステージで披露したなど、いろいろと、楽しませて頂きました。

⑨次が、天候でありますが、12 泊 13 日の長期間において、１滴も雨が降らなかったことであります。16NJ ではゲリラ豪雨があり、時期的にも台風の可能性があり、夕立が来てもおかしくないところですが、本当に１滴も振りませんで

した。

⑩一番の幸運は、スカウト、指導者が笑顔で出掛けて行って、笑顔で帰って来れたことでございます。現地では、軽い熱射病や、風邪、はたまた、「やけど虫」に刺されたスカウトはおりましたが、大事には至らず、スカウト全員が楽しめたのではないかと思っております。

大きなところでは、この 10 件ではありますが、私の中では 23WSJ の「十の幸運」と名付けております。大きさ云々ではなく、いろいろな幸運が重なって終えることができたジャンボリーだった思っております。

これも事前訓練より協力頂きました県連盟、各地区、各団の関係者並びに、スカウト並びに、指導者の各位の協力の御蔭と改めて感じております。この経験を今後に生かせるよう、スカウティングに努めてまいりますので、引き続きのご指導、ご鞭撻をよろしくお願い致します。

最後になりますが、私、個人的には人に訪れる幸せと、不幸せは人により大きさは異なりますが、プラス、ナイナスで相殺されていると考えておりますが、23WSJ 後にマイナス事項が来ておりません。人に言わせると、プラスに偏っている人と、ナイナスに偏っている人がいてバランスが取れているとも言えるそうです。私がそのプラスの偏りにいられるよう日々、感謝の気持ちを持っていたいと思います。

第 26 回世界スカウトジャンボリーを終えての感想

副長　金子 俊之

<感想>

今回初の世界ジャンボリーの参加となりました。「世界」と付くだけに海外での活動を想像していたジャンボリーがまさかの日本開催という記念すべき日に参加できたことが幸いでした。

数字で 3 万人の参加と聞いていましたが、想像していたよりも多く感じた海外スカウトたちの人口密度に圧巻。ほぼ未体験の状況が不安でもあり楽しみでもある気持ちでした。正直、スカウト達はそんな不安などあまりないようで、私より逞しいのではないかと感じられ今大会も何とかなるだろうと思わせてもらいました。出発当日、体調のすぐれないスカウトや怪我をしたスカウト等心配になる場面はありましたが、そういうスカウトも過度な心配をよそに猛暑の中で 2 週間のキャンプ生活を送り、体調も整えたうえで無事に東京駅に戻ってきた姿は自慢ができるワンシーンでございます。今後この経験がスカウトたちの今後の目標を見つける良いきっかけにしていただきたいですね。

<会場内の感想>

今大会の会場は山口県のきらら浜という埋立地が会場ということで自然が少々の、日陰も木陰もないという「お祭り会場」いうより「訓練地」といった心が踊る場所。奇跡的にジャンボリー史上珍しく開催中に雨が降らないというまさに真夏の会場でした。（ただ、水捌けの悪い場所なので雨が降らないことがかえって良かったのかもしれません）。

私たち茨城 0408 隊のテントサイトはブラジル隊やイギリス隊、オーストラリア隊などに囲まれている、外国隊に免疫のない自分にとっては緊張感あふれるサイトでありました。開会式前に我らのテントサイトにいろんな国から訪問者が顔を見せに来てくれるたびに世界ジャンボリーが始まったと感じられました。スカウト達もコミュニケーションは何とかとれている様子で一安心。

シャワーの完備やトイレの増設もあり割とよい設備は良いものと、特にシャワーは帰る前の晩まで使えたことが衛生的にも精神的にも良かったものと思われます。

そして少しはなれてはいましたが一番珍しく思えた施設がスーパーマーケットの存在。キャンプに来ている者にとっては反則的な、しかしほぼ毎日利用させていただいたところであります。今大会必須（?）である氷の調達がここで簡単に調達できたことはかなりの利点です。他にもジュースやお菓子、充電器のなんでもござれといった品揃えはさすがに考えもののような気もしましたが。

他にもいつもあるスカウトショップやいろんな国の食べ物の出店があるフードハウスなどの施設がありテントサイトとは違った空間があるなど、歩けば、探せば何かがあるという宝探しができる会場ではありました。

<活動中の様子>

活動は日によって場外プログラム、場内プログラム、全体行事を行い、夜は任意で他の隊と交流会を行うといった流れ。また「よさこい」を披露する場面も多く、ほぼ毎日暇のない状況だったのではないかと思います。特に「よさこい」は交流会やコンテストにて発表するなどスカウトたちの努力の成果が見れて、短い期間でよくここまでできたと驚く場面でした。

キャンプサイトごとに自分たちの国の料理を振るまう「フードフェスティバル」ではアレルギーやベジタリアンに対応できるように「稲荷そうめん」を用意。思った以上に好評であり無事完売したことはいろいろと達成感がありました。スカウト達もこのフェスティバルでいろんな国の食べ物を堪能し交流したのではないかと。無事変なお菓子をもらってくるスカウトもいました。

ジャンボリーのメインともいえる外国隊との交流会も無事体験。始めはぎこちなかったところもありましたが緊張が解けてくると交流も楽しいものに、とりあえず話すことが大事だなと痛感したとこでもあります。あと、私は奥の手のスマートフォンの英会話アプリで交流に対抗しましたが通用しないことでショックを受けました。

その他、の場外プログラム、場外プログラムの広島平和記念館の見学や地域の人々との交流、ボルダリングの体験等、学校の行事で体験するようなものから普段やらないようなことの体験ができた印象。

猛暑で具合が悪くなるスカウトもいたりと、風邪気味になるスカウトもいたのでスカウトたちにエンジンがかかり始めたのはジャンボリー開催から後半からと少し遅い感じはしましたが、最終的には全員で楽しめた物だと思います。少し残念だったのが閉会式の盛り上がりが一番微妙なことであったことでしょうか。

<反省点>

①英会話の勉強が不足していたことでコミュニケーションがうまくいかないことはやはりつらい環境でした。アプリの力に頼ってはダメでした。

②スカウトとのトラブルもあったので、指示がうまくできなかったことでの力不足。班内のトラブルや隊長の怒る場面もありましたので、うまくフォローができたか不安であった。

③交流会の回数が少なかったこと。もう少し積極的にさせるようなフォローが不足していたかもしれない。

④やけど虫の情報はあったのですが、対策を怠っていたこと。

<大会を終えて>

今回ソーラー電池の充電器を用意していたおかげで電池切れの心配もなくフェイスブックに写真投稿することができました。保護者の方々からも毎日写真が投稿され心配されてた方も安心できたと好評であり、カメラマンとして歩き回ったかいがあったと思います。

スカウトが外国隊に負けないようにと大きなゲートを作ったり、大きな声で歌を歌ったりジャンケンをしたりと写真では伝えきれなかったことも多く、楽しいことだけではなく嫌なことに愚痴をはく場面があったりと色々なことがありましたが全部含めて濃厚な 2 週間でありました。

一人一人が大会のテーマであった【和】というテーマ通り、世界のスカウトと協調しまとまったかはわかりませんが 0408 隊のつながりはできたのだと思います。このような機会はまだまだ多くありますのでこういうつながりを広げて自分自身の経験値を上げていきたいと思う次第でございます。

最後に、郡司隊長、太田副長、大野副長、参加したスカウト、ご支援してくださったリーダーと保護者の皆さま。貴重な経験のご支援、本当にありがとうございました。

❖８月９日　帰着

道・山陽新幹線のりば
okaido, Sanyo Shinkansen Tracks
JR全線
Shinkansen

JR全線きっぷうりば
Shinkansen and JR Line Tickets

Shinkansen and JR Line Tickets

cks
Shinkansen and

ぷうりば
Line Tickets

nsen and JR Line Tickets

第 23 回世界スカウトジャンボリー参加報告書

マーケティング・コミュニケーション部写真班班長
柏原一仁（つくば第 1 団）

20WSJ(スカウト)、21WSJ(IST) に続き、3 度目の世界スカウトジャンボリー参加となった今回、プレジャンボリーとして開催された 16NJ に引続き、マーケティング･コミュニケーション部（広報部）への従事となった。

業務内容、事前のブリーフィングもほとんどない中、現地合わせでの運営に携わる形となった。

マーケティング・コミュニケーション部 (以下 MC 部) は、大会内での公式な広報として活動し、3 つの軸をもち、運営された。

1 つ目は、その大会内の多くのシーンを撮影・収録・記録しその内容を映像、新聞、ソーシャルメディアなどを通じ公開することを主な業務。

2 つ目は、外部メディア（新聞社･テレビ局など）に対する報道対応をし、大会として公表するデータやプレスリリースの管理などを行う業務。

3 つ目は、スカウトが自ら情報発信を行う、スカウト通信員プログラムの提供業務。

組織としては、部長以下、ビデオ班、写真班、新聞班、ソーシャルメディア班、報道班、ヤングコレスポンデンス・ヤングスポークスマン班、庶務班となった。

写真班は、新聞班、ソーシャルメディア班、他部署から要求される写真の撮影・提供を行うことを主な業務とした。

自分の業務内容としては、写真班をまとめる立場として、人的リソース・機材・取材計画の管理をおこなった。

人的リソース : 世界各国からの IST 約 40 名の管理。シフトや各自のタスク、アップロードされた写真のチェックなどをおこなった。

機材 : スポンサーであるキヤノンより同社製カメラ・レンズの貸与があり、その機材の運用・メンテナンス・管理をおこなった。

取材計画 : 各部門から出されるニーズに対し、その詳細の確認、把握と、フォトグラファーの派遣指示・管理をおこなった。

また、外国人には事故や危機管理の懸念から行えない、高所作業車からの場内撮影、自衛隊のヘリコプターによる会場上空からの空撮を実施した。

写真班の撮影データはトータルで 500GB 以上となり、その中からジャンボリー新聞 (全 11 号)、大会公式 Facebook ページ、Twitter アカウント、Instagram アカウトへの写真使用、公式 Flickr、WOSM メディアサイト、各国派遣団による使用、Scouting 誌での使用や、各メディアが自由に使えるような体制での供給となっている。

寝食も含めほとんどの時間を MC 部のあるメディアセンター内で過ごし、撮影に行くこともほとんどなく、1 度もテントに宿泊することもなかった。

一方で多くの一緒に働いてくれた IST と多くコミュニケーションをとることができ、語学力も強制的な向上があったと感じている。

業務内のワークフローについて、WOSM チームから学ぶところが多く、今後の日本ジャンボリーに還元できるであろうところを、日本人幹部の中でシェアできたこと、大きな収穫といえ、今後の大会でのサービス向上に寄与するはずである。

一方で文化や運営の方法などに違いを感じる部分もあり、良くも悪くも毎日が勉強。夕刻の班長級ミーティングでは報告と進捗や問題点のディスカッションなどが毎日行われ、英語でのプレゼンテーションには難儀したが、毎日多くの問題をひとつずつ解決していき最後までやりきれたのは、本当に嬉しいことだと感じた。

写真班では 6 人の IST が一緒に働いてくれたが、彼らには他の国の IST に任せづらい機材の清掃・点検・管理業務をお願いし、撮影に出る時間を減らしても喜んで、遅くまで従事してくれたことを感謝したい (茨城県連盟からは牛久 1 団の岡くんが従事)。

公にされる報告書には書けないことの事が多く、報告書も簡素になってしまいがちだが、“ジャンボリー”に参加すればするほど、スカウティングの面白み、経験と感動の共有の幅が広がり、次の楽しみも増えることを実感している。多くのスカウト・指導者に望むのは、1 回大会に行って満足せず、期間を開けても良いから、継続して大会に参加・奉仕すること。

そしてそのためには日常的なスカウト活動を継続的に楽しむこと。

参加に関わっていただいた多くの支援者の皆様に感謝します。ありがとうございました。

「参加する」ということ

セイフティー部　部長付　吉川　勲

1. 仕事

私の所属はセイフティー部（Safety Department）でした。第 16 回日本ジャンボリーに奉仕したときの委嘱状に、「任期は第 23 回世界スカウトジャンボリーが終了するまで」とあったことにより、16NJ に続いての仕事でした。この部署の任務は、医療・警備・傾聴などです。寄せ集めの感がありますが、大会における参加者の安全を確保するために対策する部署でした。

私は今回「部長付」という肩書きでしたが、要は、英語対応者という位置づけです。23WSJ は事実上英語によって運営されていました。各部との調整、派遣団からの要請処理、大会運営本部との調整、県警との連絡・調整、および IST（部員）との連絡を担当しました。

さらに、夜間のトラブル処理もありました。若い外国人 IST が集団で場外のコンビニ付近で騒いでいる（と近隣住民は思った）ので対処せよ、との

山口県警からの要請に応じたものです。仮眠用テントに寝込んですぐに早朝3時前後に起こされて、車を運転して現場に行き、酔った若者を説得して場内に送り返すという作業です。

午前中は会議に次ぐ会議、午後は会議と書類と電話対応、夜間は場外での説得、が私の毎日でした。ジャンボリーはいつもそうですが、慢性的に寝不足状態でした。その分大きな事故もなく大会が終了したことに大きな安堵を感じています。

2. 安全の再認識

「野外活動の安全」については、20数年前に隊指導者を拝命してから常に意識していたことです。しかし、今回は認識を改めさせられました。23WSJにあっては、「安全はすべてに優先する」とは、事前にいくら時間をかけて準簿しておいた組織・サイト構成であっても、「すべて」を変更しても参加者の安全を確保するというものでした。ついコントロールすることに気持ちが向いてしまいますが、要は、危険な要素を取り除けばいいわけです。日々新たな危険因子が現れますが、それに優先順位をつけてひとつずつ取り除くのです。副大会長が、「蛇を見たら、蛇を殺せ」と表現していました。

「安全」とは静的な状態ではなく、「危険」を排除し続けるプロセスであると改めて思い知らされました。指導者研修では幾度となく語ってきましたが、認識不足であったことを再認識しました。安全管理では、危険因子の発見と対策の順位付けが肝要なのです。

さらに、私の認識不足か、メンタル面のケアが大切であることも理解しました。Listening Earという部署がありましたが、一般に関心は高くなかったようです。しかし、この部署は、いじめ、パワハラ、事故後、事件後などに弱者／被害者と話をして、精神的な回復を支援する部署です。もっとスカウティングで取り入れるべき要素だと思います。身体的ダメージもさることながら、精神的なダメージの方がより長期的に人を傷つけるからです。精神面の安全も強く意識するべきでしょう。

3. ISTのこと

日本の大会では「奉仕者」という名称で募集されますが、WSJではInternational Service Teamです。チームシステムによるスカウティングなのです。英国からは日本を上回る900余名のISTが参加しました。スウェーデンからも大勢が参加しました。これはジャンボリーには「任務を負って参加する」という意識が浸透しているからでしょう。日本人は「やらされる」意識が強いようですが、特に欧米のISTは「働くことで参加する」意識が徹底していたようです。

STの仕事は27日から予定されていましたが、前々日からチェックインした彼らは自主的に仕事を探し、まずは争うようにトイレ掃除を始めたのです。感心しました。考えたら、はじめからきれいにしておけば、汚して使う人間は減るわけです。

彼らにとって、大会運営に関わることが自分のプログラム活動であり、与えられたプログラムに参加する年少のスカウトは別に、自分のプログラムを楽しんでいたように見えます。すべてのISTがそうだった訳ではありませんが、これからのスカウト大会が、プログラム参加のスカウトと、運営参加の成人と、全員が主体的に参加するという形態で展開されることを期待しています。スカウティングは「主体的に参加する」ことに意味があることを改めて認識しました。

4. 感想

団、地区、県連盟から支援をいただきました。7月23日に出発し8月10日に帰宅という、18泊19日の比較的長期の参加でした。2年前の16NJから継続しての任務でしたから、大会前後の準備会議や作業を含めて、足かけ4年ほどの関与していたことになります。それでも「やればできたのに」という思いを払拭できません。疲れて対応しきれなかったとか、別に担当者がいるから大丈夫だろうとか、やや当事者意識にかけていたと思っています。アイルランドから参加したチャーリーには慰められましたが、新たな課題発見です。個人的には多くを学ぶことができましたので、ありがたいことだと思っています。

感謝、感謝、弥栄。

会場の一角、成人生活エリアのそばに設けられていたスタッフレストランは、幅50m、奥行き25mは優に超えると思われる大きな仮設テントで、1000人位は同時に食事ができるのではないかと思われる規模でしたが、それでも混雑時には入口に長蛇の列ができる有り様でした。

その日の朝、業務の間に時間を作る事ができた私は独りスタッフレストランに向かい、列を並び配膳を受け、空席を見つけて食事を摂っていました。

世界中から奉仕に来ているスタッフ達が話す様々な言語が飛び交う中で、ふとホイッスルの音が聞こえそちらを向くと、1人のスタッフが会場のほぼ中央に立ち、スカウトサインをしていました。

それが合図となったのか、彼を中心に円を描くようにレストラン内の全ての人々が起立し、ある者はスカウトサイン姿で、ある者は頭を垂れて目を閉じる静寂の時間が流れました。

私も周りに促される様に席を立ち、そして気がつきました、「今日は8月6日、今は午前8時15分」だと。

国を超えたスカウトの一体感を、今回の大会テーマである「和 (WA): a Spirit of Unity」を実感したひとときでした。

弥栄

朝食時の出来事 ～きらら浜レポート～

日本連盟医療チーム　青山 雅樹

私は、先日開催されました第23回世界スカウトジャンボリー（23WSJ）に、日本派遣団の一員として参加してきました。

今回の奉仕では、日常の生活やスカウト活動ではとても得られない経験を、そして勉強をすることができました。団や県連をはじめ御支援を頂きました方々には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

現地では、医療関係資格者の国際サービスチーム員（IST）としてセーフティ部に所属し、中央救護所（ジャンボリーホスピタル）において医療スタッフのメンバーになり、主に参加者の歯及び口腔内のトラブルの対応にあたっていました。

要救護者の訴えは多岐に及びましたが、もちろん日本語に不自由な方がほとんどで、意思疎通には非常に苦労した事を付け加えておきます。

さて、WSJ運営スタッフは、期間中の宿泊は幕営であっても自炊の必要は無く、食事の提供がありました。

23WSJにISTとして参加して

マーケティングコミュニケーション部　岡 勇樹

私は今回の世界ジャンボリーにISTとして参加しました。

スタッフとして活動していた部署は、マーケティングコミュニケーション部（広報部）というところで、その中で写真班の一人として活動していました。仕事内容は主に、カメラを持ってスカウトやジャンボリーの様子を撮影することでした。

写真班には世界中様々な国と地域から集まった、主にローバースカウトたちが20人ほどいました。日本人はそのうち7人いました。

写真班は基本的には個人活動で、各自で部署に提供されているカメラを借りて、写真を撮りに行き、そのあとは部署の本部に戻り、パソコンで写真を厳選し、それを新聞編集班やホームページ作成班などの方へ渡すという流れになっていました。

しかし、個人活動といっても、班の中で協力して行うこともありました。

例えば、まず貸し出すカメラの管理です。貸し出されるカメラは、ジャンボリーの協賛企業であるCanon の好意で提供されていました。カメラはアマチュアが使うには大変高価なものが多く、高いものだと本体とレンズがそれぞれ 30 万円するものや、ビデオ班（動画撮影をする班）が使うものにはレンズだけでも 100 万円するものもありました。それは大変恵まれていた機会であった同時に、万が一紛失をしたら信用を失いかねないものでした。実際、外国の方で、盗むとはいかないまでも黙って持ち出したり、期限以内に返さなかったりということはありえる話でした。そのために、写真班の本部スタッフの方（日本人）に、私たち日本人はカメラの管理を任されていました。今思うと、大変な作業でしたが、とても勉強になったとも思います。

管理は主にカメラの貸出、返却、点検という3つの作業がありました。大会期間の後半になると、徐々に要領を掴み慣れていきましたが、最初の頃は大変でした。まず、朝 8 時半の貸し出す時間にはカメラの保管、貸出の場所に行き、チームの方たちにカメラを貸出始めます。対応はもちろん英語で、自分の能力不足で聞き取れないことも多々あり、迷惑をかけることもありました。また紛失を防ぐために、誰に、何を、何時に貸したか・返すかという事の記録を取らなければいけなかったので、貸出用紙をあらかじめ作成しておいて、その場で ID とカメラ名を記入し、また写真を撮ることも行っていました。そしてこの作業は前述の通り日本人のメンバーの中で行っていました。その中で、ここをもっと改良したらいいとか、この作業は無駄だとか、いろいろな意見を出し合って、皆でより良い管理を行うことができました。返却も同様に他のスタッフと協力して行っていました。そして、最後、夜 10 時頃に、借りられているカメラ以外が全て保管庫に残っているか一つ一つ点検していき、一日の作業が終わりました。

もちろん、この作業はシフト制で行われるようになっていきましたが、本業の写真撮影との両立は大変でした。

例えば、午前中に撮影を行い、午後に管理をするという日がありました。しかし、他の多くの方が体験した通り、外は厳しい暑さで、その中をひたすら歩きまわり自分が納得できるような写真を撮影し本部に戻り、そのあと撮ってきた写真を加工・編集して厳選しながら管理の作業を行うのは中々大変でした。それ以外に、加工編集がわからない方やパソコンが使えない方がいたら教えるのも私たちの役目でした。

そして実際、日本人スタッフの中には思うように撮影に行けなかったり、写真を提出できなかったりする人もいました。外国の方との技術の差ももちろんありますが、現に、ジャンボリー新聞には日本人スタッフの写真はあまり載っていませんでした。

ただ今回の 23WSJ で、そのような縁の下の力持ちのような作業を開催国である私たち日本人スタッフが負担するのは大事なことであったと改めて思います。スカウトや外国の方たちにはジャンボリーを楽しんでもらいたかったし、日本は良い場所だなと感じて欲しかったからです。私はこのような心構えはスカウティングにも通じていると思います。振り返ると、スカウトのために奉仕するのが私たちの役目だと、自分自身いつも心に留めて活動をしてきたと思います。

そしてもちろん、スカウトを楽しませるために、自分たちも楽しむことは忘れませんでした。

空き時間には、スワップナイト（バッジ交換会）やスポーツチャンバラ体験、世界各国の屋台料理体験、などの様々なイベントに行ってみたり、会場内のほぼ全てのエリアを見学したりしてジャンボリーでしか味わえないものも楽しみました。また、昨年アイルランド派遣（2014 年 8 月から 1 ヶ月ほど、アイルランドで現地のスカウトとの交流やキャンプ場スタッフとして活動していた）でお世話になった方と一緒に食事をしたり、バングラディシュの方と太鼓を叩いたりと、各国のスカウトとの交流も楽しみました。そしてもちろん日本人スタッフのメンバーとも友情を深めることができました。

このように、奉仕者・参加者としてジャンボリーの楽しさを存分に味わえたのが今回のジャンボリーだったと思います。次回に参加する機会があれば、もっと各国のスカウトと刻流できるように、自分の英語技術を向上して臨みたいと思います。

23WSJ-GDV 液状化現象を展開して

GDV「液状化現象」担当チーフ　友部 昭男

平成 26 年 6 月 29 日第 23 回世界ジャンボリーの面接を機会に心の準備に取り掛かりました。県連より IST の液状化現象プログラムチーフとの任命を受けました。16NJ で行った県連プログラムとの事でしたが前回何をどのように展開したのか一切資料や報告書、情報も無く途方に暮れる始末でした。

人を当てにせず自分なりに液状化現象を調べ資料作りに取り組みました。器材を集め平成 27 年 7 月初旬には準備を終わりました。日本語、英語、フランス語で作成したウエルカムボードや液状化の原因、対策等をまとめ、実際スカウト達が液状化の模型で体験出来れば液状化現象を解ってもらえると思いました。準備万端器材を整え現地に発送しました。

7 月 25 日午後いよいよ現地入りです。ウエルカムセンターで受付をして 1ST の ID とネッチを受け取りました。自分の荷物を背負い、自分達のテントを抱えサイトまで運ぶのですが会場が広く始まる前からバテ気味の状態です。又、食事はスタッフレストランで出来ますが初日から凄い列で夕食を取るのに 1 時間も並びました。まだスカウトや外国隊も到着前でスカウトサイトは草原その物です。

7 月 26 日 IST トレーニングを受け部署毎に別れ説明されましたが全て英語で理解するのにとても大変でした。展開場所の確認をしましたが GDV を展開する茨城県のエリアが有りません、本部に問い合わせしても登録してないとの事、何とか場所を指定された番号に行きましが、またまたトラブルそこには外国の GDV サイトでした。再度 IST 本部で予備の場所をもらってサイトが出来ました。でも 6 区画の一番奥、最悪の状態でした。

7 月 27 日から 28 日にはスカウトが続々現地入りアッと言う間にサイトはテントと国旗で華やかな状態に早変わりいよいよジャンボリーの始まりかと実感しました。午後には茨城 3 個隊を出迎え指導者、スカウトも元気に到着しました。

7 月 29 日アリーナから聞こえる音声も一段と大きくなり開会準備に追われている様子です。夕方我々も制服に着替えアリーナ会場に足を向けました。外国隊のリズム有るコールに胸躍らさられ、エキシビションには各国の国旗が A の順から入場し来賓挨拶は英語で理事長挨拶はフランス語でされたため良く理解出来ませんでした。7 月 30 日から GDV モジュールの展開です。模型は透明クリアの箱に砂を入れ、水をしみ込ませ、箱の中には模型の陸橋を置き、レールに電車を乗せ、家や車を配置して、生活の様子を再現しました。バイブレーターで地震を起こして液状化現象の実験です。

最初に来たのがカナダのスカウトチーム 9 名です。ワクワク、ドキドキで迎えなんとか初めのお客をクリアしました。1 日目の入場は日本隊の 3 班を含め 24 班 179 名のスカウトでした。7 月 31 日のプログラム 2 日目は、17 班 141 名、8 月 1 日はプログラム 3 日目、17 班 71 名でした。又、その日ビジター見学に、ひたちなか第 1 団一行が来られ久しぶりに県の仲間に会えた感じです。8 月 2 日全体行事（アリーナショー）の日でプログラムは休みでした。当日の来賓は皇太子殿下、安倍総理、野口宇宙飛行士の挨拶が有りました。中川翔子さんや EXILE 等のステージショーで会場は大盛り上がりでした。8 月 3 日午前、午後のプログラムで 13 班 53 名、8 月 4 日午前のプログラム 16 班 101 名、この日には水戸第 8 団からビジター見学に 5 名来ました。差し入れの冷やしうどんや冷やし中華が何よりのごちそうでした。8 月 5 日午後のプログラム 10 班 31 名、8 月 6 日 18

班 79 名、8 月 7 日最終予備日で 1 班 2 名でした。液状化現象に訪れた班は予備日を含め 7 日間 98 班 657 名の来場でした。

台風の心配をしながら山口きらら浜に来て翌朝パラッと雨が降っただけの 16 日間、猛暑が続きながらも熱中症にかからず、プログラムの展開が出来て本当に良かったと思いました。又、今回のジャンボリーで茨城県エリアが無かった事が残念でしたが他県のエリアの人達と交流出来た事は大きな収穫でした。会場が広く移動するのはとても大変で疲れました。

世界ジャンボリーのスケールの大きさを体感しました。最後に GDV プログラム「液状化現象」が大きな手応えを持って出来た事、それに関わった多くの仲間達に感謝致します。

第 23 回 WSJ に (IST として) 参加して

フード&トレーディング　園部 恵子

私の所属はフード&トレーディングの中のフードコートでした。水戸 8 団のアランを中心に総勢 25 人、この内 21 人が外国の人でした。

ここは 10 ヶ国の外国料理をその国のスタッフが作って売るところです。これらのお店から出されるゴミの出し方を教えて、きちんと分別されているのかをチェックするというのが主な仕事でした。また、設置されているゴミ箱のゴミの回収や、また別なゴミステーションにリヤカーを引いて取りに行くこともありました。

場所は日本でも環境はやはり世界でした。私の英語力はさっぱりでしたが、若い彼らは想像力を働かせて私の言わんとすることを理解して共に行動してくれました。嬉しくもあり忸怩たるたるものもありました。

フードコートのボスはアラン、彼は 10 ヶ国の店から出されるありとあらゆる要望や苦情の対応に忙殺されていました。

このコーナーは朝 10 時から夜の 11 時までオープンしています。特に夕方になるとシフトを終えた IST たちが集まる場所でもあり、彼らは食べて歌って踊って夜遅くまで賑わうコーナーでした。

私は 7 月 25 日に入ったので 16 日間の奉仕でした。正直長いと感じました。でもこの長さは、やり切るには必要な時間でこれより短いと中途半端な思いが残るのかもしれないと感じました。日本での開催に参加できて広いひろい空間の中で業務の一翼を担えたことはとても誇りです。

最後になりましたが、参加を認めてくださった県連、フードのボスのアラン、八城さん、栃木の星野さん、そして江原理事長を筆頭に圧倒的な団結力を見せてくださった群馬県連の皆さん、大変お世話になりました。

素晴らしい経験をさせていただきました、本当にありがとうございました。

世界スカウトジャンボリーの感想

GDV「液状化現象」担当　池田 敏子

23回WSJにISTで前半参加させて頂きました。2015年夏、山口県のキララ浜の会場の地に立ち、スカウトと同じ空気を感じられたことをたいへん光栄に思っております。

7 月28日、会場に到着して続々と集まっている人々の熱気と興奮は、私の心を一気に震わせました。そして私の目にまず舞い込んできたのは他国のスカウト、スタッフの方々。山口県に来たのではなくまさに国内留学したような、不安の中にもフツフツと湧いてくるワクワク感はスカウト達も一緒だろうと思いながら受付へと進みました。

私は茨城県連盟 GDV モジュールの配属として参加となりました。受付では日本人スッタフの対応がありひとまず安心、その後事前研修を受けて、セーフ・フロム・ハーフのの試験をクリアしてから会場入りとなりました。大会スタッフはおよそ7000人ということで、同じ志を持って参加されている仲間意識を感じましたが、共通語は英語、フランス語。語学のなさに乏しさを感じ、交流することもできませんでした。英語、フランス語の後の日本語での説明を受けました。並んでいる際、北欧の方に比べると日本人（アジア人）は体格的に小さいということは目の当りに感じました。しかし寒冷地の方は特に「ベリーホット」と言っておられ、白い肌が真っ赤に日焼けされていたのが印象的でした。

キャンプ生活に入り、GDVモジュールチーフの水戸8団友部さん、城里1団加藤君、水戸1団鹿野君、石岡3団江原君と大会生活が始まりました。テントサイトは国別でしたので他県の団の方との交流ができ、普段の活動のようにお互い譲り合ったり、協力しあったり労ったりと、唯一緊張のない安心感のある場所でありました。しかし、テント内は35度ともなっていたので、その中での生活はまさに日ごろの訓練の大切さを実感しました。

会場入りして2日目。開会式の興奮と共に祭典の幕が開きました。私たち GDV モジュールもたくさんの参加をいただきました。

準備段階から学生の加藤君、鹿野君、江原君が主に積極的にスカウトにわかりやすい説明考えて頑張ってくれました。若い力に助けられ感謝です。モジュールの部門は朝8時から午後4時まででしたので、夕方5時半に夕食を済ませた後は茨城県連盟副理事長八城様のご配慮を頂きまして、フード&トレーニング部の方々がいらっしゃるフードハウスに GDV メンバーでお邪魔をしました。日本の食で焼き鳥を販売された群馬県連盟、フードハウス管理の茨城県連盟、栃木県連盟の方々との交流をさせて頂きました。また11ヶ国のフード、衣装、歌や踊りを毎夜楽しみに、異文化に触れることができ、スカウトにも負けない位の思い出になりました。八城副理事長をはじめ、フードトレーニング関係者の皆さまに大変感謝いたしております。

8月2日アリーナショーの前に、GDV メンバーと茨城スカウト派遣隊に会いに行きました。GDV から30分くらい歩いて恵那サイトに着き、事前に制作したゲートの隊旗を目印に茨城隊を見つけました。スカウト達も真っ黒に日焼けし頼もしく見えました。日々文化の違いを目の当たりにして刺激をたくさん受けていると思いました。その日行われていた食の文化交流に一緒に参加させてもらい、異食文化に仰天する体験もできました。スカウトになった気分で楽しませて頂きました。

そして参加者全員での夜のアリーナショーでは様々な演出に、他国のスカウトに負けないよう、普段は出さないと思うもう程の歓声を挙げていた日本のスカウトをみて、私も大会ピークの高揚となりました。この余韻のまま大会後半へと繋がっていくことと思いました。

私の参加はアリーナショーで最後となりました。

今回私が参加させて頂いて何ができたかというと、何ができたのかわかりませんが、世界各国からのスカウト、スタッフの方たくさんの方々と共に過ごすことができたことで、世界各国でボーイスカウト活動に携わり、スカウト精神を胸に普段の地道な活動に励んでいる仲間がいるということに帰路に立ちジャンボリー会場を後にした私に、離れても何か繋がっている精神を感じ、私自身が励まされ、充実した気持ちになりました。

23WJ でたくさんの貴重な体験をさせていただきました。一生忘れられない思い出となりました。関係者の皆皆様に心より感謝いたします。ありがとうございました。

23rd WSJ Food House report.

Name: Alan Carswell
Jamboree Delivery Team
Food House Leader

Food House Area Overview

The Food House Area was where different countries set up a “food house” from which they could make and sell some of their national foods. Countries represented were; Hungary, Japan, Holland, Korea, the Arab region, Taiwan, Switzerland, Azerbaijan and Italy. There was also a “Rainbow café”, which was operated by a team of LBGT Scouts. Having so many food houses together in one place made it easy to introduce the participants and the IST to the respective cultures, through interacting with a person from that country or by showing some national costumes or dances. Each food house had a seating area, which provided an opportunity to meet people from other countries, in keeping with the jamboree theme; spirit of unity, or “wa”. The Food House Area was situated on a grassy area in front of Kirara dome, which kept it slightly cooler than other areas in the jamboree. It was close to the Southern Hub, the main adult sub camp, but was situated inside the program area.

Job details

Food House Permanent staff: 3 (down to 2 from August 1st)
IST staff: Total of 25. 2 SAJ participants and 23 non-Japanese.
During the jamboree, it was necessary to work with the food houses to answer their questions regarding electricity, gas and daily operations (operating hours, trash, etc.). It was also necessary to facilitate shopping trips for the food houses to the local supermarket to procure supplies and to the local hardware stores to purchase items deemed necessary for the food houses (sun shades, fans, plywood boards, etc.).

Major problems

1) Poor planning. The food houses didn’t appear to all have the same information from before the jamboree began.

The amount of competition. At the Heads of Contingents meeting in March 2015, the food houses asked how many Scout food houses there would be and how many private operators there would be. The food houses claim they were not informed afterwards.

Invoices for the food houses. A detailed breakdown of charges that would be incurred for hire, gas, etc. was not provided before the jamboree started. The invoices provided part-way through the jamboree (August 5th) were much higher than expected. The confusion caused was avoidable if each food house had been given a clear estimate before the jamboree, as cost was a major factor in pricing and whether a food house would be viable or not.
Both these points could have been negated by providing more information and communication before the jamboree started.

2) Party after the IST closing ceremony.
On the night of the IST closing ceremony, August 8th, after the closing ceremony had finished, there was a party in the Food House Area. This party was not organized by the Food House Area, nor any of the food houses. Food House Area was informed of this party at 9:45pm, 20 minutes before it started. The party, we were informed, had to be in Food House Area because the Yamaguchi police had banned it from the beach and the Food House Area was the only space big enough that was close to the dome that could be used at short notice. The site had to be prepared at very short notice, moving benches and tables to a safe place. The problem here was there were some food houses who had already gone home, leaving a tidy site and empty tents, and there were some food houses taking down their sites. The potential for damage, stolen property and trash was high. Thankfully, nothing serious happened, but again, advanced planning was not in evidence.

Minor problems. These arose during the jamboree, but could be managed on site
1) Trash.

There was a large trash collection point within the Food House Area, where trash would come from small trash collection points. The food houses were diligent in separating their trash and their cooperation ensured the trash was taken away on collection days. There was a lot of trash generated, often leading to borrowing a truck every day and moving it to the bigger collection point behind the staff restaurant. It would have been better if there was more trash collection and siting this collection point away from where people were living.

High school volunteers. These volunteers were placed at three small trash stations, one point was at the Yamaguchi plaza, one in the middle of Food House Area, and one on the road between Food House Area and the dome. There were some good volunteers who made sure the trash was properly separated, but there were times when no one was manning the trash points and the trash became unmanageable very quickly. People didn’t separate their trash when they were not being watched. IST worked hard to separate the trash.
Transporting the trash in a hand cart from the small trash collection sites to the large site at Food House Area was unworkable. The volume of people at the jamboree lead to a river of trash and Food House Area IST were unable to keep up with moving it. Site Management helped by removing the trash from the Plaza site by truck.

2) Not enough English/Japanese speakers/drivers.

Food houses would make requests, e.g. for a driver to go shopping, or for supplies from Site Management, or to get the gas started after it had stopped. For the first 4 days, there were three members of Food House Area permanently on-site. Owing to family commitments, this then dropped to two. If there had been another person who could facilitate communication and drive a truck at Food House Area permanently, the situation would have been easier to manage. Communication problems between Japanese speakers and IST members were obvious once something outside the regular job arose.

3) Long operation hours.

Food House Area operation hours were from 9am to 12midnight every day from July 28th to August 8th. IST worked in teams of five for four-hour shifts. Each team got two days off during the jamboree. They started work at 8am, cleaning up trash and moving trash which had been dropped in the common area. However, with only two permanent Food House Area staff members, time off was exceedingly difficult. Again, if there were one or two more permanent Food House Area staff members, the work load would have been a bit more manageable.

4) Toilets

Toilets at the Food House Area were cleaned once a day by the park staff, but it quickly became clear that this was insufficient, due to the sheer volume of people using them. The food houses suggested that we create a rotation schedule and clean two toilet blocks ourselves twice a day, the block

beside Food House Area and an additional one near the dome. This problem was also alleviated somewhat by the toilet cleaning squad organized by the jamboree. In the end, the toilets were cleaned four times a day.

Good points.

1) The “no alcohol” policy.

The policy of no alcohol made running the Food House Area much easier. Having no alcohol reduced the potential for trouble between ISTs and also between ISTs and participants. It made the area open to all faiths attending the jamboree. Disposing of half-finished drinks would have been problematic. As glass bottles and aluminum cans were not collected every day, the smell from unwashed containers would have been unbearable in the heat.

2) It was a good place for people to come and share experiences. There was a café-like atmosphere most nights, partly helped by not illuminating the central open area, with IST of all ages sitting down and relaxing in the food houses. The Food House Area catered to the full range of ages on the IST.

3) Yamaguchi nights. These two nights July 31st and August 6th, when day visitors could be on-site until late, brought a lot of business to the food houses. The only drawbacks were that they didn’t go home and stayed until the Food House Area closed at midnight, posing to a potential security problem. Also, day visitors were bringing alcohol on-site.

4) Cooperation from the food houses. The food houses were acutely aware of the trash and toilets problems so they were willing to do what they could to help. They adhered to the opening and closing times, because to break these impacted on everyone, especially those who were living in the Food House Area.

Thanks are due to the staff members who lived in the Food House Area site and the IST members who worked incredibly hard to keep the area clean, transport and separate trash.

Summary

The Food House Area was a success. Each food house worked hard and well throughout the jamboree period. The problems faced during the jamboree were not insurmountable, but could have been greatly eased with a few more permanent Food House Area staff members. The major problems stemmed from a lack of communication before the jamboree.

23WSJに参加して

JDTサブキャンプ部　エナサブキャンプチーフ
冨田 光紀

16Njに続いて今回もサブキャンプ部で奉仕をした。サブキャンプ部は、参加者のジャンボリーでの生活全般、つまり睡眠、食事、トイレ・シャワー、プログラムへの参加とすべてのサブキャンプライフが快適に過ごせるようにサポートする部である。

参加隊が50個隊で一つのサブキャンプを構成し、サブキャンプが4つでハブを構成する。ハブが3つでジャンボリーサイトが構成される。40人の隊編成であるから一つのサブキャンプは2000人の参加者となる。

ハブはノーザンハブ、イースタンハブ、ウエスタンハブと呼ばれ、大会奉仕者の宿泊するサイトはサウザンハブとよばれた。サブキャンプにはA～M（Lは欠番）までの日本の山の名前がつけられた。

茨城の派遣隊はイースタンハブのエナサブキャンプに配置された。恵那山は、岐阜県と長野県にまたがり、中央アルプスの最南端に位置し美濃の最高峰2191mの日本百名山のひとつである。

サブキャンプは、チーフとスタッフで運営される。今回のチーフは日本側から1名、外国から1名の2名編成であった。エナはデンマークの Erling Birkbak と2名での運営となった。サブキャンプ運営要綱に基づき、事前に詳細事項をE−メールで打ち合わせをする。しかし運営要綱がドラフト（未決定）なので、疑問点ばかりが浮かび上がる。配給とトイレ・シャワーは、早くから問題となったが、開会式後まで未解決のままとなった。

エナには、日本から9名（茨城から2名）、外国から17名のスタッフ（IST）がエントリーされていたが、期間中に追加され、日本から13名、外国から22名、最終35名の奉仕となった。オーストラリア、ブラジル、デンマーク、フィンランド、アイルランド、オランダ、台湾、スエーデン、イギリス、アメリカ、ポルトガル、ナイジェリアと世界中からの奉仕参加である。

ハブには、縦30m横85mという巨大なプレハブが用意され、その各コーナーにサブキャンプのオフィスが置かれ業務運営をする。これは多目的テントで、配給、演技ステージ、会議、緊急避難等、あらゆることに使用される。

H26年5月の第1回サブキャンプ部会から、私のジャンボリーはスタートした。ポジションは変わっても、前回の16NJのJDTサブキャンプ部のスタッフが主となっているので心強い。しかし、会議には膨大な資料が配布されるが、すべてドラフトであり、先に進まない。日本だけでは決められないので仕方がないのだろうが、問題点や疑問点が続出し、直接参加者へのサービスにあたるサブキャンプ部としては歯がゆい限りである。ハブとサブキャンプの位置づけや業務内容分担に関しても、いまだによく理解できずにいる。

本部集合が7月24日10時であるから、23日に家を出発する。天気も良く快適なドライブ。サブキャンプ本部へ到着報告の後、テントを設営。まだ誰もいないので一番良い所を確保。ハブテント内にはすでに外国派遣隊が宿泊している。航空運賃の関係で開会前に来ていたようだ。まだ配給はない。本部食堂の業務開始は25日の夕食からとなっている。この外国隊の食事に関しては、どこが責任を持つのか不明。大会本部からは自己責任と言われたとのことで、サブキャンプ部に相談に来た。駅向こうのショッピングモールへリーダーを乗せて食糧の買い出しをしたのが、最初の仕事となった。

参加隊の到着までに準備する事は山ほどある。キャンプサイトの割り振りと表示、テントや炊事具の配給の段取り、テーブルや椅子の確認、ゴミ袋や洗剤などの消耗品を各隊ごとに仕分ける、ネッカチーフやハンドブックを参加人数に合わせ準備する、などや、参加隊の清掃分担表や配給の奉仕割り当て表の印刷、さらに次から次へと予定外の業務が発生する。すべてを適切に処理しないと派遣隊の生活が円滑にいかなくなる。ISTも半分くらいしか揃っていない中、夜中の11時12時まで業務が続く。

台風の影響で強風が吹き雨になったのは、26日だったか27日だったか。防風林のおかげでエナのキャンプサイトは風の影響は受けない。このサイトは前回のジャンボリーで水没したところで最悪の場所だったが、県の防災公園として整備されたため排水はもちろんのこと、道路は整備され、照明も整い、なだらかなキャンプサイトは柔らかな草に覆われ、水洗のトイレは完備し最高のコンディションであった。アリーナに遠いのは我慢できよう。

雨が降ったのはこの日だけで、期間中は晴天続きで熱射病が続出する暑さとなった。

世界ジャンボリーなので、公用語は英語とフランス語であり、毎日発行される新聞も英語フランス語で書かれている。サブキャンプ本部での打ち合わせ、エナサブキャンプでのスタッフ打ち合わせ、リーダー会議とすべて英語で行われる。ISTの応募条件も初めは英語での日常会話ができる程度以上であったが、応募者が不足したためかこの条件

は外されたようであった。サブキャンプのスタッフには、アドミニストレーション、プログラム、ファシリティ、フードと四つの業務を交代で割り当て、すべての業務を経験していただくようにした。二日ごとに半日のオフと期間中二日のオフを作った。ジャンボリーに参加しているのだから、奉仕業務だけではなくプログラムへの参加や見学をして大会を楽しんでもらうための工夫である。スタッフミーティング、リーダーミーティングと内容を日本語で確認したいとの要求で通訳を務めた。私の英語力では業務上の会話には支障はなかったが、ネイティブたちのダベリングにはついていけない。日本語も不自由になってきた今日この頃であり、ましてしばらく英語の生活から離れていたため聞き取りができない。言葉の壁は大きく、これが日本人ISTと外国人ISTとの間の溝となっていった。この溝を埋めるのが私の役目とはわかっていても、個別の業務には手が回らない。

ブルーエンジェルの飛行に続いてアリーナでは開会式が始まった。いよいよジャンボリーの開幕である。ここまでですでに7日間が過ぎている。業務に追われ日にちの感覚がすでにない。エナは初日から場外の広島ピースプログラムへの参加であり、早朝の配給や、出発準備で派遣隊の指導者は大変な苦労をしたことであろう。しかし、サブキャンプが不在となったため遅れていた業務がかなり進んだ。

ゴミ袋やトイレットペーパーなどの消耗品の配給がなぜ初めに十分に供給されないのか不思議に思う。どの大会でも終了間際になり供給過剰で余っている。担当部によれば、近場の町で在庫がなく入手できず、遠方から取り寄せたためとのことだが、大会の準備期間は2年間もありいくらでも事前に手配は可能である。担当部の怠慢としか思えない。調理用のガスカートリッジや洗剤なども同様で、生活に支障をきたすところであった。

サブキャンプオフィスでの業務に明け暮れていると、外ではどのようなことが行われているのか全く分からない。毎晩ハブテントで行われる参加隊によるパフォーマンスだけが唯一である。スカウトショップも遠いし、待ち時間が2時間とか3時間と聞き、行く気にもならず記念品などはまたく買えなかった。食堂へも片道30分もかかるし、内容が貧弱で食欲もわかないが、食べないと体が持たないのでしかたなく口にはこぶ。エナサブキャンプサイトと食堂への往復が外部との接点であった。

WOSMのリクエストで、会場内にはWi - Fiが完備され、さらに携帯電話への充電サービスがサブキャンプオフィスで、インターネットカフェがハブテントに設置された。スカウトたちにはプログラム参加よりも、携帯電話の充電が大事なようで1時間2時間と充電の完了までたむろしていた。インターネットカフェは、単なる充電カフェとなり全くの無法地帯となった。緊急連絡としての指導者の携帯電話の必要性はわかるが、参加スカウトがなぜ携帯電話が必要なのかわからない。

世界中から参加したISTは、大会への奉仕をするためにきている。初日二日目とお互いに遠慮がみられたが、三日目を過ぎるころから自発的に仕事を見つけてするようになってきた。スタッフのシフトでの半日のオフや一日のオフにも係わらず、時間の空いているときには積極的に他の業務の手伝いをするようになり、オフィスの運営がスムースに流れるようにこころがけてくれた。このような現場力で今回の大会は大きな事故もなく閉会式を迎えることができた。スタッフの皆様に本当に感謝している。

8月9日15：00は、オフィスのクローズである。何もなくなったサブキャンプサイトを Erling と二人で点検に歩く。もうすでにISTも退出し誰もいない。まだ大会を振り返る余裕などはない。握手をしてバス停に向かう彼を見送る。シャワーを浴び、着替えをして会場を後にする。柳井に眠る友人の仏前を訪れ無沙汰を詫び、やっと帰途に就いた。

JDT	冨田光紀	取手第 1 団
	八城貞子	つくば第 3 団
	吉川　勲	水戸第 4 団
	カースウェル・ジョナサン・アラン	水戸第 8 団
IST	鹿野剛史	水戸第 1 団
	友部昭男	水戸第 8 団
	折田未奈	土浦第 6 団
	坂本惇生	牛久第 2 団
	岡　勇樹	牛久第 2 団
	加藤真治	城里第 1 団
	青山雅樹	筑西第 1 団
	藤田直人	筑西第 1 団
	園部恵子	水戸第 8 団
	柏原一仁	つくば第 1 団
	平原伊純	水戸第 2 団
	池田敏子	石岡第 3 団
	江原樹男	石岡第 3 団

23WSJ ホームステイ HOHO

（1，4，6地区）

■ 7/23（木） イギリス第 65 隊・出迎え

（タイムスケジュール）

16:30　早着・遅延情報発信（連絡：中島→地区担当→＊ホストファミリー宅に修正連絡）
（地区担当　1 地区：平山さん　4 地区：工藤地区コミ　6 地区：高橋委員長）

17:35 着　エミレーツ航空　EK318 便

18:30 頃　到着ロビーで対面　→　JTB の案内でバスに乗車（連絡：中島→地区担当）

19:30 頃＊　ホストファミリー　土浦駅集合（集合場所は次ページの見取り図を参照）

19:45 頃　イギリス隊土浦駅到着　（バスから荷物を降ろして、荷物を持って対面場所に移動）

20:00 頃＊　対面。スカウトをホストファミリーに引き渡し　→　解散・帰宅

■ 7/25（土） イギリス第 65 隊・出発

（タイムスケジュール）

09:30　土浦駅集合　集合場所は 7/23 と同じ
※交通事情等で到着が遅れる場合は、地区担当に速やかにご連絡ください。
（地区担当　1 地区：平山さん　4 地区：工藤地区コミ　6 地区：高橋委員長）

09:50　スカウト引き取り、点呼　→　土浦駅入場

10:10　イギリス隊出発　土浦駅（ときわ 70 号）10:25 発
ホストファミリー解散

（2，3，5 地区）

■ 8/8（土） イギリス第 62 隊・出迎え

（タイムスケジュール）

16:13　イギリス隊土浦駅到着　ときわ 67 号

16:00　ホストファミリー　土浦駅集合（集合場所は次ページの見取り図を参照）
※交通事情等で到着が遅れる場合は、地区担当に速やかにご連絡ください。
（地区担当　2 地区：成願さん　3 地区：本橋副コミ　5 地区：若泉さん）

16:25　対面場所に到着。

16:25　対面式、スカウトをホストファミリーに引き渡し　→　解散・帰宅

■ 8/10（月） イギリス第 62 隊・出発

（タイムスケジュール）

08:00　土浦駅集合　集合場所は 8/8 と同じ
※交通事情等で到着が遅れる場合は、地区担当に速やかにご連絡ください。
（地区担当　2 地区：成願さん　3 地区：宮本さん　5 地区：若泉、生田目さん）

08:10　スカウト引き取り、点呼

08:15　出発、土浦駅入場

08:25　イギリス隊出発　土浦駅（ひたち 4 号）08:39 発
ホストファミリー解散

Unit 65: 23rd - 25th July, 2015

No	First name	Surname	性別	受入家庭
1	Adam	Hogg	男子	西野　幹雄
	Alasdair	Phillips		
2	Oliver	Beatie	男子	佐野　雄一
	Ciaran	McGuiness		
3	Michael	Docherty	男子	根本　浩一
	Cameron	Stewart		
4	Jack	Davidson	男子	山口　健志
	Craig	Doolan		
5	Declan	Bolster	男子	深沢　美由喜
	George	Smith		
6	Ross	Millar	男子	池田　正文
	Scott	Jaffrey		
7	Manos	Kiriakakis	男子	川並　美佐子
	Stewart	Harris		
8	Jack	O'Rourke	男子	小竹　類
	Ben	Francis		
9	Douglas	Robinson	男子	佐藤　大和
	Alasdair	Hannay		
10	Niamh	McLaughlin	女子	藤本　恵子
	Abbey	Roy		
11	Zoë	Gibson	女子	川島　秀子
	Emma	Johnston		
12	Amy	Coulter	女子	鈴木　勇
	Christine	Ferguson		
13	Ellie	Wilkie	女子	黒澤　智幸
	Alexandra	Hunter		
14	Catriona	Arkley	女子	高橋　吉幸
	Drew	Mitchell		
15	Caitriona	Adams	女子	福島　清二
	Emily	Davidson		
16	Paula	Gray	女子	笠原　岳夫
	Rebekah	McMullan		
17	Lois	Craig	女子	吉田　尚美
	Lauren	McCormack		
18	Jessica	Hannay	女子	藤田　尚宏
	Erinna	Haworth		
隊長	Simon	Robb	男子	真中　嗣夫
副隊長	David	Love		
副長	Anne	Bannister	女子	小宅　昭子
	Wendy	Houston		

Unit 62: 8th - 10th August, 2015

No	First name	Surname	性別	ホスト
1	Ellen	Adair	女子	小杉　知生
	Tara	Findlay		
2	Donal	Armstrong	男子	篠崎　あゆみ
	Luke	Carson		
3	Hannah	Armstrong	女子	北條　寿美
	Caroline	Barr		
4	Adam	Crawford	男子	亀田　哲也
	Mark	Mc Cance		
5	Mark	Crawford	男子	小野瀬　裕彦
	Nathan	Gillespie		
6	Rory	Cunningham	男子	
	Harry	Gaston		
7	Conor	Daniel	男子	笹沼　比呂子
	Samuel	Kyle		
8	Owen	Dick	男子	玉虫　由美
	James	Gourley		
9	Sam	Donaldson	男子	小薬　拓巳
	David	Torrens		
10	Sean	Francis	男子	川田　みさ子
	Callum	McCloskey		
11	James	Hadnett	男子	柴田　由美子
	Lewis	Joyce		
12	Rhiannon	Hill	女子	佐藤　和子
	Rebecca	Mc Carthy		
13	Jordan	Leinster	男子	稲川　卓治
	George	Peden		
14	Joe	Mc Cormack	男子	栗山　達也
	Sam	Shepherd		
15	Cameron	Mc Kimm	男子	倉金　芳明
	Charlie	Rea		
16	Diane Ruth	McClements	女子	清水　直作
	Emily	Salley		
17	Sarah	McGowan	女子	高橋　邦明
	Katy	Mills		
18	Daniel	McKissick	男子	小薬　拓巳
	Rhys	Waterworth		
隊長	Peter	Wilson	男子	河添　康徳
副隊長	Danielle	Markwell	女子	藤原　瑞恵
副長	Richard	Morrow	男子	河添　康徳
	Philip	Dalzell		

❖ イギリス第 65 隊

❖ イギリス第 62 隊

解隊式

2015.10.12

0408 隊

0407 隊

0406 隊

TROOP 6
KOREA CONTINGENT
KOREA CONTINGENT UNIT
KOREA CONTINGENT UNIT 6
GORYONGYI
23rd WORLD SCOUT JAMBOREE